

389.24  
N 798n



\* 0055122000 \*

0055122-000

389.24-N798n

南方民族誌

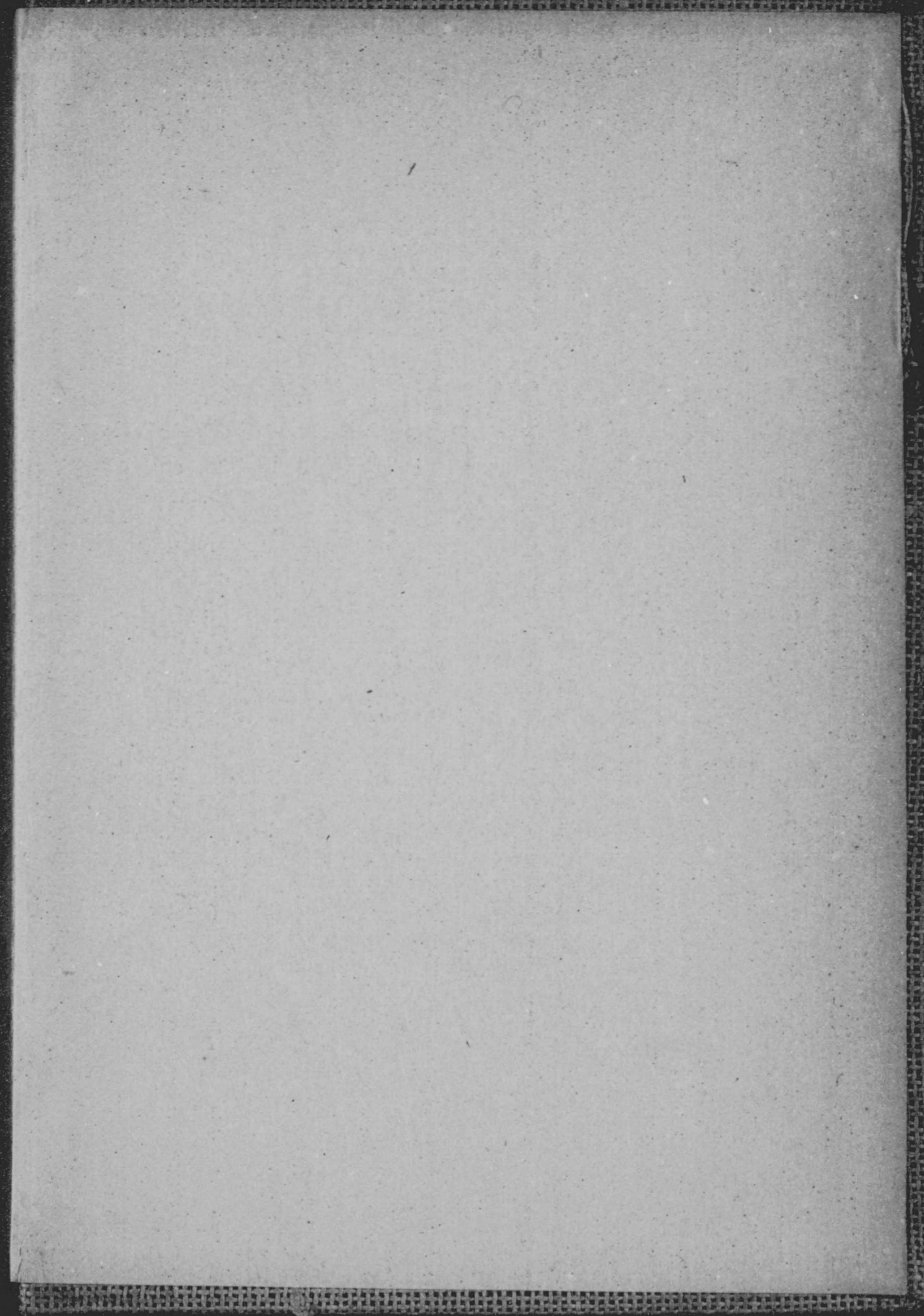
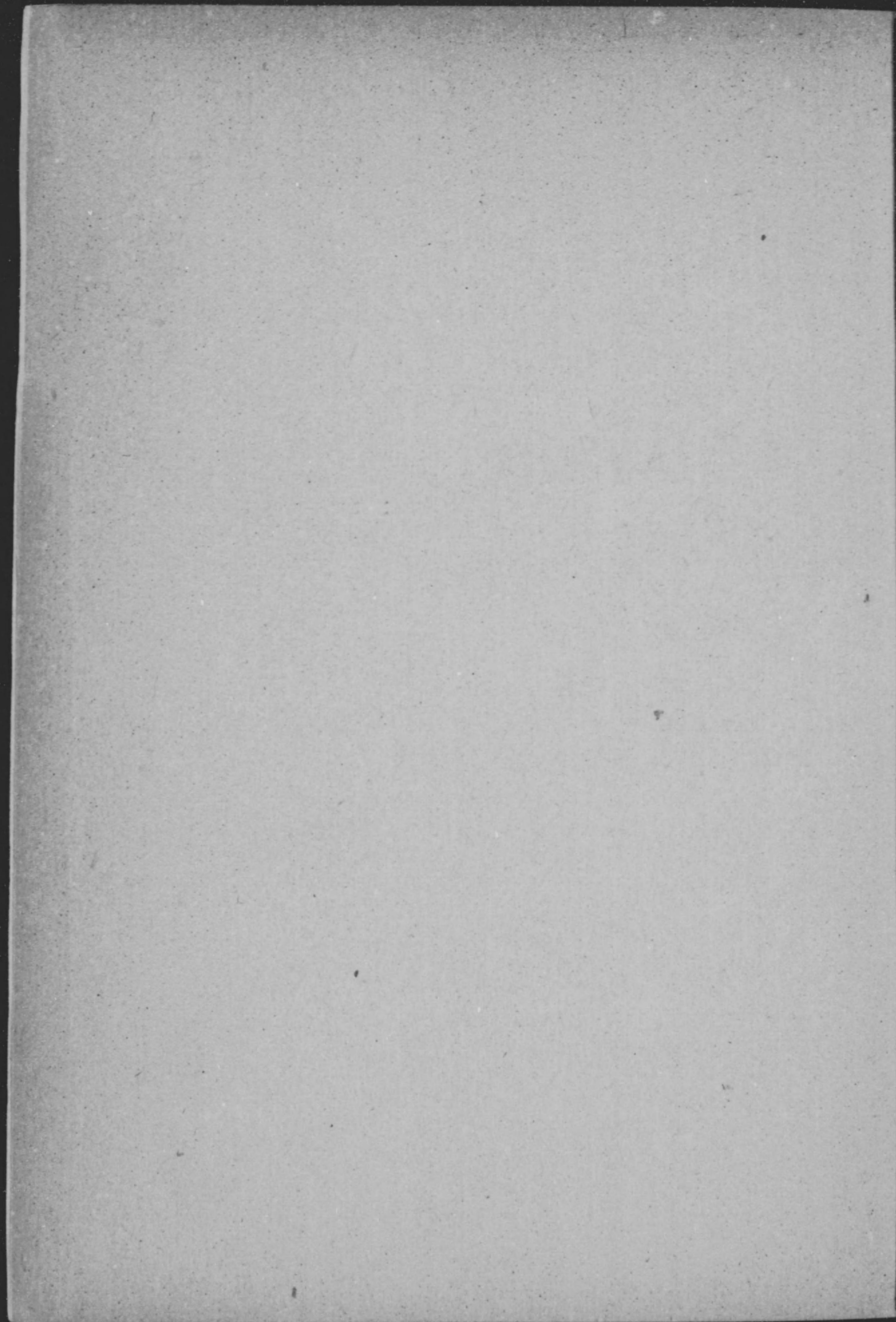
西村真次・著

東京堂

1942

AIE







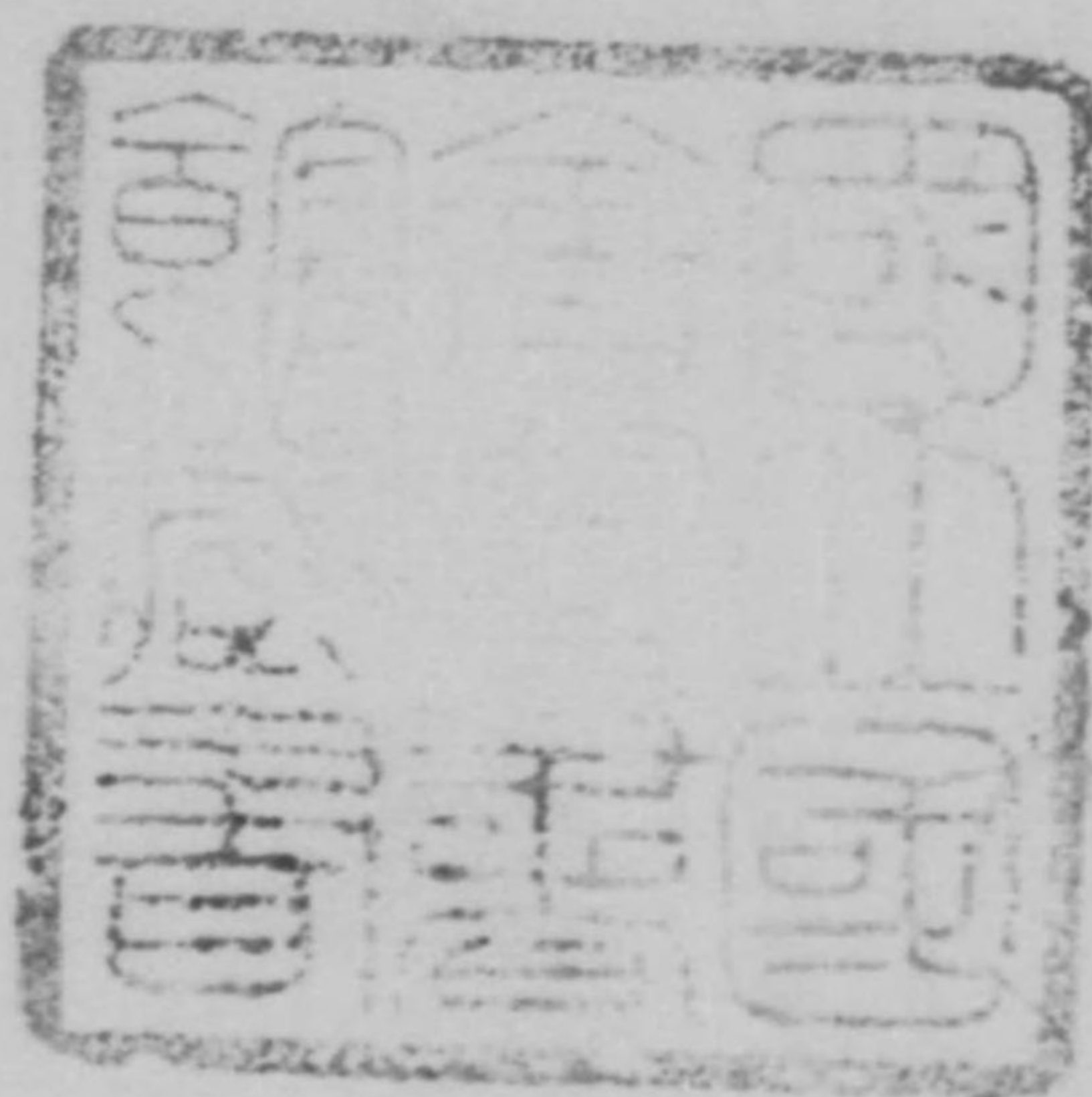
西村眞次著

南方民族誌

東京堂版



389.24  
N798m



31990

## 序 文

明治維新の後、我國策は凡そ進取主義と定まつたが、さて何處に向つて進出し、何物を獲得すべきかについては、各人の間に異つた意見が有たれてゐた。しかし、それは大體に於いて、二派に分れてゐたやうである。即ち一つは北進派であり、他は南進派であつた。そして征韓論は前者を代表し、征臺事件は後者を代表するものであつた。けれども實際の國際情勢は南北とも重大で、いづれかの一方に偏することを許さなかつたから、事實、緊急で急遽に附すべからざる當面の問題を片つ端から始末してゆく外に道がなかつた。

かうして朝鮮事變から日清戦争が起り、皇軍は一方に於いては遼東に進撃し、他方に於いては臺灣を攻略したが、此作戰計畫でも、われわれは南北双方への進出工作が同時・同格的に行はれてゐたことを觀取せざるを得ない。ともかくも、此戦争の結果、臺灣は我邦の領有に歸し



たが、皇軍將士の屍の横はつてゐる遼東半島は露獨佛三國の干涉によつて支那に還附せられ、引續きロシアがそこに占據して、北方から我邦を脅威することになつたので、我邦は主として目を北方に向け、さしづめ緩衝地帯としての朝鮮を扞護することに努めたが、ロシアはそれをすらすら侵す意圖があつたので、朝野の間には非戦論が相當に有力であつたにも拘はらず、遂に日露戦争の開始となつた。

日露戦争は今日から觀れば何でもないのであるが、それらの日には眞に國を賭する大決心であつた。何しろ『未知數』を以て目せられ、『歐洲の最大強國』といはれてゐたロシアを對手として戦つたのであるから、國民の心懸けは譬へるのに物が無いほど眞剣であつた。これより先き英國は日本と同盟を結んでゐたが、それはロシアが日本を攻略して東洋の盟主となることは、英國の年來の夢想である東洋制覇を妨ぐることになるから執つた手段であつた。勿論、日露戦争に際しては、我邦は英國から幾多の便宜を得たには相違ないが、戦勝の眞因は國民の忠君愛國の精神で、日英同盟の如き物は數でもなかつた。しかし、ともかくも我邦が勝利を占めて、ロシアは滿洲攻略の意圖を放棄し、樺太の南半を日本に割讓することになつた。

これで北方は一時落着いたので、南進派は再び頭を擡げ、我國民が眞に働らくべき場所は南方であると叫び、『南洋』といふ語は宛ら我國策の象徴であるかの如き感を第三者に與へた。實際、それらの日に、南方は日本に取つて恐るべき危機を孕んでゐた。我邦が支那やロシアと事を構へてゐた間に、フランスは佛領印度支那を組織して總督を置き、ドイツは膠州灣を占領租借し、イギリスは威海衛を租借し、アメリカはハワイ島を合併し、イスパニヤと戦つてフィリピン諸島を併合し、滿洲にまでも其魔手を伸ばさうとした。こゝには一々書き切れないほど、歐米の東洋侵略は色々の形になつて現れた。うか／＼して居れば、日本も其魔手に把握してしまはれさうになつて來た。

しかし、其時ちやうど第一次世界大戦が起り、ヨーロッパは専ら力を自分達の争覇に費し、アメリカもまた餘力を東洋に振ふことが出来なかつたのに、日本は二度の戦争に勝つて國力が膨張し、尙ほ益々發展する豫兆が見えたので、幸にも東アジアは暫らくの間平和が持續した。我邦は第一次世界大戦には、日英同盟の關係でイギリス側に立ち、海軍を地中海まで差し向けて、聯合國の爲めに『犬馬の勞』を盡したけれど、何らの酬いられるところもなく、却つて戦



後には歐洲の嫉視の的となり、日英同盟廢棄を初めとして、日本を孤立に陥らしめる手段が執られ、寄つてたかつて我邦を襲叩きにしようとする傾きが見えてゐた。

さうした間に滿洲事變が起り、日支事變に發展したので『英米の世界制覇』を夢みてゐた英米二國は、主動者の地位に立つて支那と和蘭とを抱き込み、物質的に日本をいためつけようとして計畫した。ちやうど、第二次大戰が歐洲に起つて、獨伊樞軸側が英米聯合側と鎬を削ることになつた時、日本は多年の目論見であつたアジアに於ける米英勢力の掃蕩を斷行し初めたので、世界はこゝに初めて二つに分れて決戦を試みる日を迎へるに至つた。

昭和十六年十二月八日、對米英宣戰の大詔が降ると、皇軍は遮二無二、ハワイを襲撃し、フィリッピンを攻略し、香港、マライ半島、ビルマを奪取し、蘭領東印度諸島を攻取して、東アジアの殆ど全部に亘る廣地域から歐米の勢力を驅逐し盡したので、日本は多年の念願通り、其地に大東亞共榮圈を樹立しようとしてゐる。此情勢は、いはゞ、明治初年以來、日本民族が企圖しつゝあつた南方進出を、僅々數箇月の間で實現した形になり、如何にも手際のよい、世界史上に類例のない出來事のやうに思はれる。かうした大効果は、勿論、忠勇無雙の海陸軍の力

によつて擧げられたものであるが、其海陸軍は實に日本民族其物に外ならぬのであつて、彼等は其力を過去數十年に亘つて努力し続けた其父兄から繼承したものである。

問題は今後如何なる方針を採つて、大東亞共榮圈に臨むべきかといふ事である。日本の傳統的國策は『八紘一宇』の聖詔に示され、『萬邦共榮』の勅語に窺はれる通り、領土の擴張、人民の征服を標的とするものではなく、諸國家の獨立と諸民族の繁榮とを瞰的とするものであることは明らかである。大東亞共榮圈とは結局『八紘一宇』、『萬邦共榮』の大理想を實現しようとする工作の一部で、それを完成する爲めには、南方諸民族の人種と文化とを知悉してゐなくてはならぬ。

私は大東亞戰の始まる前から毎月諸新聞雜誌に南方諸民族の人種や文化について書き續けて來たが、今回それらを纏めて一冊の書物となし、『南方民族誌』といふ題名下に出版することにした。其内容は三部に分かれてゐる。第一部は前論で、海洋文化と世界の二大共榮圈とを論じて、南方共榮圈の地理的性格を明らかにしようとして試みたものである。第二部は本論で、南方諸民族の人種的・文化的記述を企てたが、一般的なもの、特殊的なもの、様々のテーマを人類學



的立場から多側的、多角的に取扱つてゐる點が特色である。第三部は後論で、南方共榮圈の提唱者である日本民族の性格、理想、歴史を説述して其責務に論及し、われわれが共榮圈に對して働らねばならぬ事共を、二三の象徴によつて例示し、最後に其文化政策を提言した。素より老書生の思ひつきに過ぎぬものであらうけれど、青年時代以來『南進論者』といはれて來た私には、此際ちつとしてゐることが出來ず、病と闘ひつゝ晝に燭をついで書き續けることにした。幸に東京堂から上梓、發行せられる運びとなり、讀者諸君の目に觸れることになつたが、若しいくらでも讀者諸君に裨益を與へるならば、それで私の心は満足するわけである。終りに臨んで、私は私に執筆の機會を與へられた新聞雜誌社と、その出版を引受けられた東京堂とに對して謝意を表する。

昭和十七年五月七日、珊瑚海海戰大捷の報に接した夜

西村眞次

内容目次

【第一部】

第一章 海洋文化論

- 一 はしがき——傳播作用……………三
- 二 文化を規定する海洋の動力……………五
- 三 海洋文化の基調的性格……………一〇
- 四 海洋の與ふる精神的影響……………一三
- 五 統一こそは海洋の有つ動力……………一六
- 六 結言——四海同胞觀……………一八

内容目次



第二章 世界の共存圏

- 一 共存主義の人種的理由……………二二
- 二 獨逸民族の歴史的普遍性……………二二
- 三 複雑なイタリイ人種史……………二四
- 四 フランス住民の種々相……………二六
- 五 イベリヤ半島の住民……………二九
- 六 白耳義人と和蘭人……………三一
- 七 スカンヂナヴィヤと丁抹……………三二
- 八 蒙古的なフィン族……………三四
- 九 二大共存圏の境界劃定はいつか……………三六

【第二部】

第三章 日本と南方との民族的交聯

- 一 緒言——民族的交聯……………四一
- 二 フィリッピン諸島……………四四
- 三 東印度諸島……………四九
- 四 印度支那地域……………五二
- 五 結言——アジャ的一致……………五五

第四章 南洋の諸民衆と其文化

- 一 共榮圏と南洋……………五八
- 二 印度支那地域の住民……………六一
- 三 太平洋諸島の住民……………六四
- 四 自然的結合は神意か……………六七



### 第五章 南方共榮圏の文化

- 一 長生不死薬を求めた探礦家 ..... 六九
- 二 南方文化の諸側面 ..... 七三
  - (一) 神話的側面 ..... 七三
  - (二) 土俗的側面 ..... 七六
  - (三) 技術的側面 ..... 七七
- 三 古代アジャ文化の名残 ..... 八〇

### 第六章 南方共榮圏の呪教

- 一 はしがき ..... 八二
- 二 呪禁から宗教への發達過程 ..... 八三
- 三 印度支那地域の宗教状態 ..... 八五
- 四 太平洋諸島の呪教形態 ..... 八八

五 びすび——科學的文化の光り ..... 九〇

### 第七章 インドネシヤ文化

- 一 自主獨立運動の生起 ..... 九一
- 二 インドネシヤの名稱と意義 ..... 九三
- 三 インドネシヤ族の體質 ..... 九五
- 四 インドネシヤ族の文化 ..... 九七
- 五 インドネシヤと日本との先史的關係 ..... 一〇三
- 六 不思議なのはインドネシヤの過去と將來 ..... 一〇六

### 第八章 東印度諸島の文化

- 一 時代的區分 ..... 一〇九
- 二 先原史時代 ..... 一一〇



三 婆羅門時代…………… 一三三

四 佛教時代…………… 一一四

### 第九章 南方文化史點描

一 南方は世界文化の搖籃…………… 一一八

二 ビテカントロプスとシナントロプス…………… 一一八

三 濠洲からシベリヤまで地續き…………… 一一〇

四 印度文化と支那文化…………… 一一三

五 日子文化と其構素…………… 一二三

六 佛教文化の東漸南漸…………… 一二五

七 世界新文化創造の時代…………… 一三一

### 第十章 大南洋の民俗

一三四

一 緒言——大南洋…………… 一三四

二 ミクロネシアの習俗…………… 一三七

(一) 人種的考察…………… 一三七

(二) 直接身體裝飾…………… 一四〇

(三) 間接身體裝飾…………… 一四三

(四) 食料と住居…………… 一四六

(五) 道具と武器…………… 一五〇

三 大南洋の共同文化…………… 一五一

(一) 人種の移動…………… 一五二

(二) 文化の傳播及び發展…………… 一五四

四 結言——共榮圈の建設…………… 一五六

### 第十一章 南方諸民族の社會慣習

一 緒言…………… 一五九



二 インドネシアの社會慣習.....一六三

- (一) メナンカバウ族.....一六三
  - (二) スマトラのアッチエー族とバタク族.....一六五
  - (三) モルツカ諸島の婚姻と財産.....一六七
  - (四) セレベス島及び近周諸島.....一七〇
  - (五) ボルネオ島の諸部族.....一七二
  - (六) ニュー・ギニヤのカイ族とヤビム族.....一七三
  - (七) バーナロ族の社會組織.....一七六
  - (八) 『處女』なきマダガスカル島.....一七八
- 三 メラネシアの習俗.....一八〇
- (一) トルレス海峡諸島.....一八〇
  - (二) マツシム部族のトーテム規制.....一八三
  - (三) オーストラリアの財産制度.....一八四
  - (四) バンクス島のモイエチイ組織.....一八五

- (五) フジイ島のマタンガリ團體.....一八八
  - (六) ロツマ島のホアゲ制.....一九〇
- 四 ポリネシアの諸規制.....一九二
- (一) ニュー・ジーランドの母本的婚姻制.....一九二
  - (二) 首長の位地と土地の制度.....一九四
- 五 結語.....一九六

第十二章 稻作から見た東亞共榮圈.....一九九

- 一 緒言——『瑞穂國』.....一九九
- 二 籾段耕作が東亞の特徴.....二〇〇
- 三 籾段灌漑の地理的分布.....二〇三
- 四 稻の原産地は印度.....二〇五
- 五 泰國に於ける稻作の狀況.....二〇九



六 『日子文化』と雛段耕作……………二二二

七 結言——共榮圏の紐帯……………二二六

第十三章 腕木附刳舟は南方の文化的特徴……………二二七

一 はしがき……………二二七

二 ポロブールツールの浮彫……………二二八

三 腕木附刳舟の歴史……………二三〇

四 腕木装備の二種類……………二二三

五 縫合段階と遠距離航海……………二三五

六 むすびの言葉……………二三八

【第三部】

第十四章 日本民族の優秀性……………二三三

一 自らを信ぜよ……………二三三

二 論より證據此數字を見よ……………二三四

三 體質的優秀性……………二三六

    (一) 廣頭的傾向……………二三六

    (二) 中位的身長……………二三七

    (三) 人口増加率……………二三八

四 文化的優秀性……………二三九

    (一) 家族國家……………二四〇

    (二) 神人同格主義……………二四〇

    (三) 四海同胞觀……………二四一

五 東になつて進まう……………二四二

第十五章 八紘一字……………二四四

一 世界の中心日本……………二四四



二 皇祖の聖勅……………二四七

三 共榮圏の理念……………二五〇

四 自己完成の必要……………二五三

五 相利共棲的指導……………二五三

六 統制的原動力……………二五六

### 第十六章 古代文化に於ける外來文化の影響

……………二五六

一 固有文化の意義……………二五六

二 文化的諸要素の分析……………二六一

三 異系文化の採用と改善……………二六七

### 第十七章 船型進化と海外發展との交聯

……………二七〇

一 船型と國勢との相互關係……………二七〇

二 先史時代——列舟……………二七三

三 古代——新羅、高麗、百濟型……………二七六

四 中代——大和型船の完成……………二七八

五 近代——ミスツイス造り……………二八一

六 現代——ヨーロッパ型艦船……………二八三

七 結言——日本型の創造……………二八六

### 第十八章 日本船の南方進出

……………二八八

一 三百年前の南方……………二八八

二 八幡船の活躍……………二八九

三 九艘船の進出……………二九一

四 御朱印船と其構造……………二九三



- 五 南洋の日本町……………二九六
- 六 太平洋を横断した日本船……………二九九
- 七 日本民族の發展力……………三〇一

### 第十九章 大東亞共榮圈の歴史的背景……………三〇三

- 一 生存協同の原理……………三〇三
- 二 日清戦争と日露戦争……………三〇五
- 三 第一次世界大戦……………三〇七
- 四 滿洲事變から日支事變へ……………三〇九
- 五 第二次世界大戦と大東亞戰……………三一
- 六 傳統的國策としての共榮圈……………三一二

### 第二十章 日本民族理想の實現……………三二四

- 一 民族理想は歴史的的存在……………三二四
- 二 民族理想の生物學的理據……………三二六
- 三 進取主義……………三二九
- 四 多産主義……………三三二
- 五 協力主義……………三三三
- 六 大東亞共榮圈の實現近し……………三三五

### 第二十一章 日本語を醇化し日本字を創造せよ……………三三七

- 一 はしがき——止揚か創造か……………三三七
- 二 文學の基礎は言語……………三三〇
- 三 日本的な日本語とは何か……………三三五
- 四 日本文字の創造が急務……………三三八



五 ひすび——新體制時代……………三四五

第二十二章 國語圏の擴大と國語質の醇化……………三四八

一 漢語流行は時代錯誤……………三四八

二 文部省の漢字制限……………三五二

三 國語圏と國勢圏とは一致す……………三五三

四 日本語の南方進出工作……………三五七

五 日本語の愛護培養に努めよう……………三六二

第二十三章 文化政策への提言……………三六五

一 日本の立場——一元二側……………三六五

二 基礎的政策は日本文化の成全……………三六六

三 教育の徹底が第一工作……………三六九

四 民族文化の調査機關設置……………三七二

五 世界史に新史實を記録せよ……………三七三



第  
一  
部



## 第一章 海洋文化論

### 一、はしがき——傳播作用

地表上の水陸分布は、未探検地が必ずしも少くないので、精確な計算は今日でも尙ほ不可能であるが、地表の全面積は五億一千万方キロメートルあり、其中、全陸面が一億四千二百万方キロメートルであるから、残りの三億六千八百万方キロメートルが全水面であると見るのが、最も真に近い数字だらうといはれてゐる。假りに之を正確なものとすれば、海面は地面の二・五九倍あるわけであるから、海洋を利用するものは陸地に跼蹐してゐるものより、約二・五九倍の生活實績を擧げ得る理窟である。

ところが、さう簡単に理窟通りにゆくものではない。ラッツェルもいつた通り、人間は其全



體的組織から観ると陸棲動物であつて、水上に於ける滞在は如何なる場合に於いてもほんの一時的で、固定的な居住は行はれない。實際、如何なる瞬間に於いても、何百萬といふ人間が水上に生活し、且つ居住するが、全生涯を船中に送つた人間でさへ、老年には陸に戻り、そこに安住して、永遠の憩ひの場所を求めようとする。即ち海面の利用には限度がある。其限度は然らば如何なる規準によつて決せられるかといふに、大體、文化の段階に相應するやうである。

それ故に此點に着眼した昔の歴史家は、人間文明の歴史を三つの段階に別け、第一を河川文明、第二を内海文明、第三を大西洋文明としたが、現世紀に於いては更に一段階を加へて、第四を太平洋文明としなければならぬ。第一段階はエジプトやメソポタミヤの文明をさし、第二段階はギリシヤやローマの文明をさし、第三の段階はポルトガルやイスパニヤが活動してアメリカを發見するに至つた時代の文明をさしたのであるが、近世の初めから世界の文明は次第に大西洋を去つて、徐々に太平洋に移行しつゝあつた。

いふまでもなく、かうした文明の進歩は、人間の科學の發達に正比例して、造船、航海、交易、生産の技術が昂揚せられ、人間の海洋を利用することが多くなつた結果であるが、然らば

海洋はそれを利用するところの人間に何を齎らしたか。獨り人間のみなならず、あらゆる生物の進化を考察したウィリスは、海洋の有つ大きな力は傳播であるといつた。人間の文明の進歩は素より發明に負ふところが多いけれども、それを一般に傳播せしめることがなかつたならば、全體の文明は進むものでない。そして其傳播は海洋によつて最も効果的に行はれるが故に、海洋を利用するものゝ文明は普及力、指導力を有つことになり、同時に普及力、指導力を有つたところの文明は、海洋をよりよく利用し得るやうなものから生れるともいひ得るのである。何にしても海洋と文明との交聯に於いて、最も大切な性格は『傳播的』といふことである。

## 二、文化を規定する海洋の動力

海洋文化を論ずるに當つて、われわれは先づ基礎的條件として、文化を規定する海洋の動力を考察しなければならぬ。

第一に擧ぐべきは海面の大きさである。原始時代に於いては、若干の除外例はなきにしもあ



らずだが、大體、水上運搬具が幼稚であり、其推進力は棹櫂に過ぎないから、到底大海を乗り切る力がなかつた。河川は相當遠距離まで溯航、或は下航し得たから、距離は問題外として、耐波性の強弱が海面の大小に深い關係を有つことになる。次ぎに帆具の發達に従つて、内海から外海に出ることが出來、更に汽機の發明によつて大洋を航行し得るに至るのである。

第二に擧ぐべきは海陸を分界するところの汀線である。(1)汀線が地面の長さにして長ければ長いだけ港灣が多いわけであるが、港灣の多いといふことは、水産、造船、航海、貿易、防禦など、經濟的・工業的・軍事的に有利な場合が多いことを示してゐる。(2)長い汀線が海を挟んで並行してゐる場合には海峡を作り、軍事上、交通上に對する繁榮の要因をなす。(3)港灣の大きいものが内海で、其效用もまた一層大きい。(4)大洋は海面の大きなもので、大西、印度、太平の三洋が代表的である。それらの面積を順々に擧げれば、大西洋は七千九百七十萬方呎、印度洋は七千二百五十萬方呎、太平洋は一億六千一百十萬方呎である。地中海は僅かに二百九十萬方呎で、三大洋に比べれば物の數ではない。如何にフェニキヤが榮え、ギリシヤが榮え、ローマが榮えたといつたところで、多寡が知れてゐる。それらに比べれば近世の大西洋

文明、現今の太平洋文明は遙かにスケールが大きいが、此スケールの大きさといふものが文明の質量と一致するのである。

第三には海洋に規定せられる地面の形狀が擧げられる。たとへば島、半島、地峽、沿海平地といふやうな類は、それ／＼文化を規定する動因として注目せられる。(1)島は生物學的には保存力がよく働らく代り、發生力が強くないといはれるが、人間の生活は動植物と異るところが多く、格別性を有つてゐるから、生物學の原則のみで之を律するわけには行かない。フェッブルの考へに依ると、島には孤立型と中繼型とあつて、前者は孤立の故に多くは保守的であるけれど、往々にして自己發展的、創造的文化を産み出すことがあり、後者は交通頻繁の故に、大體、活動的で、外來文化の刺戟が多いといつてゐる。彼れはこれらの外、更に大陸に接近した縁邊型ともいふべきものを擧げ、其一例として我日本を擧げ、かうした地的寰界は指導的、發展的作用を見ることが出來るといつてゐる。(2)半島は海灣を抱いてゐる場合に於いては、港灣として作用するけれど、海中に斗出して長い汀線を有たぬやうな場合には、文化的に貧弱な位地をしか占めることが出來ない。(3)地峽も半島と相似した性質を有つてゐるが、往々に



して住民に慣海的性格を興へる。(4)沿海平地は多く狭長で、地味が肥沃でない爲め、海の彼方に財寶を求める心を住民に興へる。西アジアに於けるフェニキヤ人、我邦に於ける出雲人の如きは其適例である。

第四に擧ぐべきは海流である。(1)北大西洋環海流はコロンブスを西印度諸島に運んでアメリカを發見せしめ、(2)南大西洋環海流はヴァスコ・ダ・ガマを印度洋に動んで、歐・印・米間の文化的交聯を作つた。(3)太平洋に於ける北赤道海流は北流して日本を包み、一は日本海に入り、他は東走して米洲の岸を洗ひ、(4)南赤道海流は南東流してインドネシヤ、メラネシヤ、オーストラリヤを連結してゐる。(5)印度洋に於ける海流は、インドネシヤ文化をマダガスカル島に運んで、印弗間の文化的交聯を作つてゐる。これらの海流はいづれも、地球上に於ける人種の移動と文化の傳播とを容易ならしめた自然的動力で、人爲的動力を發生せしめる因子となつた。

第五には候風が擧げられる。緯度三十度のあたりから赤道に向ふ地面の氣流は、北半球では北東風、南半球では南東風となる。これらが謂ふところの『北東貿易風』及び『南東貿易風』

である。又赤道から緯度三十度のあたりに向ふ氣流は、北半では南西風、南半では北西風となる、これが即ち『反對貿易風』といはれるものである。貿易風の名が示すが如く、これらの風向を利用して帆船時代の航海と貿易とは營爲されたのであつて、人間が巧みに自然事象を利用して、其文化を昂揚し來つたことは此一事でもわかる。アジアに就いて之を觀るに、五月乃至六月には印度洋からヒマラヤに向つて南西風が吹く、それが所謂『南西氣候風』で、恒河溪谷では南東の方向に吹き、南支那では南に偏し、北支那では東に偏してゐる。之に反して冬季に於いては『北東氣候風』が吹く。東洋人は夙に此氣候風に注意し、古代から中世を通じて、季節々々の風を利用して商船を帆走せしめた。

以上、五つの動力が海洋に面して住む諸民衆、諸民族の生活を規定して、彼等に内陸に住んでゐる諸民衆、諸民族の生活とは異つた性格を興へ、謂ふところの『海洋性』を有たしめたといふことには疑ひの餘地がない。然らば海洋的性格とはどんなものか。これに答へることは容易でない。



## 三、海洋文化の基調的性格

われわれは海洋文化の基調的性格として、多くの人文地理學者が考へる如く、先づ『活動的』であることを擧げ得る。しかし、活動的といふやうなものは山岳文化にも平地文化にもあり得るもので、之を海洋文化の特殊性格とすることには支障がある。

何といつても文化を海洋的ならしめる第一の徴憑は、其航海性能でなくてはならぬ。航海性能が豊かでない民族の間では、決して海洋文化は作られない。エジプト文化は河川的のものであつたけれども、其航海技術は驚くべき程度に發達し、クレタ文化に發生を與へた。クレタ文化がギリシヤ文明、ローマ文明の母胎であることはいふまでもなく、其最發達形たるローマ文化の海洋的性格は、ローマの複層多層船によつて代表せられる。われわれは今日、クレタのクノッソス宮殿の發掘によつて、あの地中海中の小島に完成された海洋文化が、どんなに燦爛たるものであつたかを知ることが出來、其藝術の一例から觀るだけでもギリシヤを凌ぐ力を有ち

得た所以が、海洋性に富んでゐた爲めであることに想到せずには居られない。ギリシヤの藝術は半島的であり、ローマの藝術は陸地的であつた。かうした藝術的 theme 及び表現の變化が、遂にローマをして其偉大さを維持することが出來ない境地に陥らしめたのであつた。

フェニキヤ人のカルタゴ建國、アラビヤ人の東洋貿易、ヴィキングの北洋活動などが其航海性能に基づいたことはいふまでもないが、彼れ一時、此れ一時、ボルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリスと、次第に海上權力が移動していつたのは、皆其民族的精神の張否に由るのである。アメリカがイギリスから獨立して、其國勢がいくら膨脹しても、今日まで海權を握ることの出來なかつたのは、全く航海性能に缺けてゐた爲めである。獨逸が隱忍十年の努力精進によつて、歐洲に於ける霸權を握り得たにも拘はらず、目と鼻の間であるイギリス海峡を越えて、今まで敵國に上陸作戦を敢行し得なかつたのも、實は航海性能の缺陷であるといはなければならぬ。ヒットラー自身がいつてゐる通り、獨逸は『陸』に於いて無敵であることを理想としたのが實ならば、獨逸の文化は大陸的性格のものと觀なければならぬ。

第二に海洋文化を特質づける徴憑は造船性能でなければならぬ。これは航海性能と兄弟的關



係を有つもので、一方が興れば他方も必らず興るべき筈である。古代に在つては造船原料としての良材が山に在り、造船地としての良港が海岸に在り、造船技術家としての良工が國內に在るといふことか、造船性能の三必須条件であつたが、現代に於いては必らずしもこれらの全部を具備しなければならぬことはない。それは今日は昔日と異つて、平時には物資の相通が廣範圍に亘り、自國にないものを他國から融通することが出来るからであるが、戦時には有無の交換が圓滑に行はれない故に、昔と同じく自給自足の出来る民族のみが、十分に造船性能を發揮し得るわけである。

前述の三条件の中、一番大切なのは人的条件で、若し造船建造の設計、意匠、施工に於ける技術的天稟を缺いてゐたならば、いくら物的資源が豊富で、山に良船材があり、海岸に良船渠があつても優秀な艦船を造ることが出来ない。在來イギリスは多年に亘つて、世界に冠たる造船性能の把持者だと自負してゐたが、近年アメリカが其株を横奪したやうに誤信し、其自負者と誤信者とが手を組んで日本を壓迫し、五五三比率を我邦に承認せしめてから、我邦の技術家は慘憺たる工夫を傾盡して裝備を改造し、五五三比率内に於いて五五五効率を其艦艇に保有さ

せた。かくの如きは全く技術的天稟を有つてゐたから出来たことで、たゞの努力や精進だけでは實現が不可能で、全く民族性に歸すべきものである。

叙上の二性能が海洋文化の基底の因子であることはいふまでもないが、さうした性能を民族に與ふるものは、實は海洋それ自身なのである。即ちそれは海洋が人間に與ふるところの精神的影響に外ならぬのである。

#### 四、海洋の與ふる精神的影響

山間に住めば山が其住民に山岳的氣質を與へるやうに、沿海に住めば海は其住民に海洋的氣質を與へるのが通則である。しかし、人によつて其影響を受けないことがあるのは、全く遺傳と教養とに因るのであるから、天稟と鍊成とが大切であることはいふまでもない。

海洋が人間に與へる精神的影響は色々あるが、引括めて云へば所謂『慣海性』こそは其主要なものであらう。波濤を枕として海上に眠る底の慣海性は、全く常に海を望み、海に働らき、



海に起居するものでなくては得られぬものである。海岸に立つて廣大な海に望むと、云ひ知れぬ魅力が其人を海の彼方に吸引する。此吸引力が知らず／＼人間に慣海性を興へるのである。洶湧する波濤、耳を劈く海鳴を、勇ましい線條と見、美くしい音調と聞く人にまで、海は愉しい人生の樂園、なつかしい慰安場である。安土桃山時代から江戸時代早期へかけて、南洋の天地に奇貨珍寶を求めて、日本民族の生活を豊かにした御朱印船の古圖を見ると、甲板上には男女が居並んで奏樂と吟詠と舞踏とに彼等の航海を娛しんでゐる有様が描かれてゐる。かやうに海を享樂し得る日本民族の性格は、先行するところの室町時代に於ける倭寇から承け繼いだものであり、倭寇のそれは元寇の際に木の葉の如き小船から鉤を敵の大艦にかけ、飛び移つて敵を斫りまくつた鎌倉武士から承け繼いだものであり、鎌倉武士はまたそれを祖先から承け繼いだのであつた。

此慣海性が反對の状態に置かれると、恐水性ともいふべき悪性格になる。忌はしい例ではあるが、我邦の江戸時代民衆には『板子一枚下地獄』といふ諺のある通り、一種の恐水性が馴致されてゐた。それは寛永の鎖國令以後急激に發生した變態的性格で、此間我邦の國勢は甚だ振

はなかつたが、明治維新前後に全く拂拭されてしまつた。

セムプルもいつたやうに、海洋と歴史との交聯は、われわれに慣海性といふものが、三つの顯著なる作用をすることを注意せしめる。慣海性は屬性のはつきりわからない複合性格であるが、それは軍事的作用を起すとピラシイになる。ピラシイは海賊性ともいふべきもので、英國が印度及び其附近を侵略した行動は、全くそれに基づいてゐるが、それが道徳化されると、堂堂たる海防性になる。また慣海性が平和的作用を起すと貿易性及び漁撈性になる。貿易性は有無を相通し、東西を交換して、世界萬國の利益を均霑し、人類共同の繁榮を招來するものである。在來の國際貿易は利己的のものであつたが、今後のそれは利己的であると同時に利他的でもあらしめなければならぬ。相利共益的であつてこそ貿易は始めて理想的だといふことが出来る。漁撈性は貿易性の中に含めてもよいが、又獨立させても然るべきもので、魚類、獸類、鳥類、貝類、海藻、等々を色々の手段で海洋から採獲しようとする動向、意圖及び實施をさす。地球の表面の七割四分一厘を占める海洋に於ける諸物資の採獲は、たしかに人間の物質生活を豊化するもので、此性能こそは直接的に人間を濕ほすことになる。



## 五、統一こそは海洋の有つ動力

海洋と文明との整調は、さながら人間の血管と神経との如きものであると、人文地理學者ハ  
ンチントンはいづたが、これはセムプルの指摘した海洋の有つ『統一』の動力と同じものであ  
る。統一こそは實際、海洋の有つてゐる動力の中一番主要なもので、それは人種的、文化的、  
二つの作用をする。

第一には人種的統一が擧げられる。世界に種族は多いけれども、人種に纏めれば、ホモ・エ  
チオピクス（黑人）、ホモ・カウカシクス（白人）、及びホモ・モンゴリクス（黄人）の三つにな  
る。アメリカのインディアン（如きはアジアから海流其他によつて遠古に移動したもので、人種  
學的にはモンゴリクスの中に入れられるのである。これら三人種も元を質せば、たゞ一種のホ  
モ・サピエンス即ちヒトであるに過ぎない。昔から『横目縦鼻』といふ通り、黒種も白種も黄  
種も、皆な目は横につき、鼻は縦について居り、立つて歩いて、四つん匍ひにはなつてゐない

のである。人類源説は今日では疑ふべからざる科學的事實である。

黒人種はゴリラから出たし、白人種はチムパンジイから出たし、黄人種はオーラン・ウタン  
から出たと、アメリカのクルックシャンクはいふが、それは有色人種を白色人種から強ひて區  
別しようとする僻見で、かうした人類復原説は科學的に肯定し難い。

一つの原がいくつにも岐れ、世界中に廣がるのには非常に長い年月を経たから、其間に地球  
の表面は色々變り、今日の島嶼も昔は地続きであつたりして、皆が皆海洋によつて分布された  
とはいひかねるけれども、海洋が人種分布に重い役目を勤めたことは疑問の餘地がない。反對  
に種族がいくつにもわかれ、種族がそれ／＼國家を建てるやうになつてからは、或は海流によ  
り、或は氣候風により、或は船舶により、ともかくも海洋を媒介者として、それらの種族、民  
族が觸接し、理解し、協同して、自分達は勿論のこと、人類全體の利益と平和と繁榮とを來さ  
うとする欲求を懷くに至つたことは事實である。

第二には文化的統が一擧げられる。文化とは結局人類の生活様態で、大にしては種族、民族、  
小にしては家族、個人も皆それを有つてゐるが、それは各民族、各種族、各家族、各個人で多



少づゝ異つてゐる。しかし、異つた生活様態を有つた個人が幾人か寄つて家族を構成し、他の家族に比ぶれば類同した生活様態を有つてゐるやうに、民族には民族特有の、自分達に共通した生活様態があるものである。甲の生活様態の粹を抜いて乙のそれに移し、乙の勝れた文化を丙に攝取せしめるといふ風にして、これまで人類の文化は進化して來たのである。それは確かに民族や種族が孤立し、反目しては出來ない相談で、接觸し、親近して後に初めて出來ることである。そして其接觸、親近を取り持つものは、主として海洋なのであるから、海洋こそは文化の統一に重要な役目を勤めるものといつても差支へないのである。

## 六、結語——四海同胞觀

以上の諸性格を帶著した文化が、謂ふところの海洋文化である。されば海洋文化とは、世界の有無を相通し、過不足を均霑して、諸民族をして互に親近し、互に其生活様態を改善して、共同の平和と繁榮とを來らしめる目的を、主とし海洋によつて達成せんとする文化機構である

といふことが出来る。

かう觀て來ると、海洋文化は海洋國家、海洋民族のものでなくてはならぬ。それらの國家民族の中、逸早く如上の目的を懷き、それを實現しようとするものが、指導的、發展的、統一的位地を世界の表に占めることが出来る。侵略主義の海洋文化は、今や海洋の底深く沈められなくてはならぬ。四海同胞、世界一家の理念を實現する如き海洋文化のみこそ、今後の世界人類に平和と繁榮とを賦與するであらう。

一國の利益の爲めの防案としての舊性質を海洋は既に失つた。海洋の新性質は統制によつて諸民族の繁榮を保障する爲めの壓力としての海防に存在を許すであらう。

過去一世紀に亘つて自負し來つたイギリスの海洋文化は、今にして思へば舊性質のものであつた。われわれは畏くも皇祖神武天皇の肇國の詔の中で宣せられた八紘一宇の大理想と、今上天皇が昭和十六年十二月八日に宣布せられた對米英宣戰詔書の中に示され萬國共榮の大觀念とに、今、日本民族が建設しようとする努力してゐる大東亞共榮圏の根本理念を探ね得ると同時に、大東亞共榮圏こそは謂ふところの海洋文化の主體でもあることに想到し得るのである。われわ



これは聊か抽象に傾いた此海洋文化論を、最後の短き結言に於いて具象化し得たことを怡悦するものである。

## 第二章 世界の二共存圏

### 一、共存主義の人種的理由

アジアに於いて日本の指導下に、大東亞共榮圏の建設が逐日具體化されてゆくやうに、ヨーロッパに於いても獨逸の主唱下に、歐洲廣域共存圏の樹立が漸次事實化されつゝあるが、かうした共存圏の成立には、上層的な國際政治的理由の外、基盤的な人種文化的動因が儼存してゐて、在來の小民族的分裂主義を氣前よくかなぐり棄てる代り、大種族的共存主義を勇らしく取り上げることになつた新機運が後押しをしてゐるのだ。

此新機運は利己主義の英米兩國と其傀儡である附和諸國とを打倒して、多年其壓迫下にあつて搾取されてゐた諸小國家を救出し、彼等と共に平和と繁榮とを享受しようとする共存主義の



獨伊兩國によつて捲き起された政治・軍事・經濟的風雲に外ならない。いふところの『共存主義』は、人種・文化的基盤の上に構築せられた生活理想であつて、苟も利己主義でないところの諸民族、諸種族は皆之を支持し、之に協同し、之を體現することを吝まない筈である。

私は今、歐洲に於ける第二次大戰以後に於いて、獨伊樞軸側に加擔してゐる諸國民——即ち歐洲共存圏内の諸民族について、簡單な人種學的考察を加へて、彼等が人種的に共存共榮しなければならぬ理由を、讀者諸君が自由に引き出して見る便宜に供しようと思ふ。

## 二、獨逸民族の歴史的普遍性

歐洲共存圏樹立の提唱者たる獨逸國民の根幹をなす人種的因子は、歴史的に恐ろしき『普遍性』を有つたゲルマン種族で、その發生、展開を述べれば、今日の彼等の企畫、實施、動向といふものが自から領解せられて來る。

極く大まかに云へば、獨逸は北方低地と南方高地との二つに劃られる。低地は始め南ロシアから來た原ノルド種といふ草原民衆で占められ、高地は常に歐亞的種族の住地になつてゐた。獨逸人類學者の考へに依ると、かの正顎の化石人骨クロー・マニヨン種が、ゲルマン民衆、特にザクス族の構素となつてゐることは確かだ。新石器時代には獨逸全體にノルド種の一變種が占據し、著しい文化と異つた頭形とを有つてゐたが、最後の氷河期が終つて、氣候が溫和になると、此ノルド系の住民はスカンデナヴィヤ半島に移動した。ところが其後、悪化した氣候の爲めに追ひ立てられて、青銅時代晚期、即ち紀元前三五〇年頃、また元のゲルマニヤに歸つて來た。それが即ちゲルマン種族で、ゴート族はオステルゴートランドから、ゲピット族とランゴバルト族とはスカニヤから、ブルグンド族はボルンホルムから來た。最後にブルグンド族の來たのは紀元三世紀末のことであつた。

紀元、五六世紀までのゲルマン族の移動の歴史は、逐一述べると甚だ興味が深いけれども、煩はしいから、ブツゲルスの歴史地圖に依つて略記すると、ゴート族は二世紀に黒海の北、ドニエプル河流域に東ゴート國を建て、四、五世紀にはバルカン半島、アルプス山麓を経てイタリヤ半島に入り、更に北上してロース河を越え、イベリヤ半島のセヴィルラに達してゐる。



東ゴート人の一部は四世紀末に分れてドナウ河流域に西ゴート國を建て、アルプス山下を西進し、イベリヤ半島に占據するに至つた。

東ゴート族の西移は、東方から匈奴の一支族たるフン人が進出し來つた爲めである。フン人は裏海の北からヴォルガ、ドン、ドニエプル、ドニエストルの諸河を渡り、五世紀に一隊はギリシヤに入り、他隊はブルグンド、フランク、チューリングの諸地域を漂泊した。かうしてフン族の血液がゲルマン族の血管に流れてゐる事は、色々の體質的特徴によつて否定出來ない。

六世紀乃至九世紀にスラヴ系のヴィスチュラ族が侵入して、エルベ河以東に占據したけれども、やがて其矢地を回復し、其生活をゲルマン化した。東プロシヤの住民にスラヴ的要素の多いことが證明する如く、之に依つてスラヴの血が混淆したことは認めなければならぬ。

此外新石器時代に、西獨逸から山岳地方にアルプス種の入つたことも認められる。

### 三、複雑なイタリア人種史

イタリアの人種史は、チベル河以北と以南及び諸島嶼とで大分異つてゐる。南イタリアの住民は大體地中海種で、中石器時代若しくは新石器時代にアフリカから海路によつて移住して來たものである。サルチニヤには歐弗系の血の入つた痕跡がある。イタリア人やアルパニヤ人の植民は、永い間に東アフリヤの人々の頭形を短くした。マグナ・グレキアのギリシヤ植民は、原住民と同じ地中海種だけれど、多少歐亞的血液を傳へたであらうことが、サレルノ地方に短頭型の多い事で推論せられる。しかし、各種の探礦者がゴゾ島に現はれた如く、南イタリアにも上陸したとすれば、彼等によつて短頭型が齎らされたと考へられぬこともない。短頭型人骨はシシリ島のパレルモでも見出されたが、それは新石器時代末のものらしい。

一般の信ずるところでは、北イタリアの新石器時代住民はイスパニヤから來た。青銅時代早期、即ち紀前二〇〇〇年頃、頭形の廣い湖上住居族が、スイスからロムバルディに來り、同時代中期、紀前一八〇〇年頃、アルプス種、多分鷲鼻人がボスニヤを経てガリシヤから入り、エミリヤでテレマレ人となつた。ウムブリヤ人はアルプス種で、ノルド種の指導の下に、鐵器時代にドナウ盆地から南下して、ハルスタット文化を將來したが、それがイタリアでヴィラノ



ヴァ文化に發達した。此種族は前記のテレマレ人を驅逐したが、後者はラチウムに入つて、紀前七五三年にローマを建設した。紀前八、七世紀にエトルリヤに興つた文明は東方的色彩に富んだものであつたが、それは紀前一〇〇〇年頃、小亞細亞のリヂヤから輸入せられたらしい。テオドリックに率ゐられた東ゴート人は、紀元四八九—四九三年にイタリアを征服したが、其王國は五五四年に亡んだ。五六八年にランゴバルト人が北イタリアに移住し、そこにロムバルチイの地名を残したが、血液はさほど濃く傳へられなかつたらしい。北イタリア人の身長は中身で一・六四二米、頭蓋指數は短頭で八四・四を計へ、ノルド種の力が強く働いてゐない。ヴェネチヤ人の身長が比較的高いのは、身長一・六六三米、頭蓋八五のイリリヤ人との混血の結果である。ルッカには長頭、高身の人が多いが、それは大西・地中海型で、地中海種よりも古い型式を代表するものであらうといはれてゐる。

#### 四、フランス住民の種々相

フランスの人種關係もイタリアに劣らぬほど複雑で、先史時代の諸種族がアフリカから移住し、ソリユトレアン人は中歐東部から來り、また中身のアルプス種の波動も、長頭のノルド種の影響もあり、いづれも現代住民の上に何らかの痕跡を残してゐる。

概括的に云へば、フランダーからボルドーへかけて中頭が多いが、それはノルド種の影響である。シャルントとドルドーニュに見られる狭頭（頭蓋指數七六・八—七九・八）は、舊石器時代上層に因由してゐる。地中海沿岸には地中海種の中頭型が縁取つてゐる。

廣頭型はアルデンヌス、ヴァスジユス、サヴォイ及び中央高原に孤立してゐるが、これはアルプス・カルパチヤ型の代表である。中間地域は概して低位の廣頭型によつて住まれてゐる。

金髪・碧眼・白膚のブロンド型は、一方イギリス海峡に沿ひ、他方北東國境に沿うた線に多く發見せられ、暗毛、暗眼、暗膚のブルネット型は、地中海沿岸、ピレネー山脈、及びオーヴエルニューに多く發見せられる。

フランス人の平均身長は一・六七七米で、大體、リヨンからオルレアンを経てコテンタン半島に至る一線が、長身（一・六四七米）以上の北東地域と、中身（一・六四六米）以下の南西



地域とを劃つてゐる。北ブリッタニイは一・六二四以下、ハウト・ヴィエンヌ及びコルレーズは一・六一以下に落ちる。ブルガンヂイの沃野は比較的巨身廣頭の地域で、其身長は五世紀に移住したノルド系のブルグンド人から遺傳したものである。彼等はどちらかといへば、明色型なのだが、周圍にアルプス・カルパチヤ系が住んでゐるので、雜婚して其頭形が廣くなつてしまつた。

ドルドーニュ州には二つの短頭型と、四つの中頭型とがある。(一) 低身・暗毛・短頭は主として南部に多く、スヴノールスが代表的である。(二) 高身・明毛・短頭は前者と明毛のノルド種との混血で、ローレンにも見出される。(三) 高身・明毛・中頭はリモージュ界隈に多いが、北ゲルマニヤの平原から來たノルド種の末裔である。(四) 扁頭・廣顔で、長く且つ廣い鼻、著大な頤、直黒毛、暗眼、高身を有つた住民は、クロイ・マニヨン人種に似てゐる。(五) 狭顔・高頭は混血型らしい。(六) 非常に長い頭、狭い卵形の顔、低い後退した額、凸出した額、凹廣鼻、後退頤、黒毛、黒膚の型が稀に見られる。これは古い型で、第四の不調和型と同じく、オーリニャク時代のもので、歐弗人種の一變種と考へられる。一四、〇〇〇年も前の型

が此人々によつて今日も支持されてゐるといふ事實は、確かに興味深いことだ。此地域の中心に低身の住民が多いが、それは人種的姿態でなく、『ラ・ミゼール』の爲めである。其證據には近年生活を改善したら、どしどし身長が増した。

### 五、イベリヤ半島の住民

イベリヤ半島には舊人種が住んでゐたが、ムスチエー期にアフリカから來た新人種と入れ變つた。これらの二人群は今尚ほ痕づけられる。(一) イスパニヤの北部を占めてゐるピレネー人は前者の痕跡で、其一支族はイスパニヤのバスクに發展した。(二) 歐弗人は北アフリカのカプス文化を將來して、オーリニャク文化に發展せしめ、西葡兩國に弘布してゐるコム・カペーユ文化に對蹠する一文化型式を作つた人群である。最古の短頭の化石は中石器時代のムゲン貝塚で發見されてゐる。南方ではカプス人は中石器時代に侵入したイベリヤ・地中海種の最初の波に漂はされて破落した。探礦者の群も沿岸諸地域に占居したらしい。紀前六世紀に侵入



したケルト族はバスクの住地を過ぎて、中央高地帯を占領した。新着のイベリヤ人は初め南部に來り、たゞバスクの住地のみを残して、次第に半島全部に擴がつたが、三世紀にはイスパニヤ中部を占めて、そこにケルト・イベリヤ的混血人を作つた。フェニキヤとカルタゴの移住者は恐らく人種的影響を與へなかつたであらう。紀元五世紀早期に於けるゴート人其他の侵入者も、大した痕跡は残してゐない。七二〇年に侵入したサラセン族（アラビヤ人とベルベル人）は、南部に彼等の足跡を印したが、輸入したところの人種的要素は、固有住民のそれと酷似してゐた。

イベリヤ半島の頭蓋指數は、全體としては中頭（約七七%以下）だが、東部に行くに従うて高頭を伴ひ、段々長頭に移つてゆく傾きがある。しかし北部や北西部では、扁頭に逢ふこともある。極北と極南（頭蓋指數七八・五）では、頭形が稍々短くなつてゐる。東部海岸の住民は中部のそれよりも肌色が白い。ポルトガル人は概してブルネット（暗色種）であるが、イスパニヤからポルトガルに分布してゐる毛は黒く、眼は暗褐である。碧色、灰色、黄褐色の眼と明色の毛とは、ピレーネ山脈寄りの半島中部に多いが、之は明らかにガリシヤの一部と同様、

ノルド起源のものらしい。最高の身長（約一・六五米）は東海岸、バスクの國、ポルトガルの大部分に見られる。中央イスパニヤの身長は一・六二米である。

## 六、白耳義人と和蘭人

ブラッセルの南、リエージュの北を、東西に走る一線が、ペルジュームを北方低地と南方高地とに區劃してゐる。北方ではオランダ語の訛つたフランダ語を話すが、其人柄は大抵金髪碧眼のブロンド種で、狭長の頭（指數七九）、長い鼻、高い身長を有つてゐる。南方ではワルーン人（頭蓋指數八二）は古代フランス語を操り、リムブルグ人は狭頭（指數七八）、ルクセムブルグ人は廣頭（指數八三）で、ハイノールト人（指數八一・四）はブルネット（暗色種）で、最低身長のものである。

ルクセムブルグのグランド・ダッキイの住民は、著しく短頭であるが、多くは同種婚を實行し、純粹の西アルプス型を保持してゐるらしい。



## 七、スカンデナヴィヤと丁抹

デンマルクは遠古民衆がガリシヤ(南ポーランド)から小山の裾を縫うて、黄土に沿うて移動した空閑地の北西端である。其住民の血液は恐ろしく混淆してゐる。

中石器時代に南東から到着した短頭民衆が、デンマルク及び西バルト海沿岸にマグレモース文化を輸入したとは研究家が一般に説くところである。

其中石器時代人はデンマルク海岸に貝塚を堆積した、丈高く、頭の長い民衆で、多分カムパ・ニユ種であらうと思はれる。其後、進出し來つたノルド種が、此貝塚人の末裔と結合してスエーデンに入り、かの美道墳墓を残したのであるが、巨石構築の技術は之を探礦家から學び得たものであらう。其頃、探礦家は既にデンマルクの嶋々に來て居り、南スカンデナヴィヤに先史的短頭因子を蒔き散らしたと考へなくてはならぬ。新石器時代末にデンマルクに住んでゐた鷲鼻系の短頭人(ボレビイ型)が、南スカンデナヴィヤに渡つたといふことも假定しなければ

ならぬ。

紀元前五〇〇年後、ノルド種の一支部はノルウエーのフィヨルドに植民して、史上に顯著な『海賊』の時代が始まり、それは一、五〇〇年間続いた。ノルド種の一群が、スカンデナヴィヤから北獨逸へも移動したことは周知の事實である。

一般にスカンデナヴィヤ人は、ラップを除いて、典型的なノルド種だと看做されてゐるけれど、他種の血の混つてゐることも確かで、特にデンマルク人はそれが著しい。一例すればクロ・マニヨン型はノルウエーに見出される。ノルウエーの西海岸又は北西海岸には、短頭・廣顔の住民があり、近周の住民に比して色が黒く、丈が低い。これらはアルプス種の流れで、其到着を非常に古い時代と考へることが出来る。これは探礦家に結びつけても差支へない。かう観て來ると、純粹のノルド型はノルウエー内地の溪谷と、スウェーデンの中央諸州とに代表せられるわけだ。スウェーデンもずつと北端へ行けば、短頭、暗色、低身が分布してゐる。これは北西ではラップ人の、海岸線ではフィン人の影響を受けた結果である。又南端に於いても他の諸種族の影響から、同様の性格が現はれてゐる。純粹ノルド種のスウェーデン人は、長身で



一・七米以上、長頭で頭蓋指數七五%を計へ、長顔、白肌、明毛、常に短くして且つ眞直な鼻を有つてゐる。

デンマルクでは、明眼明毛に長身が伴ひ、暗色に低身が伴つてゐる。身長は平均一・六九米だが、過去十五年間に四センチ増加した、これはスウェーデンもノルウェーも同様である。長身（一・六九三米以上）の多いのは、北西、フネンの北半、ジュトランド及びボルンホルムの接壤部であり、低身（一・六七九米以下）の多いのはジールランドの東半とサムセイとである。ボルンホルムの頭蓋指數は八〇・三であるが、それに長暗、低明の二型があり、後者はヴィスチュラ種に一致してゐる。ボレビイ型の痕跡は僅か二三箇所に認められるだけだ。

## 八、蒙古的なフィン族

フィンランド人は實に複雑な混血を見てゐるので、其本來性格を把握することが困難である。しかし、彼等の頭蓋骨を研究したレッチウスの分類に依ると、フィン族は二つの群に分たれる。

一つは東方のカレリヤ群で、他は西方のタヴァスチヤ群である。前者は丈高く、瘦形で、眼は灰色、肌は鶯色、暗褐毛が小環をなして肩に垂れ下つてゐる。後者は姿が頑丈で、眼は碧色、髪は明色、肌は白色を呈してゐる。

タヴァスチヤ群は蒙古系の血管中へ、ゲルマニヤ人の血が傳はつて現はれた型で、カレリヤ群はスラヴ的因子が加はつた型である。世間では往々フィン族をコーカシヤ系のもとと見てゐるが、それが蒙古系であることは疑ひの餘地がなく、シベリヤにゐるサモイエッドなどに其原型を求めることが出来る。イエニツセイ河の水源地方はフィン族の故郷で、そこにはコイバル人、カラガッス人、カマツシンツイ人、ソヨット人など、孤立したサモイエッド族が今尙ほ残存してゐる。彼等はトルコ族と混血して、日常トルコ語を操つてゐるけれども、コーカシヤ系の姿相よりは、寧ろ北シベリシヤの蒙古系サモイエッドの姿相を表はしてゐるさうだ。

タキツスの『ゲルマニヤ』には、フィン族のことが、『フェニイ』又は『フィニイ』と出てゐるが、ゴート語では『ファニイ』といったものを、テウトニ語のウムラウトで『フェニイ』に變つたのだらうといはれる。バルト海岸のフィン族は、自分達をスオミライセツと呼ぶが、



其「スオミ」こそ、サモイェツドの「サモ」、ラップ語の「サメ」に相當するもので、沼澤の意味を有つてゐる。ロシアの辭書では、サモイェデは「自肉食者」の意だとあるが、それはいはゆる通俗語原で、採るに足らぬものである。

此蒙古的、東洋的なフィンランド人が、先年蘇聯軍の北上、侵入しようとした時、地峡で食ひ止めて一步も領内を蹂躪せしめなかつたことは、まだわれわれの記憶に残つてゐるところである。

### 九、二大共存圏の境界劃定はいつか

以上、私は獨伊樞軸側と協同してゐる諸民族の中、若干について記したが、深い關係を有つたオーストリー、ホンガリイ、チェッコ・スロヴァキヤなどには觸れる暇がなかつた。私の叙述はあまりにも人種學の見解に傾き、少しも文化・政治的關係を説かなかつた爲め、時局讀物としては不合格かも知れないが、以上の叙述を嚴密に検討されたならば、ゲルマン民族のヨ-

ロッパに於ける足跡が既往に於いて如何に廣大であつたかゞわかり、従つて當來に於いても其勢力の波及は凡そ豫測せられ、必ずやゴート、西ゴート以上の活動をなし得るであらうことが想像せられるだらう。

大東亞共榮圏内の諸民族が、薄かれ濃かれ、人種的に關係を有つてゐるやうに、ヨーロッパ共存圏内の諸民族もまた直接又は間接の交聯を有つてゐる。獨逸は單に攻守同盟のイタリヤとランゴバルト族によつて密接の人種的關係をもつのみならず、イベリヤとはスエヴィ族、ヴァンダル族によつて、フランスとはフランク族、ブルグンド族によつて深い交聯がつけられてゐる。對樞軸の盟主なるイギリスとの人種的・文化的・歴史的交渉は、蘇聯とのそれよりも尙ほ一層深いのである。

初め殆ど孤立してゐた獨逸が、其熱意と實力とによつて次第に近周諸國を同化して、樞軸の勢圏が擴められていつた事は、日本が米英蔣蘭包圍陣を蹴破して、大東亞共榮圏を完成するに垂んとしてゐると傾向を一つにしてゐる。西に在つては獨逸、東に在つては日本。これらの二國に指導せられる歐洲と東亞との二大共存共榮圏が、其境界を劃定する委員を任命するのは



第 二 部

南方民族誌

いつのことであらうか。私はそれをさほど遠い將來の事とは思はない。



### 第三章 日本と南方との民族的交聯

#### 一、緒言——民族的交聯

大東亞戰の成績は全く超歴史的、新創造的であつて、開戦以來、三箇月も経たぬ間に、早くも豫定の二分の一以上も進出し、残すところは濠洲と印度と、それからサンドキッチ群島とに過ぎないのである。蘭印諸島の完全占領はもう間もないことであらう。

戦果がかうした風に大きく、しかも速いのは、全く戦争の目的が人道的で、神意に適つてゐるからであるが、然らば多数の人命を損ひ、莫大の物資を費す所の大戦争によつて、日本は何を得ようとしてゐるのか。それはいふまでもなく大東亞共榮圈を建設しようが爲めである。

一體アジアの文化は由緒が古く、ヨーロッパの大部分がまだ原始時代を脱しなかつた間に、



そこにはメソポタミアの文化、印度の文化、支那の文化が榮えて、いはゆる『中央地帯文化』の成立を見たのであつた。此文化がヨーロッパに入つて、次第に改變せられ、精化せられて、北方的なヨーロッパ文化が成り立ち、尋いでアメリカに輸出されて一大進歩を遂げたものを、人類學者は引括めて歐米文化といひ、また其成立が主として物資の乏しい凍原地帯であつたが故に、其別名を『凍原地帯文化』ともいふ。

凍原地帯は自然の生産が乏少で、人口の少い間は其住民が食つて行けるが、口數が増加すると直ぐ食住衣の資源が盡きてしまふ。そこで激甚な生存競争が起り、甲を乙が仆し、乙を丙が斃し、丙を丁が優し、丁を戊が覗ふといふ風の歴史が展開せられ、遂には内部で鬭争してゐるよりは、外部で活躍して生活を豊化しようといふ欲求を起すに至つた。

其結果、歐洲人はアフリカを開き、印度を拓き、太平洋諸島を取り、濠洲を取り、それらの廣大なる地域を自分達の保護領、屬地、植民地として、そこから天然の資源と人間の勞力を搾取する工夫をした。其工夫は過去五世紀に亘つて實行に移され、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリス、アメリカと、次第に民族が變つていつて、近來は殆ど米英人の世界といふやうな感じがするやうになつた。

殊にアジアは全く米英の爲めに奪取せられて、我日本と泰の二國を除くの外、あらゆる民族は悉く彼等の搾取の對象となり、老大國支那は殆ど其獨立を失つて、印度のやうにならうとしてゐた。泰國とても決して安泰の状態には置かれてゐなかつた。それで東亞唯一の強國、我日本が蹶起してアジアの復興を企圖し、アジアから米英の勢力を驅逐してアジア人のアジアに還元しようとした。其アジア人のアジアこそ即ち大東亞共榮圈であつて、戦争が進めば進むほど共榮圈は擴がり、戦争が終れば共榮圈は確立を見るのである。

抑々此大東亞共榮圈にはどれだけの國家或は民族が含まれるか。もとよりどこ／＼がそれに含まれるといふ約束はないのだ。が、滿洲國、支那は勿論既に我國と一協同體をなしてゐるから問題外にすれば、印度支那、マライ半島、ビルマ、蘭領印度諸島、フィリッピン群島、濠洲、印度は、是が非でも此圈内に入らなければならぬ場所である。これらの廣地域は、日本から見れば皆な南方に位置してゐるので、一にはそれを『南方共榮圈』とも呼んでゐるのだが、北の方では蘇聯領沿海州なども仲間入りしてもらひ、東の方ではアメリカに近いサンドピッチ諸



島なども加はつてもらふべきである。

今、これら南方諸國、或は諸民族と日本とは、どんな體質的・文化的關係にあるか。それを民族學的視角から視て、極めて簡単に述べて見たいと思ふのである。『民族學的』といふとむづかしいが、まあざつと、體質なら體質だけ、文化なら文化だけを取扱はうとせず、體質と文化とを同格的に取扱はうとする學問だと解すれば大差がない。

## 二、フィリッピン諸島

最初に我臺灣の南に當つて、太平洋中に浮んでゐる大群島、フィリッピンについて語らう。誰れしも知る如く、フィリッピン諸島はルソン島、ミンドロ島、パラワン島、パネイ島、サマル島、レイト島、セブ島、ネグロス島、ミンダオ島などから成つてゐるが、一番大きいのはルソン島で、其マニラが首府になつてゐる。島の數は總て五千以上もあるといふが、面積は三十萬方キロで、ざつと我邦のその半分だ。

フィリッピンの住民は大部分インドネシヤ族で、よほど古くこゝに移住したらしい。彼等の來る前にはネグリトといつて、身長の小さい矮人が住んでゐた。其矮人はアエタ族といひ、極めて原始的な生活を送つてゐたが、インドネシヤ族に驅逐せられて、次第に山の中に入り込んでしまつた。日本にも小人の傳説があるから、アエタに似た矮人が日本まで北上したかも知れない。支那の揚子江沿岸から奥まつた山地には、相當近い時代までやはり矮人が住んでゐたから、此推測は決して不合理でない。

インドネシヤ族は長頭を有つてゐるが、低地に住んでゐる新來のマライ族は短頭を有つてゐるので、はつきりと二種族の差別はつくが、昔は皆マライ族と考へられてゐた。マライからインドネシヤを別けるやうになつたのはさほど遠いことではない。此インドネシヤ族は、フィリッピンから北上して臺灣に上陸した。臺灣の高砂族——以前「生蕃」などと呼んでゐた種族は、實は此インドネシヤ族の一分派である。臺灣から沖繩列島を傳はつてもつと北上すれば、自ら九州の南端薩隅半島に着く。我邦の『古事記』や『日本書紀』に現はれて來る隼人といふ種族は、平安時代まで内地人と別扱ひせられ、京都には隼人司といふ特別の役所まで置いてあつた



ほどであるから、これこそインドネシア族の片割れであらうといふことが民族學的に認められる。

フィリッピン乃至臺灣から、昔、航海具の幼稚であつた時に、インドネシア族が日本まで來られるものかと、此事を疑ふものがあるけれども、さうした人々は暖海流黒潮が南から北に流れて、それへ乗ればどんな小舟でも自づと九州へ運んでいつてくれることを知らないのだ。

現に歴史時代にもフィリッピン人が我邦へ一再ならず漂着して來た事實がある。即ち飛鳥時代のやうな古い時代に、觀貨邏人、舍衛人の男女が漂着したことが『日本書紀』に記載されてゐる。これらと同名の國が西域にあるので、『大日本史』の編者らは、此漂着者を西域の人々と解したが、西域からは我邦に漂着し得る筈がない。そこで近代の史學者は、これをフィリッピン諸島のタガログ人、ヴィサヤ人だと解することになつたが、それに就いて一層耳新らしい、面白い話の糸口が見出されるのである。

ジョン・フォアマンといふ人の『フィリッピン諸島』と題する書物は大部のもので、島の歴史、人種、文化などを詳しく取扱つてゐるが、其中にルソン島の山間高地帯に住んでゐる頑丈

な部族は、マライ系統のものと異つて居り、體性からいつても心性からいつても、アエタ族などとは比較にならぬ優秀さを示してゐる。此種族は日本人の末裔に相違ない。イスパニヤの軍艦レガスピ號がルソン島の北部に現はれ、其附近を占領した時、以前からそこに占據してゐた日本人はカガヤン河に沿うて南下し、すつと内地へ入り込んだが、その末裔が此優秀種族となつたものであらう。傳説に依ると、日本人は常にルソン島の東岸に沿うて航海し、はるか南のラモン灣まで行つて上陸し、ベイ湖に注ぐ小川を下つてパグサンジャン州に居留した。其州は今日のラグナ、タヤバスの二州の一部に當つてゐるといつてゐる。

尙ほフォアマンは説き進んで、日本人はベイ湖の周圍から其足を踏み出し、パンシピット河を下つてボムボム湖畔に新住地を見出した。湖畔のタアルといふ部落は其遺跡で、今日のタアレノス人は、どことなく普通の住民から異つてゐるから、其後裔であることに疑ひはない。フィリッピンの愛國家ジョーセ・リザール博士は、日比混血型の好典型である。

それよりも更に耳新らしい事實は、ルソン島のバタングス、ラグナ、リザール、ブラカンの諸州に住んでゐる民衆は、タガログ族といつて、前述の日本人の血を多量に傳へてゐる混血種



である。これらの諸州はマニラ灣の東北から東南へかけて位置してゐるが、次第にマニラの郊外まで進出し、クイアポ、サムパロク、サンタ・クルスなどにも占據するに至つたといつてゐる。

それでは此タガログ人が飛鳥時代に日本へ漂着したかといふに、さう簡單には片づけられない。フォアマンに依ると、『タガログ』といふのは訛りで、實は『タオ・イログ』（即ち川に沿うて來た人）といふべきだといつてゐるが、それも果して事實かどうかは分らない。フォアマンはヴィサヤ族婦人と、タガログ族婦人との寫眞を特に挿入してゐるが、共に頗る日本人に似てゐる。此日本人に似てゐるといふ事實は、ヴィサヤ人やタガログ人が古くから今日と同じ稱呼を有つてゐて、大昔に日本へも移動したといふ事を示唆するのである。

新井白石の記述に依ると、寶永の頃ルソンには三千人からの日本人がゐたといふが、それが全滅してしまふ筈はない。必ずどこかに其血液を傳へてゐるであらう。さすれば、フィリピンと日本には、太古と近世と二回に亘つて人種的結合の歴史が展開されたわけだ。

インドネシア人のジャワット、カイン、サロングが、日本人の男の禪、女の腰巻に以てゐる事、傾斜地に籬段を造つて稻を作る事、さうした重要性のある文化的事績まで、日比間に交聯

のあるといふことは、愈々以てフィリピン諸島がアメリカの羈絆を脱して、日本の指導下に獨立國として大東亞共榮圈に加はるのが當然であることを證明する。

### 三、東印度諸島

フィリピンの南に横はるのが東印度諸島である。東印度諸島は西から計へると、スマトラ、ジャバ、ボルネオ、セレベス、ハルマヘラ、モルッカ、セラム、スムバ、フロレスなどから成り、一番東のチモールとニュー・ギネアの二島は半分だけ英、葡領になつてゐる。總面積は百九萬方キロで、人口は六千三百萬人からある。ボルネオのブルネイは江戸時代の初めに艾萊といつて、我邦の御朱印船が交易に往つたところだ。モルッカは『摩陸』と書かれ、ジャバは『爪哇』又は『ジャガタラ』と呼ばれ、邦人の口に膾炙した地名であつた。

中でもジャバ島が最も開けて居り、其籬段耕作は、我邦の代表的な棚田、即ち信州更科の田毎の月と同じく、夜は田毎に月影を宿してゐる。



住民は山間部にネグリート族が居り、低地部にインドネシア族と新來のマライ族が占據してゐるが、其外に印度から移住して來たヒンヅー人が相當澤山にゐる。ジャワの年代記に依ると、西北印度に勢力を振つてゐたアジ・サカといふ王子が、紀元七五年にクジャラットからジャワに移つたといふが、『唐書』に現はれてゐる訶陵といふ國はジャワで、元和八年に黒奴、鸚鵡、類伽鳥を唐王に獻じたといふから、其王朝はすつと後までも續いてゐたと見なくてはならぬ。しかし佛教の起つたのは、第七世紀からで、それまでは婆羅門教が盛んであつたらしい。確實なところでは、戸利佛誓王國がスマトラに興り、ジャワの訶陵國を滅ぼしてから後、佛教が隆んになつたといはれる。あの宏壯なボロブヅール寺院の如きも、建築年代ははつきりわからないが、多分第八世紀から始め、非常に長い年月を費して殆ど完成しようとしたが、何かの故障が起つて、一部分は彫刻しかけて未成品のまゝ残されてゐる。こゝの浮彫は有名なものが、其中最も注意を引くのは、今日太平洋一面に擴がり、インドネシア族、ポリネシア族、メラネシア族の間に用ひられる腕木附刳舟の巨大なものが彫り表はされてゐることである。此型の刳舟は我邦では八丈島まで波及してゐるといふ。我邦古代の『二股舟』といはれたものも、

或は腕木附刳舟であつたかも知れぬ、若しさうだとすれば興味深いことだ。

それよりもつと興味の深いのは、ジャワのバティック、即ち蠟染更紗である。これは白木綿に蠟で模様を書き、染め上げてから蠟を落すもので、今日も尙ほジャワだけには残つてゐるが、昔はスマトラ其他の場所でも作られた。ジャワの蠟染は勿論印度から學んだに相違ないが、他方に於いて印度から日本へも傳はり『蕩纈』といつて、飛鳥奈良時代に盛んに用ひられた。今日も尙ほ當時の遺品が残つてゐるが、此點に於いても日本とジャワとは間接の交聯があるわけだ。

我邦では馬鈴薯のことをジャガタライモ、略してジャガ芋ともいふから、それもやはりジャワから傳はつたものであらう。果して然らば其年代はいつか、まだ調べて見ないが、江戸時代の早期の御朱船貿易時代であつたと思はれる。ジャガタラ密柑と稱する大柚や、ジャガタラ縞と呼ぶ織物も、やはり其産地の名を冠したもので、ジャワから輸入されたことはいふまでもない。ジャガタラといふのは、バタヴィヤの舊稱で、一にはカラパ（咬嚼巴）とも呼ばれた。カラパは椰子樹のことで、初めは小さなジャワの町であつたものを、一六一九年オランダ人が奪



取して首府となし、蘭人種の名稱バタヴィを地名としてバタヴィヤと改稱するに至つたのである。だから日爪關係は實に古いものである。

#### 四、印度支那地域

印度支那地域と日本との關係は、人種的にも文化的にも極めて古く且つ密緊である。普通に印度支那といふのは佛領のことであるが、トンキン、アンナム、交趾、カムボヂヤを含む佛印、その西に接壤してゐる泰國、泰國の南に斗出してゐるマライ半島、西に擴がつてゐるビルマをも含めて、それを一つの印度支那地域と見做すことが出来る。

佛印の原住民はモイ、クイ、モン、チャム、クメール、カレン、ナーガなどの諸族であつたが、紀元前後に山脈を超えて、支那の雲南地方から南下して來た南蒙古族が、それらを驅逐して山間に退避せしめ、自分達は沿岸平地に占據した。それが即ち安南族で、泰族とは同一種族だといはれる。此アンナム・タイ族は、『唐書』に現はれてゐる南詔人と一つのもので、後漢

時代に哀牢夷と呼ばれた種族だが、王のことを『詔』といひ、詔が六人あつたから自らを六詔國と呼んだ。六詔國とは蒙僞、越柝、浪穹、遼賧、施浪、蒙舍のことで、先住民であつたネグリト、インドネシヤなどの血液を多少とも混へ、また彼等の後を追うて侵入して來た漢族にも影響されたであらうが、それにも拘はらず安南人には共通した體性が有たれてゐる。ヅニケに從へば、身長は一・五メートルで、頭骨は八二・八パーセントの短頭型を示し、頬骨秀で、眼は蒙古型である。身長、頭形、二つながら日本人と似てゐることは注意すべきである。ヅニケも安南人の心性を批評して、勤勉、愉快で、天賦の才能に富んだ點が、極東のアジャ人に共通してゐるといつてゐるほどである。

安南人は頭を布で捲いてゐる。これは日本の鉢巻と同じもので、褰頭といはれる古い習俗である。水牛に犁を曳かせて水田を耕す有様、林を綴つて農家の建つてゐる景觀は、どこことなく我邦のそれに似てゐる。『魏志』に出て來る倭人といふ種族は、九州地方に住んでゐた非日本人的種族であるが、それは彼等と分れて支那から日本へ移動したもので、其時我邦へ稻種を輸入し、稻作をも齎らしたといふ風に考へられる。



泰國の住民はタイ人が主であるが、老撾にゐるラオス人、上ビルマのシャン人、東京にゐるトス・モン人と共にタイ族に屬する。タイ人と日本人との人種的干係は間接で、安南人よりも淡いやうであるが、文化・歴史的には却つて濃やかだといつても差支ない。いや、そんな古い關係よりも、もつと新しい關係が兩國の間にはあつて、彼方でジップン・ハットンといふのは、宮廷を護衛した『日本兵』のことであり、舊都アユチャのメナム河三角洲には日本町の趾も残つてゐるが、此方でもシャモ、シャムロ革、シャムロ染といつて、シャム渡りの鬮鷄、皮革、織物を特に稱讚した形跡があり、江戸時代早期には餘程親密の度が深く、鎖國後にもシャムのみは、支那、和蘭と共に除外例とされてゐたほどである。

マライ半島はもと北半がシャム領であり、其リゴル（六昆）は山田長政の領國であつた關係もあり、日本との關係は決して淺くないのであるが、最近ジョホール水道の北側に流注するジョホール河を溯ると、其岸に古い佩玉時代の遺跡があり、そこが昔の羅越國の址だと推定されることになつた。果して然らば、そこは平安時代に渡天せられた眞如法親王の薨去せられた場所、我國民に取つては極めて意義の深い歴史的遺跡であるといはなければならぬ。現に先

日も議會へ法親王御遺跡表彰の動議が出たほどである。

ビルマにはカチン、プロ・カレン、スガウ・カレン、パラウングなどの諸種族が住んでゐるが、印度支那とは人種的に同一圈内だと見られてゐる。

### 五、結言——アジャの一致

以上の外、インドネシヤの東から南へかけてメラシヤ族が住み、更に其南にはオーストラリヤ族が住んでゐる。濠洲の南にはタスマニヤ人が住んでゐたが、それは近年絶滅してしまつた。メラネシヤからずつと東、北へかけて、太平洋中に碁布する諸島の住民は、引括めてポリネシヤ族といふが、ハワイ人を始めサンドキツ諸島の住民も皆なこれに屬してゐる。ポリネシヤの西は即ち我邦の統治してゐるミクロネシヤで、其住民はミクロネシヤ族といふ。ビルマの西は即ち印度で、こゝには北方から入つてきたアールヤ族と、以前から住んでゐた非アールヤ系とが混在してゐるが、其文明はアールヤ族が將來したものである。佛教を創めた釋迦の如きは、



在來アールヤ種といふことになつてゐたが、最近ではシャカ族は支那史の所謂「塞」族に當り、アジア的血液の持主だといふ風の新論も試みられてゐる。

多少の差異、除外例はあらうけれど、如上の諸民衆は大方米食型生活を營爲し、其宗教は佛教、回教、儒教及び原始神道と一脈相通するところのあるマジック的宗教を信じ、アジア的・類蒙古的體質を有つてゐる點に於いて一致してゐる。而して其住地は太平洋から印度洋に亘る沿岸的・島嶼的地域で、其地理的環境は大體、これを海洋的といふべく、従つて其文化的寰界もまたこれを海洋的であると觀じなければならぬ。

ハットン博士、チキスン博士、ホーネルズ氏らの協力によつて成つた腕木附刳舟の研究を見ると、それは直接腕木裝備と間接腕木裝備との二色あるが、双方とも太平洋及び印度洋に分布し、インドネシアが其中心をなしてゐるやうである。西の果てはマダガスカル島、東の果てはハワイ島で、西に進むほど直接裝備型、東に進むほど間接裝備型が多く、中心のインドネシアには双方の型式が存在してゐるので、インドネシア族が之を工夫したものと考へ得る。紀元八世紀にその存在してゐたことは、ポロブールPoluburの浮彫でも明らかで、由緒の古いものであ

ることを私達に教へる。

此腕木附刳舟の分布する地域が、即ち私達の提唱する大東亞共榮圏の包含する地域と一致し、それはまた歴史的には、大體、江戸時代早期の御朱印船時代に、われわれの祖先が活躍したところの地域とも一致するのであつて、大東亞共榮圏の樹立が當然的、否必然的のものであらうことを私達に啓示する。私達はアジア人のアジアを復興する爲めに、これを完成することに必死の努力をしなければならぬのである。



## 第四章 南洋の諸民衆と其文化

## 一、共榮圏と南洋

ハワイやマライの大戦果を恒久的に維持するには、ハワイとマライとを綴る全海面、即ち太平洋を制壓して、アメリカ以西の空・海權を掌握し、それに據つて新太平洋文化を造り出さなければならぬ。世界文明の中心が大西洋から太平洋に移り始めたのは可也古いことで、近世早期以來、英米二國が強大國たる葡、西二國を漸次壓服して、そこに自國の植民地を作らうと企てた時からである。そして其企圖は十九世紀末には略々實現された。

此間の太平洋開拓史は實に面白い。ロシア人は黒貂を逐うてシベリヤを横切り、ベーリング海峡を超えてアラスカに入つた。フランス人はビーヴァを逐うてアメリカを横切り、西の果に

廣々とした大洋のあることを知つたが、後から續くイギリス人に其發見地を讓つてしまつた。かうしてイギリス人はカナダを統治する事となつたが、其一部は獨立して北米合衆國を作り、メキシコからカリフォルニアを收め、ロシアからアラスカを收めて、太平洋に臨んだ大國家を建造するに至つた。かうしてロシア人も、イギリス人も、アメリカ人も太平洋に乗り出して、底止も知れぬ大洋の不思議と富とを發くことに熱中した。帆船時代から汽船時代への過渡に、此開拓慾は昂進して狂的性質を帯びた。太平洋には暖海流と寒海流とが流れ、それらに乗れば船は矢の如く走つた。熱帯の魚は寒流に乗つて北上し、寒帯の魚は寒流に乗つて南下した。此南下魚類と北上魚類とは、日本で鉢合してまご／＼してゐた。それをゆつくり待ち構へたり、追懸けたりして捕つたのが日本人である。鮭が泳ぐ、鱒が泳ぐ、鰯が群がる、鱈が走る、小魚を追つて鯨が浮ぶ。太平洋へさへ出ればいくらでも漁があるので、露米英蘭の船は太平洋を駆け廻つた。暴風に逢つて漂流し、薪食に缺乏して陸地を探し、太平洋中の島々が發見され、西の果てはマルコ・ポロ以來、黄金の國として名高い日本國を見出し、好奇心も伴つて、遮二無二我邦に鎖封を破らしてしまつた。



鎖封を破つた日本がすく／＼と伸びて、いつの間にか鍛えた腕を以て、『北方の熊』と呼ばれたロシアを叩きつけた。『ヤンキイ』のアメリカなどは一溜りもなささうだ。『ジョンブル』のイギリスさへ舐められさうだ。英米二國が毛だらけの手を組んで、我日本に掴みかゝらうとしたのは無理のない事だ。

そこで日本は搾取白人をアジヤから追ひ出して、大東亞共榮圈を建設しようといふ目論見を立て、それを邪魔する米英二國を眞向から叩きのめさうとしたのが、即ち今次の大東亞戦争なのである。

大東亞共榮圈の四至はどこかとよく人に聞かれるが、境界などありはしない。それは大體われわれが『南洋』といつてゐる場所で、人々によつて範圍が異つてゐるが、先づフィリッピン諸島、蘭印諸島、マライ半島、ビルマ、印度支那、泰、それに濠洲や印度を入れても差支ない。我邦の統治してゐるミクロネシヤが其中に入ることとは勿論である。かうした廣い太平洋の浪に洗はれてゐる地域に、どんな民衆が住み、どんな生活を營んでゐるかといふ疑問は、此際必ずしも無用ではない。今、それをざつと次々に述べて見ようと思ふ。

## 二、印度支那地域の住民

先づ佛領印度支那からビルマ、タイを経て、マライ半島に至る地方を、一纏めにすれば印度支那地域といふことが出来る。

(1) 佛領印度支那の原住民は、モイ人といつて、今日はメコン河から安南の海岸へかけてばら／＼に住んでゐる。東埔寨の北西に占居するクイ人、下ビルマに住むモン人、安南から東埔寨にかけて住んでゐるチャム人、アラカン山地に據つてゐるカレン人、マニプル乃至バライに散居するナーガ人なども原住民で、勢力のある新種族が移住し始めてから、彼等は追々と衰微の一途を辿らされてゐる。

新種族といふのは安南人、東埔寨人である。安南人は主としてトンキン灣や安南の海岸に住んでゐるが、古く西方から移動して來て、先住のモイ人やクメール人を山間に驅逐し、豊穠な平地に自分達が占據した。東埔寨人の住地は初め廣く交趾支那全部に行き亘つてゐたが、安南



人に制壓されて後退し、ソクトラン・トルヴィンなどの山間に餘喘を保つてゐるに過ぎない有様となつた。言語學者がモン・クメール語といふのは、此東埔寨人即ちクメール族の語で、日本語の中、不變的性格を有つた身體に關する語彙を調べて見ると、モン・クメール語と一致するものが九〇・九パーセントに達するから、日本人とモン・クメール人との關係は頗る深いと見なければならぬ。かの有名なアンコル・ワットの建築は、モン・クメール人の全盛時代に建造したもので、規模の雄大と彫刻の精巧とは、たしかに東洋美術の粹といふことが出来る。江戸時代の初めに渡天した播州高砂の船頭徳兵衛は、『渡天物語』といふ書物を著はしてゐるが、彼れはアンコル・ワットを摩伽陀國の祇園精舎と誤解したやうである。

(2) 泰國の住民はタイ族が主である。タイ族は西曆一世紀に四川から雲南に出で、そこに六詔王國を建てたパイ族の後裔で、ビルマにマン・リン國を建てたものと同種であらうといはれる。大體、タイ族は泰國に住んでゐる泰人、老撾に住んでゐるラオス人、上ビルマに住んでゐるシャン人、東京に住んでゐるトス・モン人の四種族に分たれてゐる。泰人が俊聰敢爲であることは、南アジアに於いて唯一の獨立國家を維持してゐるのでも分るが、更に今回の大東亞

戦争に際し、逸早く日本と協同したことによつて一層明白に立證せられた。日泰間の歴史的交聯の深遠なことは、こゝにわざ／＼説くまでもなく、誰れもがよく知つてゐる通り、近世早期の南洋貿易が盛んな時代に、山田長政を初め多數の武士や商人が泰國に渡つて日本町を建て、王城の守護にはジップン・ハッタタン(日本兵)が當つてゐたといふ二三の事實で十分に象徴することが出来るのである。

(3) ビルマの住民が複雑であることは、頭形指數が七八・一(カチン人)から八二・五(プロ・カレン人)まで、鼻指數が八五・二(スガウ・カレン人)から九一・八(パラウング人)まで、身長が一・五八メートル(パラウング人)から一・六二七メートル(下ビルマ人)まであることによつて推想せられる。まだ十分體質的研究は行はれてゐないので、種族の分類と移動の過程は復原せられないが、言語學的研究の結果では、モン・クメール族が南下したのは古いことで、其分枝であるパラウング、リエング、ワ一の諸族はシャン州の西部に住み、タライングはイラワジ川沖積地の東部に住んでゐる。タライングは即ちモン族で、昔の犛牛國民の殘片である。



(4) マライ半島の北部にはタイが住み、南半の中央部のジャングル中には矮人セマングが住んでゐる。サカイ族もまた矮人に屬する。大部分の住民は『野蠻マライ』といはれるジャクン族で、先住民衆の血液が大分濃厚に混つてゐる。眞正マライはオーラン・マラユといつて、十二世紀に移入した種族であるが、其起源ははつきり分らない。たゞスマトラのメナンカバウ附近で勃興したといふことだけは知れてゐる。

### 三、太平洋諸島の住民

太平洋諸島は非常に廣大な海面に分布してゐるが、これをいくつかの地域群に分けることはさほど困難でない。以前にはマライシャといふ區分があつたけれど、今日ではそれを廢めてインドネシヤといふ。インドネシヤは大體、蘭印諸島とフィリッピン諸島とを含む地域で、其北に分布するのがミクロネシヤ、其東から南に分布するのがメラネシヤで、メラネシヤの北から東に分布するのがポリネシヤである。人種的稱呼も此地理的稱呼を利用して、インドネシヤ族、

ミクロネシヤ族、メラネシヤ族、ポリネシヤ族といふ。

(1) インドネシヤ族はマライ半島から海に入つて、先住民である矮人ネグリト族を山間に驅逐し、諸島中の平坦部に占據したものであると、一般に人類學者は主張してゐる。マライ半島のセマング、フィリッピン諸島のアエタ、スマトラ島のパチン、セレベス島のトララなどは、古代に汎く分布してゐたネグリト族の片割である。インドネシヤでは、住民の頭形が狭頭型と廣頭型とに分れてゐるが、此狭頭型が即ちインドネシヤ族で、其移住は比較的古く、廣頭型はパレオエアン族、即ちマライ族で、其純粹型オーラン・マラユは、前述の如く十二世紀にスマトラからマライ半島に移り、十三世紀には蘭印諸島に分布した。インドネシヤ族の特性は、南スマトラのバタック族、ジャワ島山間部のテンガリス族、及びダヤク、ムルト、マラング、カラビットなどの諸族の間に認められる。インドネシヤ族はフィリッピンに入り、臺灣に入つたのみならず、日本の南部にも入つて隼人と呼ばれた。彼等のヤワット、カイン、及びサロンは、日本の犢鼻褌、腰巻と同系のものであるといはれる。インドネシヤ族の石を疊んで用水溝を造り、籬段水田を造る技術は、我邦の棚田耕作と軌を一にするもので、兩者の間には



姉妹的關係があるといはれてゐる。神話や傳説の中にも多くの近似が発見せられ、興味の深い問題を土俗學者や神話學者に供給してゐる。

(2) ミクロネシアの住民は、マーシャル、カロリン、マリアナの三島嶼群に分たれるが、大體西方は長頭型、東方は短頭型を呈し、身長も亦た低身から長身まで區々で、血液が混淆してゐることをわれわれに推想させる。

(3) ポリネシア族も混淆型で、ニュー・ジラランド島人の中には、メラネシア系の要素が認められる。イースター島へは、トンガ、ヘルヴェイ、ソサイエチの諸島を通して移動が行はれたらしい。エリオット・スミスの考察に従へば、西紀前後に印度支那からジャワ島へ、ジャワ島から太平洋上に基布する島々を経て、イースター島へ、イースター島から中米海岸へ、古代文化が擴がつた。即ち印度支那の象頭人身像が、米洲で象鼻的表現となつて残つてゐる如き、ジャワのポロブール島の佛像彫刻に於ける腰飾りが、ホンジュラスの石板彫刻に見られるが如き、皆アジア古代文化が太平洋を超えて、探險群の手によつてアメリカに齎らされ、インカ文明、アツテク文明の基礎をなしたことは疑ひの餘地がないといふ。

今回、皇軍が神業的奇襲を試みて成效したハワイ諸島の住民もまたポリネシア族で、原マライ的性格を多分に有つたものは短頭型、ネシオット(インドネシア)的性格を有つたものは長頭型を呈してゐる。

(4) メラネシア族はニューギニヤから南に連る嶋嶼群の住民に對する名稱で、パプア族が其性格を代表してゐる。パプア族は暗色、短身、長頭であるが、往々にして中頭又は廣頭のものを見出す。しかし、孤立してゐるニュー・カレドニヤ島、フィジー島などの住民は極端に狭頭であるから、他種の混血を見ない純粹型のパプアといふことが出来る。絶滅したタスマニヤ人は中・長頭型で、パプア種とネグリト種との混血であつたと考へられる。

#### 四、自然的結合は神意か

如上の廣い地域に亘つて、様々の體質と文化とを有つて住んでゐる諸民・種族を打つて一丸となし、相互の利益の繁榮と生存とを招来しようといふのが、われわれ日本民族の提唱すると



ころの大東亞共榮圏である。氣の小さいものは初め、そんな大規模の仕事が一朝一夕に出来るものかといつて躊躇したが、其實現が可能なのみならず、比較的容易であると觀られたからこそ、アメリカやイギリスは抱き合つて、其破碎に努力することになつたのである。

試みに地圖を出して見給へ。日本から濠洲までは海岸が斷續的に系列し、洋上では無数の嶋嶼が環をなしてゐる。剩へ海流は南北東西を連結し、季節風が其間隔を消さうとしてゐる。それだから古代以來、如上の諸地域には人種的・文化的交聯が生じたのであつて、深く研究すればするだけ相互間には不可分離的關係のあることが會得せられるのである。さうした結果は全く、宗教的表現をすれば神意である。神意を人意によつて破らうといふのが米英の反樞軸國家群であり、人意を神意に復原しようといふのが大東亞共榮圏の建立を主唱するわれわれ日本民族である。

どちらが勝つか、それは初めから決つてゐる。問題にはならない。

## 第五章 南方共榮圏の文化

### 一、長生不死の藥を求めた探礦家

昭和十六年十二月八日、對米英宣戰の大詔が降ると、直ぐ、嵐はものかは、電よりも疾く、行動を開始して、あちら、こちらで敵を挫き、陸にも海にも將に空にも、我皇軍は大きな戰果を収めて、表日本海にはもはや殆ど敵の姿を認めることが出来ないまでになつた。マニラは落ち、シンガポールは落ち、もう間もなくパタヴィヤも落ちようとしてゐる。荷も齒向ふものは必らず落される。もう落すところがなくなつた時、われわれ日本民族が、國を肇めて以來三千年間、此胸に描きつゞけて來た『八紘一字』の理想の一部を實現して、大東亞共榮圏が成立するわけなのである。



一體、大東亞共榮圏といふ中には、どれだけの地域が含まれるか。北はオホーツク海沿岸から、南はオーストラリアまで、西は印度、マダガスカルを果てとすれば、東はどこを果てとすべきか、ハワイは勿論其圏内に入らなければならぬ。これらの中、私は今南方諸國の文化について述べようと思ふのであるが、地圖を觀ればわかる通り、九州の南端から先島列島、沖繩列島を過ぐれば臺灣に達し、臺灣からはフィリッピン諸島、東印度諸島、オーストラリアと續いてゐて、磁石がなくとも獨り手に目的地に安着する。伊豆から舟を乗り出すと七島や、小笠原島を経て、ミクロネシア諸島に達し、黒潮に乗つてゆけばハワイまでは造作もない。又陸行の場合は、滿鐵で支那に出で、印度支那を更に下ればマレー半島に達するし、西に赴けばタイ、ビルマ、印度に達する。

こんな廣い地域に住んでゐる民衆と其文化とを、一纏めにして話すことはなかく容易でない。しかし、前述の如く土地が続いてゐる以上は文化もまた必ず續いてゐるから、南方共榮圏の全地域を、一つの塊りにしてしまふ方が自然で、それを今までのやうに孤立させて置くのは不自然だと思はれる。

區劃は、だから便宜上のものである。日本の委任統治領はミクロネシアで、其南のフィリッピン、東印度諸島は引括めてインドネシアといふ。インドネシアとミクロネシアとの東がポリネシア、南がメラネシア、これに濠洲も入れて、全體をオセアニアといふことが出来る。又陸地の方はマレー半島をも含めて、支那以南を印度支那といつても差支ない。

そこで、ちよつと考へると、印度支那の文化は、オセアニアの文化と異つてゐるやうに思はれるが、實は印度支那とても沿海的・半島的で、其文化はオセアニアと等しく、海洋型であると斷じて間違ひはないのだ。

表日本海、それから南支那海、ベンガル灣、印度洋、アラビヤ海、すつと南のモザムビク海峡、東印度諸島、フィリッピン諸島からインドネシア、メラネシアの近海、濠洲の北のチモール海、南東の珊瑚海、中米の東西兩岸の海は、何れも眞珠貝の分布してゐる海であるから、これを眞珠海と命名してもよいものである。これら眞珠海のあちらこちらでは眞珠が採れるから、それを眞珠海床といつてゐる。

かうした眞珠海、若しくは眞珠海床に包まれ、若しくは沿うてゐる島々や陸地には遠い



昔に、黄金、白金、赤金、又は寶石を掘り出した遺跡がある。誰れが、いつ、そんな金属、寶石を掘つたか。最近の研究に依ると、大體、紀元前後に、山師、即ち貴金属や寶石を探し廻る探検家が、それらの場所に足跡を印したのだといふ。

初めには貝殻、後には黄金、白金、赤金、寶石も皆な人間の生命を延ばし、殖やし、盛んにする力があると信じ、さてこそ長生不死の呪として、それらを身に著けてゐたのであるが、後にはたゞの裝飾に墮してしまつた。現に支那の甘肅省地方で発見された木乃伊は、皆な口に眞珠を含んでゐるから、此事は決して間違ではないと考へられる。また疑ひ深い人々は、いくら探検家だとして、さうした大昔に太平洋などへ出られるものかといひたさうな顔をしてゐるが、秦の始皇帝は方士を海外に派遣して、蓬萊國に長生不死の薬を求めさせたといふ事實が存在してゐるではないか。

かうした探検家は、到る處に自分達の進んだ文化を植ゑつけた。そして、それが爲めに太平洋諸島の原始文化は急激な進歩を見た。今日残つてゐる古代文化は、大部分、さうした探検家の齎したものである。

## 二、南方文化の諸側面

南方共榮圏の文化について語らうとすると、それを、あちらの側やこちらの側から眺めて、いくつかの側面観を述べるのが便宜である。即ち神話の側面、土俗の側面、技術の側面、言語の側面、社會の側面など、色々の側面から眺めることが出来る。私は先づ神話の側面から眺めて見たいと思ふ。

### (一) 神話的側面

日本に一番近いのはインドネシヤ諸島だが、其東南端にあるカイ島の開闢神話を紹介して見よう。昔々、天上に三人の兄弟と二人の姉妹とが住んでゐた。長兄はヒヤンといひ、末弟はバルパラといつた。或日末弟のバルパラは、長兄ヒヤンの釣針を借りて、海へ出て魚を釣つてゐたが、其中釣針を失つてしまつた。兄が怒つて是非とも見つけて、返してもらひたいと迫るので、弟は眼を皿のやうにして探し廻つたが、いくら探しても失はれたものは見つからない。困



つたことになつたと、心配顔をしてゐると、ふと一匹の魚に出くわした。其魚はバルバラに向つて『何故そんなに、浮かぬ顔をしてゐらつしやる』と聞いたので、實はかうくださ事情を話すと、『それは全くお氣の毒です。私も一所に探させよう』と、魚は眞剣になつて釣針を探したが、間もなく一尾の魚が、咽喉に何か物を立てゝわづらつてゐるのを發見した。ところが、其咽喉に立つてゐたものこそは、實にバルバラが長い間探してゐた遺失物だつたので、其事を魚は直ぐバルバラに告げ、バルバラは漸く釣針を手に入れることが出来た。

そこで、急いで兄のヒヤンに、其釣針を返したが、かなり長い間兄にいちめられたのが口惜しく、何とかして兄に仇を取つてやりたいと、色々考へた末、ひそかに椰子酒の波々が入つた竹籠を、さわれば直ぐひつくり返るやうにヒヤンの寢床の上に吊した。かくとも知らぬヒヤンは、眼を覺まして起き上ると、竹籠がひつくり返つて椰子酒がこぼれた。バルバラは『兄さん、こぼれた酒を返して下さい』と迫つたので、兄も當惑して、一所懸命に手で酒を掬つたけれども、大地に浸み込んでしまつたから、深くく地を掘つたら地に孔が明いて、孔の下に下界が見えた。兄弟三人と一人の妹は其孔から繩を下して下界に下り、地球上最初の住民、人間の先

祖となつたといふ筋である。此神話は全く我邦のホヲリの命、ホノスセリの命の、山幸と海幸とを取り換へられた神話によく似てゐる。

兎と龜との話もインドネシヤにある。日本では早足の兎が油断してゐる間に、鈍間の龜が先着したといふに過ぎないが、龜を鰐に取り換へると、あの因幡の白兎が鰐をだまして、隱岐島から氣多崎へ渡つたといふ話になる。スマトラやジャバやボルネオやマレー半島では、此兎が鼠鹿になつてゐるが、安南やカムボヂヤでは猿になつてゐる。ジャバの傳説によると、鼠鹿はかねく河を渡らうと思つてゐたが、洪水で水嵩が増して、迎も泳ぎ切れさうにはない。で、岸に立つて鰐を呼び、いふことには『私は今度王様の命令で、お前さん達の頭敷を調べに來ました』と、鰐は一列に並んで、こちらの岸からむかふの岸まで續いた。鼠鹿は『一つ、二つ、三つ』と計へながら、鰐の背中を踏んで對岸に渡り終ると、鰐のろまを嘲つた。此話は因幡の白兎が鰐を欺した話と少しも異つてゐない。たゞ兎が鼠鹿に變つてゐるだけである。かういふ風に神話傳説が似てゐることは、遠い昔に一つの元から出た神話傳説を携へて、インドネシヤ人やメラネシヤ人が、海上に出たといふことを證明するものである。



## (二) 土俗的側面

次ぎには土俗の側面を覗つて見よう。南アジアには、大抵、どこへいつても樹木崇拜が行はれてゐる。ビルマでは木を伐る前に、先づ其カラックに祈りを献げる。カラックといふのは、木魂即ち樹木の精靈のことである。タイの柚人はタクヒュンの木を伐る時、菓子或は米を其木の母親——ニムフに供へる。ニムフは其木の中に住んでゐるが、それを伐つて船に造ると、こゝろは船に乗り移つて船の守護神になるとタイ人は信じてゐる。マレイ半島で、ハンツ・カユといふのは、木の悪靈のことで、それは人に取りついて、病氣を起させると考へてゐる。ポルネオのダヤク族は、精靈の宿つてゐる樹木は伐り倒してはならぬ。若し伐り倒したら、きつと後で罰を蒙ると信じて居り、スマトラのマレイ人は、木は木魂の宿といふよりは、影に近いものだと信じてゐる。トンガ島の住民も亦た、木の根元に供へ物をする。

かうした信仰は、原始的なアニミズム、即ち有靈觀に基づいてゐるので、木には木の精靈があり、蛇には蛇の精靈があるといふのである。我邦でもよく老木に注連繩を張つたり、鳥居を立てたり、供へ物をしたりするのを見るが、それは樹木の靈を對象としたものである。深い森

の中で聲を立てると、反響を起すのをコダマといふが、コダマは木の魂で、ギリシャのニムフなどに似たものである。木扁に土の字「杜」<sup>ちま</sup>には、全然「森」の意味がないのに、それをモリと訓ますのは、多分初めに「社」と書いてモリと訓んでゐたのに、草書の爲め「社」<sup>やしろ</sup>の字をいつしか「杜」と間違へてしまつたのだらうといふ。日本でも昔、森は社であり、社は森であつた時代がある。かうした土着民族の信仰を度外視すると、飛んだ間違を惹き起すことがあるから、餘程注意してかゝらなければならぬ。

## (三) 技術的側面

次ぎには技術の側面について述べよう。技術は極めて範圍の廣いものだが、便宜上、初めに農耕の技術、特に稲作について話し、追々他のものに進むことにしよう。日本、印度支那、印度、馬來半島から、東印度諸島、メラネシヤ、ポリネシヤを経て、中米及び南米にかけ、籾段耕作といふ一種の耕作法が行はれてゐるが、それらの場所には殆ど總て、前述の金銀銅及び寶石礦の遺跡があるから、此耕作法は所謂「探礦家」の齎らしたものではないかと考へられる。籾段耕作といふのは、山腹の傾斜面に段を作り、堰を設け、水を湛へて稻其他を栽培するもの



であるが、インドネシアでは、大抵、其灌漑工事に石を用ひて居り、そして其住民の間には、自分達の祖先は石を裂いて出て来たといふ傳説があるから、石を用ひる事と、籬段灌漑をする事との間には、切り離すことの出来ない關係があると、人類學者の一部では考へられてゐるやうである。

我邦では籬段耕作を『棚田』といふ。代表的な棚田は長野縣更級地方にあり、姥捨山の傾斜面に小さい區劃を作つた水田が、折り重なつて耕されてゐる。稻を刈つた後では、秋の夜の月かげが田毎に映つて美しくいので、歌人はそれを『田毎の月』といつて賞美した。ジャバ島やルゾン島の棚田も、なか／＼綺麗なもので、よく日本のそれと比較されてゐる。

一體、稻の原産地は印度のデカン半島であるから、そこから各地に擴がつたといふことは否定出来ない。古代印度語では米のことをウルヒといつたが、それが訛つてアフガニスタンではウルチとなつてゐる。日本のウルチもやはりウルヒの轉訛に相違ない。米を朝鮮ではサルといふが、然らば『更級』とは『米の段』といふ意味で、籬段耕作をさしてゐる事に疑ひはない。

こんどは織物のことを考へて見よう。ジャバやボルネオでは、婦人は大抵腰機で布を織つて

ゐるが、これは經を縦に並べ、其末端を一括して前方の樹木などにくより置き、基端を腰當で腹面に排列し、其前方に中筒を入れ、極めて簡単な綜<sup>あや</sup>織で經を上下せしめ、其際<sup>ひ</sup>杼によつて緯<sup>いと</sup>を横貫せしめるもので、機織具としては一番原始的な種類である。日本のは腰機から一步を進めた居坐<sup>ゐま</sup>機で、朝鮮や支那のものと同一系統である。日本の機は、昔、中部支那から吳<sup>ウ</sup>織漢織<sup>ハン</sup>が傳へたやうにいはれてゐるが、ハタの語原は『布』<sup>ヌ</sup>を意味する古代印度語パタに相違ないから印度起源のものと考へられる。

スマトラの機は居坐機で、其織物の文様はきはめて複雑であるが、大體幾何的で、矢<sup>や</sup>緋などは其特徴だといはれる。すつと東の方のメラネシア、特にチモール島には、イカット織といつて、經緯を括り染めにして緋文様を織出す技術が發達してゐるが、それは元スマトラ、ジャバから傳はつたのだから、昔ジャバあたりは、機織や染色が今よりすつと盛んであつたらうといはれる。現にジャワの蠟染バチックはジャワ更紗といはれ、遠古に印度から傳はつたもので、それは同時に支那を通して日本にも入り、天平時代に葛纈として持歸された染色法である。

家屋はインドネシア、メラネシア、ポリネシア、何れも高床で、構架式の特徴を具へてゐる。



タイやビルマは印度の様式に近く、安南邊は支那の様式に近い。日本の固有建築は、伊東博士に従へば南方的であるといふことだ。

### 三、古代アジャ文化の名残

かやうに一々述べ立てると際限がない。それなら一括して述べればよいといふかも知れないが、それはなか／＼容易のことではない。

しかし、大體に於いて、印度支那地域は印度文化と支那文化との混淆したものであり、太平洋の文化は本来印度的だが、後に若干の支那を始め異國要素が入つて來たといへないことはない。之を宗教に譬へて云へば、佛教、婆羅門教、回教、儒教、原始的呪術宗教が雜然として併立してゐると同じことであるが、要するにアジャ型の文化であるといふことだけは確かである。然るにこれまで白人は南方共榮圏を搾取の對象となし、わざと其民族的發達を沮害して、出來るだけ彼等を愚化する政策を採つたから、どれもこれも一樣に未開野蠻だと考へてゐる向

もあるやうだが、それは大した錯覺である。彼等の生活には古いアジャ文化の根ざしがある。

試みにジャワを初め東印度の藝術品を眺めて見るがよい。竹細工でも、木細工でも、金屬細工でも、一種の緻密な技巧に目が奪はれるであらう。舊套的ではあるが、竹彫や木彫の唐草文様、寶相華文様、其中に包まれてゐる佛像などには、得もいはれぬ香味が漂つてゐる。かうした點では、印度支那、泰、ビルマも同じことである。私の有つてゐる一軀の印度支那のガネサ像、それは無造作に白檀を彫んだものだが、鑿の香りは至つて高いのを覺える。それも其筈、カムボヂヤにはあの著名なアンコル・ワット大寺院があり、ジャワには雄大なボロブドール大寺院があり、南方藝術の双璧だといはれてゐる。かうした大藝術を遺した人々の血液が、南方共榮圏の諸民族の血管には流れてゐるのだから、今後どんな發展を見るかもわからない。私達は彼等が日本の指導下に、其才能を十二分に伸ばして、あらゆる方面に活動を初め、アジャ文化の再建に貢献するのを氣長く待ちたいと思つてゐる。否々、もはや其日は來てゐる。まことに同慶に堪へぬ次第である。(昭和一七、三、九)



## 第六章 南方共榮圏の呪教

## 一、はしがき

南方共榮圏における諸民族の生活は、色々の點からこれを考察することが出来るが、中でも大切なのは其精神的方面、特に呪的宗教的方面である。今それを述べるに當つて、先づ圈内諸民族の分布について概観する必要がある。

先づ我邦に一番近いのがミクロネシア族で、これは日本領だから略して置く。其次ぎはフィリピン諸島から、ボルネオ、セレベス、ジャバ、スマトラなどを含む東印度諸島に至る間にインドネシア族が住んでゐる。其東から南へ亘る島々にはメラネシア族、其南にはオーストラリア族が住み、太平洋のすつと東北の沖にはポリネシア族が住んでゐる。スマトラの北に斗出

してゐるのが馬來半島で、そこにはマレイ族が住み、其北には泰國があり、泰國の東には印度支那があり、西にはビルマがあり、すつと印度に續いてゐる。大まかに云へば、泰、印度支那、マレイ、ビルマは引括めて印度支那地域といふことが出来る。

## 二、呪禁から宗教への發達過程

次にこれら諸民衆の宗教思想及び行事はどうかといふに、ちよつとわれわれの宗教とは異なる點が多いから、さつと其屬性を紹介して置く必要がある。人類學者の研究結果に従ふと、人間が神佛を信するやうになつたのは、すつと文化が進んでから後のことで、それより以前にはマジック、即ち『呪』といふものを信じてゐた。

呪は我邦でいふマジナヒと同じもので、人が幸福であるのは善靈がついてゐるからであり、反對に不幸であるのは悪靈がついてゐるからである。そこでマジナヒをして善き靈を招き、悪き靈を逐はうとする。これらのマジナヒは積極的のものであるが、消極的に禍害を免れる手段



として、威力ある人、物、畏しい場所などには、近づいてはならぬといふ掟が長い間に出来、さうした人・物・處には、それ〴〵禁忌の標示をする。其禁忌のことをタブーといふ。タブーせられたものや、人や、場所やへは近づいてはならない、入つてはならない、觸つてもよくない。若し近づき、入り、若しくは觸れば、タブーを犯した罪で靦面罰を蒙むると信じてゐる。此マジックとタブーとを引括めて『呪』といふのだが、呪の段階においては、まだ神や佛が分つてゐず、たゞ精霊だけを信じてゐるだけである。太平洋の諸民衆は、今なほ大方マジックの段階にあるが、中にはずつと進んだ信仰を有つてゐるものもあり、又もう一層低い段階に踟躇してゐるものもある。もう一層低い段階といふのは、まだ精霊といふものがわからず、只だ總ての物に生命があると信ずる状態で、それを宗教學の方ではアニミズムといふ。

つまり、アニミズムは一番原始的な考へ方で、其次の精霊を信ずるのがアニミズムである。精霊は定まつた形がなく、山なら山、海なら海に似た姿などをそれと考へるが、それが段段人の姿を有つて来て、初めて多神教になる。多神教はあすこにもこゝにも神々が澤山あると見るのだが、やがて、それらの神々が一つの神に統合されて、そこで初めて一神教になる。魚

の精霊、豚の精霊は、魚らしく、また豚らしい姿を有つてゐるが、それが段々人態を有つたところの魚神、豚神に進化する間に、半魚・半人、又は半豚・半人の段階がある。エジプトやメソポタミヤの神々は大方半人・半動物、半人・半植物の段階にあつたが、太平洋諸民族の間には今日でもなほさうした信仰を有つたものがある。

### 三、印度支那地域の宗教状態

印度支那地域の宗教は一番進んでゐる。舊佛領印度支那では、安南人が總人口の四分の三に當るほど多數で、昔から支那の影響を受けて儒教を信じてゐるやうに思はれるが、それは表面だけのことで、其實は祖先崇拜、精霊崇拜を核心とし、其上にいくらか佛敎的儀式を加味したりしてゐるだけのものである。安南人は、それ故に、アニミズムの信者だといつても差支へないが、現に老樹には老樹の精霊が宿り、山岳には山岳の精霊が宿ると見て、其樹や其山を崇敬し、又は禮拜する。ひとり山や木ばかりではなく、河も海も、其外あらゆる自然物を崇拜し、



それ／＼には精霊があると信じてゐる。動物では虎が一番崇拜されてゐる。實は我邦の古代に於いては、それに類した呪教的信仰が見られるので、私は常に兩者の間に若干の關係があるのではないかと思つてゐる。

カムボヂヤ人は婆羅門教を信じ、タイ族は佛教を信じ、チャム族は大方いふところの『鬼神』を祭つてゐる。鬼神はつまり精霊から神への過渡、或は半靈・半神の段階にあるものと見て差支へない。

泰國では佛教を『國教』としてゐるといつてよいほどで、王侯以下庶民に至るまで殆んど全く佛教の信者であるが、在住のマレイ人や安南人には、少數の回教乃至キリスト教の信者があるので、全人口の九五・二四％は佛教信者、残る四・七六％が其他の宗教信者だと計算されてゐる。

泰人の佛教信仰は頗る熱狂的で、男子は皆『一生に一度は必ず出家しなければならぬ』と考へてゐるほどだから、慈悲忍辱の心が自から國民全體の頭腦に浸み込み、年を老つたものや、衰れた不具者やに對しては、其傍を通る人々が掌を合はして拜み、動もすれば所持品を惜し

げもなく與へる。富裕な家では多數の寄食者を養ひ、さうすることを當然の義務と心得てゐるほどである。上は皇室の儀式を始め、下々の式典祭祀に至るまで、すべて佛教の形式に據るから、僧侶の數は自然多く、寺院もまた極めて多く、國內の寺院總數は七千六百三十二箇寺、僧園總數は八千十九箇所、聖場合計一萬五千六百五十一箇所だといはれる。僧侶は何れも禁欲生活を營み、粗末な黄布を纏ひ、頭髮を剃つて一心に勤行する。日々の生活は規則的で、早朝鉢に出かけ、布施によつて朝と午との二食を取り、午後は一切食物を口にせず、たゞ流動物を飲み下すだけである、彼等の托鉢行脚は物凄くいほどで、教理を研究する雨季三箇月の外は、悉くこれを靈場の訪問に費す。初めて泰國を旅行したものが見て驚くのは、全國到る處の野山に白色の團塊がちらばつてゐることで、『あれは何か』と知人に聞くが、『あれこそ有名なフラ・トドンの野營さ』と説明され、又問ひ反して漸く頭陀僧が白布を垂れた大傘の下に野營するといふことが理解され、初めて其狂熱振りに感歎せしめられる。佛僧は十二萬六千九百五十二人、雜僧は七萬一千七人、合計十九萬七千九百五十九人だといふことがわかれば、泰國が如何に盛んな佛教國であるかといふことは知れる。



マレー半島の宗教はまち／＼で、基督教、回教、佛教の信者もあれば、又極めて原始的な偶像崇拜や精霊崇拜もある。マレー人の中には回教が行はれ、ヂョホール・パールには立派な回教寺院があつて、昭南港の一名物となつてゐる。回教徒数は一、六九八、五三〇人で、総人口三、三五八、〇五四人の約半数に當つてゐる。

#### 四、太平洋諸島の呪教形態

次ぎには太平洋諸島における呪教を窺つて見よう。

東印度諸島の住民は、大部分基督教徒だと統計表などには出てゐるが、實は土着民衆の約九割は回教徒であり、他はアニミズムの信者である。フィリッピンの住民には、大分、回教や基督教の信者が多いが、胸の底にこびりついてゐるのは固有のアニミズム的信仰で、一種の神バタラと、人間の根元バリットと、萬物の靈チーバラングとを篤く崇敬してゐるらしい。

ポリネシア族の間ではタブーが盛んで、酋長や巫人やは『聖者』としてタブーされてゐる。

死人も亦たタブーの目的物で、マオリ族の社會では、屍に觸れたり、墓場で人間の骨に觸れたりしたものは交際を絶つことになつてゐる。血を忌んだり、髪を忌んだり、唾を忌んだり、名を忌んだり、あらゆる、物事、人にタブーを設定するのが、ポリネシアの呪術の一大特徴である。

メラネシアの呪術には『觸接呪』と『摹倣呪』と混合した類のものがある。たとへば浪に打たれて麵包の樹の實のやうになつた小石を海岸で拾ふと、メラネシア人はそれを麵包の樹の根元に置き、『どうかこの石のやうによい實がなつてくれよばよい』と念じる。そして其年、實がよくなると、他の場所で、他人の拾つて來た石を其石のそばに置き、其石の靈力を他の石に移さうとする。其石が麵包の樹の實に似てゐるのは摹倣の原則にもとづき、其石に他の石をくつつけるのは觸接の原則にもとづいたものである。

濠洲の原住民の社會では、トーテム組織が著るしいが、それに伴つた諸種の儀式はいづれも『交感呪』を伴つたものであり、マジックを離れては彼等の生活が空虚であることをわれわれに示してゐる。



## 五、むすび—科學的文化の光り

叙上は南方共榮圈の諸民族のマジックとタールとを、ほんの一斑だけ例示したものに過ぎないが、それでも尙ほ彼等の生活が如何に強く呪教に支配されてゐるかといふことだけは理解せられる。

さうした諸民族が現に今續々と、日本の提唱する大東亞共榮圈の一環として、われわれと一協同體を作らうとするに至つたのであるから、われわれはよく彼等の精神生活、わけでも其呪術と禁忌とを辨へて、彼等の上に急激な、無分別な改善を加へようとしたりしてはならない。改善は徐々であるべきだ。先づ詳しく彼等の土俗慣習を調査し、適當な文化工作を加へて彼等を徐ろに教化し、然る後に科學的文化の光りに浴せしめる手段を採らなければならぬ。

## 第七章 インドネシヤ文化

## 一、自主獨立運動の生起

去年の暮から皇軍は眞先きに南方の急所々々を攻略し、物の數でもない蘭印は後廻しにしてゐたが、三月になつて愈々ジャワに鋒先を向けると、日ならずしてバタヴィヤ落ち、スラバヤ落ち、遂に全面的無條件降伏となつた。

蘭印から比律賓にかけて住んでゐる土着民衆、特に其根幹をなしてゐるインドネシヤ族は、皇軍の此戦果によつて多年に亘る英米蘭の桎梏から、自分達の免れ得る日の近づいたことを悦び、蘭印とか比島とかの政治・地理的區劃を超越して、ひたぶるにインドネシヤ族といふ人種を標準にした血屬的大集團を結成し、一種獨特の社會的性格を有つた新協同體に發達させたい



といふ運動を起すものが續々と現はれた。

われわれ人類學的立場からインドネシヤ族を觀てゐる者は、此自主獨立運動の意義を十分に認めることが出來、且つ其實現が必ずしも不可能でないことを信じさへもするが、又他面、在來の地政的區劃に則準することも強ちよくないといふわけはないと考へるのである。いづれにしても永い／＼間、征服され、搾取されてゐたことは、自主獨立の力の弱かつたことを示すものであるから、歴史的觀點からは、彼等を解放し救出したところの日本民族の指導下に、大東亞共榮圏の一環として立たねばならぬことはいふまでもない。

果して然らばインドネシヤ民族として一つの血屬的・文化的協同體を結成することが、より合理的であり、より經濟的であるやうに考へられるであらう。

此際インドネシヤ族の體質的側面、及び文化的側面を窺つて見ることは、其新協同體の二大構素である血屬的地位と文化的様態とを明らかにすることになり、極めて緊喫重要な題目だといはなければならぬ。一般的にはさうした問題は、どうでもよいやうに思はれてゐるけれども、實はそれが一切の政治的・文化的工作の基盤になるのであるから、決してそれを忽諾に附して

はならぬのである。

## 二、インドネシヤの名稱と意義

インドネシヤといふ稱呼は、普通には東印度諸島、東印度、及びフィリッピン諸島などとして知られてゐる嶋嶼群を指示する名稱であるが、人種學的慣用に從へば、一定型の言語を操り、且つ容易に識別せられ得べき體質的特徴を有つてゐる種族を意味する。また地理的にインドネシヤといふ場合には、次に列記する八つの嶋嶼的地域を含んだ名稱である。

(一)マダガスカル、(二)スマトラ嶋群、(三)マラッカ半島の北部、(四)ジャワ、マドラス、及びバリ島、(五)セレベス島、(六)ボルネオ島、(七)フィリッピン諸島、及び(八)東經百二十度以東の島嶼。かういふと印度洋に隔てられ、アフリカの東端に當つて海中に泛んでゐるマダガスカル島が、どうしてインドネシヤに入るかといふ疑ひを起すものがあるだらうが、それは文化的にも體質的にもインドネシヤ的であることが、近頃はつきりと人類學的に知られた結



果である。

インドネシヤといふ分類の基礎は、本來、主として言語學的であつた。即ちインドネシヤ語族は、ポリネシヤと、メラネシヤと、ミクロネシヤとの間に横はつて、それらの言語組織を連結する鎖として役立つて來た。併しながら、昨今では言語學的といふよりは、寧ろ人種學的、民族學的に用ひられる方が多くなつたやうである。

初めインドネシヤ地域は、マレイシヤと呼ばれてゐたが、其名稱は恐らくそこに住む民衆マレイ族を規準として、つけられたところの人種・地理的稱呼であつたらう。然るに、其住民を調査して見ると、色の白いものがあつて、マレイ人とは種を異にしてゐるのみならず、住民の根幹をなしてゐることさへ知られたので、マレイシヤの名稱を改めてインドネシヤとしたのであつた。

最初にインドネシヤといふ名稱を用ひたのはロガンといふ學者で、非マレイ的な、色の明るい東方諸島の住民を其名で呼んだが、今日ではマレイ人でもなく、パプア人でもなく、人種學的に云へばカウカシクスの體性を有つたものゝ稱呼となつてしまつた。

### 三、インドネシヤ族の體質

一説ではインドネシヤを人種名稱として用ひた最初の學者はアミューイで、バタック族とメラネシヤの先マレイ人とを其中に包含せしめた。何しろインドネシヤ地域は、東方に於いてポリネシヤ地域に密接してをり、兩地域の民衆は共に非マレイ系から出で、共にマレイ・ポリネシヤ語を操つてゐるので、ちよいと考へると同一系統のやうに思はれるが、體格を見ると兩者は全く異つてゐて、インドネシヤ族は類蒙古型といふよりは、寧ろコーカシヤ型といつた方が適當な體質を有つてゐる。

インドネシヤ族をポリネシヤ族と區別する爲めに、一番古く、其特徴を列擧したヅニケは、インドネシヤ族は身長低く、其平均は一・五七メートルあり、頭形は中頭或は長頭で、其頭蓋指數は生態に於いて七八・五パーセントである。然るにポリネシヤ族は廣頭で、身長もまた高い。肌色と毛色とは兩者とも同一であるが、鼻、頤、顔の形は非常に異つてゐる。それに毛の



形が異つてをり、インドネシヤ族のそれは稍々卷縮してゐるといつた。

ツニケは更にインドネシヤ族をマレイ族に比べて、等しくマレイシヤに住んでゐる爲め、また個人的には双方が似通つてゐる爲めに、兩種族はこれまで混同されてゐたが、一般にはマレイ族がインドネシヤ族よりも身長の大いことは認められねばならぬ。インドネシヤ族の一・五七米に對して、マレイ族は一・七二米を算し、其間に〇・一五米の差があることは事實だ。マレイ族は廣頭で、其頭蓋指數は八五%であるのに、インドネシヤ族は七八・五%であるから、マレイ族の方が六・五%だけ短廣であるわけであるといつてゐる。

マレイ族は混血の度が強いのに、インドネシヤ族の血液は比較的純粹である事を指摘して、ツニケは東印度諸島住民の混血率を大體次ぎの如く推定した。即ちインドネシヤ族が、ビルマ人、ネグリ、ヒンヅ人、支那人、パプア人などゝ混血したものがマレイ種で、純粹なマレイ種はこれを原マレイといふことが出来る。インドネシヤ族と支那人との混血種が、ジャワ、北ボルネオ、北部フィリッピンに居り、インドネシヤ族とアラビヤ人との混血種が、ミンダナオ、スールー、パラワン島に住んでゐる。

又インドネシヤ族とヒンヅ人との混血種が、ジャワ、スマトラ、バリイ、南ボルネオに住んでゐる。一層注意すべきことは、東印度諸島の北部には、インドネシヤ族とネグリ族との混血種が住んでゐることである。

以上は極めて簡單であり、又新らしくもない報告に基づいたものであるが、ともかくもこれに依つてインドネシヤ族の體質といふものがわかる。しかし人種的動因は單に體質的條件ばかりではなく、文化的條件をも計へるから、次ぎにはざつと文化の側を窺つて見ることにする。

#### 四、インドネシヤ族の文化

インドネシヤ族は自分達の周圍を野蠻な住民に繞らせてゐる。たとへばボルネオのオロ・オト族、プナン族、スマトラのクブス族などが、全然採集生活を送つてゐるにも拘はらず、インドネシヤ族は土地を耕作し、鋤を使用するところの生産生活を営むことが注意の焦點で、それをインドネシヤ族の人種的差異を立證する憑徴とする事が出来る。インドネシヤ族の栽培する



のは米であるが、元は粟を耕作してゐたらしい。今では粟を耕してゐるのはチモール島の土着民、ダヤク族、アルフル族などだけである。

今一つの文化的特徴は、インドネシヤ族が刺戟劑としてベテルを噛むことである。ベテルは檳榔子の實を石灰と交せて、ベテルの葉で包んだもの、即ち蒟醬カンプで、それを噛むと、何とも云へない快夢を食ふことが出来る。しかし、これは阿片とは異つて、主として厚生的目的から口中を涼しくする爲めに行はれたものらしい。此慣習が涅槃の風俗と關係のあるのはいふまでもないことで、こゝにも文化的な人種動因の一つが見出される。

此外、次ぎに擧げるやうな文化現象も、觀方によつては人種鑑別の資料に供せられぬこともないが、こゝではさうした意味を主とせず、只だインドネシヤの習俗を眼前に髣髴させる爲めに叙べることにする。

(一) ジャワでは『アムボ』といつて、粘土を市場で賣つてゐる。それは主として妊娠したマレイ族の婦人が食べる爲めだが、インドネシヤ族の中にも、若干の土食が行はれてゐるともいふ。

(二) 今日ではどこへ行つても、インドネシヤ族の間には『食人』の風習は見出されないけれども、往昔は其風習があつたといふ風に人類學者は考へてゐる。何故かといふに、彼等の間には尙ほいくらか『首狩』を行ふ部族があり、又人骨や人頭で家を飾つたりする習俗が残つてゐるからである。

(三) インドネシヤ族の衣装で注目すべきは、第一にカインである。カインは兩脚の間と腰とに織物を巻きつけるもので、我邦の犢鼻褌と似たところがある。第二にはサロンといつて、織物で身體を捲くが、これは男女兩性に亘つて行はれ、印度から輸入せられた習俗であるといふ。ちよつと我邦の腰巻に似てゐる。第三に婦人はジャワットといつて、一種の貞操帯を用ひる。これが若し昔我邦で『下紐』といつて、男が解かなければ自分では解けなかつたものと同系統のものだとすれば、インドネシヤと日本との間には、深い文化的交聯があるといつてよい譯だ。

(四) 其外こまかいことを云へばいくらでもある。杭の上に四角形の家屋を作ること。これは昔、我邦にもあつたもので、『足一つ騰りの宮』などいふのと、多少の聯絡がありはしないか



といはれる。

(五) インドネシアでは『スムピタン』といつて、一種の吹矢を用ひる。弓は本來決して用ひなかつたが、ジャバとバリーとでは印度から、チモールとフロリスとではメラネシアから輸入した。日本の隼人族は梓や楯は使つたが、弓矢は決して用ひなかつたといふ。吹矢は日本にも見られたもので、私達の子供の時には、それで雀や鶉を覗つたりした。

(六) インドネシア族は、クリス劍を用ひた。クリスは彼等の國民的武器であるが、材料は青銅だから他から輸入したものに相違ないと、初めの間は考へられてゐたけれど、最近の研究では必らずしもさうではなく、インドネシアの諸地方に金屬製錬の跡があるから、自分達で造つた時代があらうといふことになつた。

(七) 四角形、又は六角形の楯を使用する。楯の側面は彎曲し、裏面に把手があり、表面に動物文又は植物文を表はし、首狩族の間では敵首の髪を切つて、それを楯一面に植ゑつけることが悦ばれた。『延喜式』の隼人式を見ると、威儀に用ひる楯は一百八十枚で、各々長さ五尺、廣さ一尺八寸、厚さ一寸で、頭には馬尾を編著し、赤白土墨を以て鈎形を畫いたとあるから、

インドネシア型楯であつたと思はれる。

(八) 入墨が行はれたのは、ダヤク族、イゴロット族を初め、セラム島やチモール島やテミムバア島の土人である。これも日本の入墨と比較さるべきものと思ふ。

(九) 次ぎには家庭生活の上に現はれる傳統的慣習を覗いて見よう。

第一には改名の掟がある。即ち父親は子供が生れると、先代の名を自分につける定めで、これは我邦にもある習俗だ。

第二にはサク、或はマルガといつて、同一氏族内では結婚をせず、異民族とのみ結婚する風習がある。

然しセレベス北部のアルフル族とダヤクとでは、此族外婚を必ずしも避けない。

第三には、一般に父家長制が行はれてゐるが、スマトラの上パダン郡だけは除外例とされてゐる。

第四には親類を、ブギ族では『ソムボ』、ダヤク族では『ハラク』といつて、花嫁を迎へると直ぐ其身代をそれに拂ふ。日本の結納もこれに似たものである。



(一〇) ダヤク族、ニヤ族、アルフル族、セレベス島のトラジャ族、セラム島、チモール島では首狩が行はれてゐる。臺灣の高砂族がつい此間まで、首狩を行つてゐたのは周知の事實である。我邦も封建時代までは、槍先に敵首を貫いた慣習があつた。

(一一) 一般にインドネシヤ地域では、族有財産が認められてゐるが、しかし同時に私有も認められてゐる。

かうしたインドネシヤ地域の社會習俗を嚴密に検討して見たならば、我邦と南方との間に昔どれだけの交渉があつたかといふことはわかつて来る。元來、習俗は永い／＼間に凝成されたもので、祖先以來の傳統が多いのであるから、それらを容易に改めることは不可能であり、強ひてそれらを廢棄させることにすると、恐ろしい反抗の氣分が起るのを常とする。

かるが故に、侵略國、或は征服國では、利弊に拘はらず舊慣の保存を心掛け、舊慣調査を利己の點から大切にして來たが、共榮圈の場合に在つては、惡習を芟除して良俗に轉向せしめることが要請せられるから、そこにむづかしい諸種の問題が起るのである。

## 五、インドネシヤと日本の先史的關係

インドネシヤの過去を本當に知らうとすれば、考古學的調査、史學的研究がどうしても必要になつて来る。在來、インドネシヤで發見せられた濠洲型乃至太平洋型の人體化石、及び文化遺物の代表的なものは何々かといふと、眞先に擧げられねばならぬのは、マレイ半島西海岸にあるウエレスレイ州の貝塚で、アールといふ人の發掘した頭蓋骨破片は、ハックスレイがそれを調査して類濠洲人型として報告してゐる。又マンスイと其共同研究者の手で、東京の洞窟で發見せられた頭骨は、メラネシヤ型だといはれてゐる。更に男女兩性の骨格及び頭骨が、一八八九年、及び一八九〇年にファン・リースホーテン及びデュボアの手で、東ジャワのワヂャクに近きラワ・ベニン湖岸の山腹で發掘されたが、それらは長頭、長身種に屬するもので、現在のジャワ住民とは全く異り、近代オーストラリヤ人の頭骨に似てゐるといふので、デュボアは此ワヂャク人を『原濠洲人』と命名した。



これらの人體化石を綜合して考へると、濠洲人の祖先がマレイ半島からジャバを経て、オーストラリアに入つたこと、メラネシア人の祖先が東京あたりを彷徨してゐたことがあつたと結論されて來て、遠古のインドネシア史に光明を投射する。

次に舊石器時代遺跡といはれるラモンチョン洞穴が、セレベス島の南西半島内部に在る。それはトアラ族の住居區域であるマカッサルの東六〇キロに位置してゐる。此トアラ族といふのは、今日こそ土地を耕してゐるが、最近までは狩獵と採集とで生活を支へてゐた一部族である。

此洞穴はポール及びフリッツ・サラシンによつて、一九〇二年、一九〇三年に發見、調査されたもので、其數は總て五つあるが、いづれにも灰層があつて、其中に狩獵動物、石器、骨、齒、及び貝殻などを包含してゐる。石器は主に石英岩、安山岩、石灰岩製で、只だ一つ燧石製のものがある。全體に甚だしき粗製だ。初め完全な石塊を一撃によつて碎き、それを更に數片に裂いて、良い形のものを選び、他は捨てることにしたらしい。

石器の中には皮剥、突針、及び双刃、稀には片刃の小刀がある。最も多いのは石鏃で、有莖のものゝ無莖のものゝがある。無莖石鏃はトアラ族が金屬片を木棒の間に挿むやうにして用ひられたらう。骨製或は猪牙製の錐狀鏃は、ちやうど南海やアメリカでのやうに、一端を針に他端を錐に使つたと思はれる。貝殻の破片は皮剥ぎ又は搔撈り用に使はれ、小さな笛は長い趾骨から造られてゐる。穿孔したした人骨片は多分、護符として用ひられたであらう。家畜や栽培植物の遺物は全く見當らないが、犬は知られてゐたらしい。骨の發見せられた動物は、今日も尙ほセレベス島に棲んでゐる種である。

ラモンチョンの石器は、一見ヨーロッパの舊石器時代、特にマグダレーン期のものに似てゐるが、細工は遙かに原始的である。しかし無莖石鏃は、他の場所では、新石器時代にしか逢着しないものであるから、此洞穴の居住者は近周の新石器時代文化に影響せられたに相違ない。現に一個の土器破片も灰層で見出されてゐる。弓は一切セレベスでは知られてゐないのに、洞穴内で石鏃が發見されたといふ事、此一例を除きインドネシア、印度支那の先史遺跡では、どこでも石鏃が發見されないといふ事は注目し値する。

有莖石鏃は日本の新石器時代遺跡に多く、又フィリッピンでは十七紀まで石鏃が用ひられて



わたから、これらの石器は新石器時代に、日本からフィリッピンを経てセレベスに達した古代文化の流れを痕づけるものとして観るべきであらう。

これらの石器は支那渡來の鐵器を有つ最近の地層で蔽はれてゐるから、ラモンチョン遺跡は舊石器時代の狩獵・採集生活者の文化を表はすものであり、従つて現在のトアラ族は其洞穴居住者の直接後裔と考へらるべきものである。

今一つスマトラのウル・チャンコの洞穴でも、舊石器時代の遺物が發見されてゐるといふ。又新石器時代の遺跡は東インドネシアとフィリッピン諸島とに珍らしくないが、餘り長くなるから、此邊で一先づ筆を擱くことにしよう。

## 六、不思議なのはインドネシアの過去と將來

日本の石器時代がインドネシアに影響を與へたといふことは、歐米の考古學者の肯定する所であるが、果して然らば日本とインドネシアとの文化的交聯は、私が既に手つけたやうに、

將來、必らず多數の學者によつて立證を試みられるに相違ない。我邦と南方圈特にインドネシアとは、自然地理からいつても、人文地理からいつても、殆ど離すことが出来ないほどの密接な關係を有つてゐるのだから、文獻的にも歴史的にもそれが無いといふ筈はないではないか。『さうした豫察から、それ故、私はかなり長く研究を續けて來て、今では其關係を可視的に再現し得べき資料を相當に多く集めてゐるが、いつになつたらそれらを整理し終つて、われながら心ゆくまでの論文を書き得るか。まことにじれつたい思ひに頭髪をかき撈らすにはをられぬ。

インドネシアだけの事でも、書き立てれば一冊や二冊の書物は直ぐ出来る。インドネシア族が大陸から海中に入つた動機は、秦の始皇帝が方士を蓬萊に遣はしたといふ傳説で示唆せられる通り、長生不死の藥を求めたものに相違なく、スマトラ、ジャバ、セレベス、ボルネオ、フィリッピン諸島、ニュー・ギネアと、表日本海をぐる／＼廻つて、到る處に其携行した優秀文化を移植したから、それらの遺跡はこゝかしこに見出されるのである。

遠い／＼舊石器時代遺跡も面白いが、黄金を求め、白銀を求め、赤金を求め、寶石を求め、



璧玉を求め、巨石建造物を遺し、籬段耕作術を遺し、原住民の食料採集を食料生産に推し進めたほどの功績を立てながら、いつしか自分達も徒跣半裸の原始生活に還つてしまつたインドネシア歴史時代早期の史實こそは、實に『アラビヤン・ナイト』以上の興味である。若しインドネシア族にしてそれを知つたなら、發憤、興起、努力、精進して表日本海にどんな文化世界を再現するかもわからない。不思議なのはインドネシアの過去と將來とである。

## 第八章 東印度諸島の文化

### 一、時代的區分

東印度諸島はアジャとオーストラリアとの間へ、ちやうど板塀のやうに挟まつて、西から東へ連つてゐる嶋嶼群で、小さいものは計へきれないほど澤山あるが、大きな島はスマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベスの四つで、それを大スンダ群島といひ、バリ、ロムボク、スம்பワ、フロレス、スம்பバ、チモール、サヴ、ロチの諸島を小スンダ群島といふ。それら二群島の外にモルツケン群島、ニューギニヤ島を合せて、其總面積は百八十九萬九千七百五十一平方キロある。

かうした廣大な地域が、緯度は南緯十一度から北緯六度まで、經度は東經九十五度から百四



十一度までの間、大海の中に散在してゐるのであるから、交通機關の十分整はなかつた時代には、完全な統一の見られよう筈がなく、いはゞ村落分立の觀を呈して、纏まつた民族文化といふやうなものはなかつた。

しかし、多くの人類學者がいふ如く、ジャワは東印度諸島の焦點であり、それによつて東印度諸島全體を代表せしめることは不可能でない。だから私はジャワを中心として、他の諸島に觸れつゝ、東印度諸島の文化的展開を窺つて見ようと思ふ。何しろ二千年に亘る長い歴史なので、普通にはそれを先原史時代、婆羅門時代、佛教時代、東印度會社時代、和蘭統治時代の五時代に分けるが、こゝでは古代のことだけを述べよう。

## 二、先原史時代

西紀前五百年も千年もに溯つて、蘭印諸島に住んでゐた最も古い住民は、ネグリトといつて、身長が短い、毛髪が縮れた、脚の内側に反つた、顎の突き出た人種であつたといはれる。

ジャワには以前カラングス族が住んで居り、ニューギニアには今尚ほカロンス族が住んでゐるが、それらは共に矮人で、マライ半島のセマンガヤ、フィリッピン群島のアエタヤ、アンダマン島のミンコッパイと同種である。

何しろジャワでは世界中で一番古い人間の骨——それは今の人間とは種を異にしてゐるピテカントロプスといふ類猿人の骨が發掘されたほどであるから、こゝで矮人が發見されたといつて驚くには當らぬが、然らば矮人はいつ頃蘭印へ來たか、どこから渡つて來たか。之に對する答は様々だが、印度支那から移つたといふのが穩當な答へらしい。矮人は昔支那にもゐたし、日本にもゐたらしいから、蘭印の最古住民は矮人であつたと見て差支ない。

矮人文化は最も程度の低いもので、中には『一つ、二つ』と計へて三つ以後はわからず『それから〜』と指を折つて、十本目に『皆な』といふのがあるほどである。パタヴィヤ博物館に保存されてゐる石器は、多分かうした矮人が遺したものであらうが、外にはどんな文化的痕跡も残つてゐない。

次に紀元前五百年頃、マライ半島を傳はつて蘭印諸島へ移住した種族がある。それを以前



にはマライ族といつたが、マライ族は新しい種族なので、今日ではインドネシア族と呼ぶことにしてゐる。マライの名を踏襲したがる人々は、御苦勞にもわざ／＼真正マライとか、純粹マライとか呼んでゐる。

此種族は既に農耕を知り、灌漑によつて水田で稻を栽培したのみならず、腕木附の船を造り、それを使い廻す技術をも有つてゐた。船を造つたり、灌漑用の石堰を作つたりするには鐵器もあつた筈であるし、水田耕作をするのには水牛か牛かを使つた筈であるし、彼等の文化は非常に進んでゐたと見なくてはならぬ。最近の學說では、彼等は貴金屬、寶玉を求めて海上に泛んだもので、移住の際にはそれ／＼の技術家を伴つてゐたといふ。フィリッピン群島の住民も矢張インドネシア族で、山間の傾斜地に籬段を作り、隴を築いて溝から引いた水を堰き止め、自然のままでは水田の出來ない處に水田を作る。で、之を籬段耕作文化といふが、それは我邦へも入つて來て、民族生活に重要な經濟的支援を與へてゐる。日本古代の隼人族は多分インドネシア系であらうといはれる。

### 三、婆羅門時代

紀元前後にヒンヅー人が蘭印諸島、特に大陸に一番近いジャワ島に着眼し、若干の商人がジャワへ入り込んだところ、統治者がそれを優遇し、自由に珍らしい物資を輸入せしめたので、島民の間にヒンヅー文化が追々と行き渡るやうになつたといはれる。

ジャワの年代記によると、紀元七五年、西北印度に強大な勢力のあつたアジ・サカといふ王子が、グジャラトからジャワに移つて其統を傳へたといふが、それは半ば傳説で、信用するに足りない。しかしエルフィンストンスの研究によると、『唐書』の訶陵といふのはジャワのこととて、ヒンヅー人が多數ジャワに渡つて住民を開化に導いたことは首肯される。

現に紀元四一三年に印度の旅から歸つた支那の巡禮法顯の『佛國記』を見ると、耶婆提といふ國では、外道の婆羅門が隆盛で、佛教は言ふに足らぬとあるから、移住したヒンヅー人は婆羅門教を輸入したことが知れる。シュニットガアの報告によると、スマトラ島には多數の圓柱



が残つてゐるといふが、中には佛教遺物といふよりは婆羅門の遺物と見る方が適はしいものがある。

訶陵國からは唐の元和八年（八一三）に、黒奴を鸚鵡や頻伽島と共に支那に貢獻してゐるから、其頃まで此王朝が続いてゐたことは明らかである。

然るに或年代記は、紀元六〇三年頃、グジャラット王が其王子達と五千人の従者とを率ゐてジャワに入り、メダン・クムランの町を建てた。従者の中には農民、技術家、武士、醫師、文學者が居り、六艘の大船と百艘の小船とで運ばれて來たが、更にまた二千人の移民が故國から送られた。中には石工と眞鍮細工師とがゐたといふ事を傳へてゐる。此傳説はそれらの技術家が佛教寺院を建てたことを私達に示唆してゐる。

#### 四、佛教時代

然らば佛教はいつ入り、いつ頃榮えたか。七世紀初頭の文獻に依ると、西ジャワの王アヂチ

ヤ・ダールマは熱心な佛教信者で、其勢力はスマトラにも及んでゐたが、遂にジャワのシワラガ王を征服して一大王國を建てたとある。シワラガ王の名から推すと、此王は婆羅門の信者であつたらしいが、其敗亡によつて婆羅門教が衰へ、佛教が興隆に赴いたことは疑ひの餘地がない。

しかし、本當に佛教が隆んじたのは、スリウイジャヤ（尸利佛誓）王國がスマトラに勃興し、次第に其勢圏を四方に弘げて、中部ジャワの訶陵王國を亡ぼしてからのことである。所傳が曖昧で、一事が二事に傳へられたり、二事が一事に誤られたりしてゐるらしいので、真相を掴むことは困難であるが、諸傳説を綜合すれば印度からの移住者によつて、活潑な佛教建設運動が起り、一面に於いては婆羅門教を衰へしめ、他面に於いてはプラムバナムやポロブツールの大寺院が建てられるに至つたことは確實である。

ポロブツール寺院は雄大な規模を有ち、其基部は四百呎四方あり、九段の成壇にはそれぞれ優れた浮彫が施されてゐる。第一段の浮彫は二千を算し、それを一列に並べると二マイルを超える。第二段は二百で、上下二列に配列せられ、上列に佛陀の生涯、下列に佛教物語が表はさ



れてゐる。面白いのは其浮彫中に今日もインドネシア族の間に行はれてゐる腕木附の船が現はれることで、此船の型式が如何に古いものであるかゞわかる。

いづれにしても、これだけの大石造建築を完成するには、相當の長年月と優秀な藝術的手腕とが必要であるが、事實それを成し遂げたのであるから、スリウイジャヤ王朝の實力といふものは非常に強大であつたと考へなくてはならぬ。グジャラット王移住の傳説にあらはれてゐるやうな集團の存在は、これを否定することが出来ない。單に建築や彫刻の技術のみならず、百般の工藝も此時印度から輸入されたことであらう。

ボロボツールの建築の始まつたのは七五〇年頃であらうが、我邦ではちやうど文化が絶頂にあつた奈良時代で、南北時を同じくしてジャワと日本とに佛教が興隆したのは不思議である。天平時代の燦爛たる佛教文化を語る正倉院北倉の蕩纈屏風四扇は、印度的主題と天平式模様とを蠟染めにしたもので、勿論、我邦で製作されたものではあるが、其蕩纈法即ち蠟染めの技術は、印度から唐へ、唐から我邦へ傳はつたものである。印度から唐へ傳はつた如く、それは佛教藝術に伴つて、スマトラを経てジャワへも傳へられ、現に今日でもジャワではバチックとい

つて、優秀なる蠟染法が残つてゐる。

今から四百年も前、バタヴィヤ地方では優れた更紗が作られ、それを發見したオランダ人は之を本國に輸入して『ジャワ更紗』の名がヨーロッパに廣がつた。歐洲人の渡來と共に我邦へも更紗が傳はつたが、それは支那人が『華布』と呼んだ木版更紗で、今日も尙ほアーメダバット附近では多量に製産せられてゐる。誰れしも氣づかずにゐることだが、我邦の緋織物、特に矢緋の如き經糸模様染は、明石染人氏の研究によれば、印度のラヂプタナーで出来るものと同一系統で、オランダ人が印度、南洋の織物類を長崎に運び込んでから、我邦で初めて其技術を知つて、それを採用し始めたのだといふ。

緋の事は挿話に過ぎぬが、蕩纈法が證據を提出してゐる通り、日本とジャワとは人種的にも關係ある如く、技術的にも姉妹關係にあるのである。其ジャワやスマトラがもう間もなく、大東亞共榮圈に参加して、日本と共にアジア人のアジアを建設して、御互の共存共榮を實現することになるのは面白い事だ。



## 第九章 南方文化史點描

## 一、南方は世界文化の搖籃

米英支蘭包圍陣が我邦を脅威し始めてから、われわれ日本民族の南方についての關心は深くなり、今までは只だ『南洋々々』と一概にいひ慣らしてゐた地域を、やれ蘭印、やれ比律賓、やれ濠洲、やれ馬來、やれ印度支那、等々と、それ／＼の國家、民族にわけて考へて見ることになつた。

南方には一種共通した南方文化といふものがあるやうだが、果してそれは一つの系統か、又はいくつもの系統があるのかと聞かれると、誰れしも容易に答へられない。南方の現状について、特に其經濟、政治、宗教、土俗などについての記述は少くないが、一貫した文化史といふものは殆ど見當らない。見當らないのも無理はない。かうした原始民族には多く歴史がなく、數百年を溯れば石器時代であるからだといふ。

けれども印度や支那は早くから文化が開け、古い文献や記録が多いから、ヨーロッパ人には新らしく發見された印度洋であり、太平洋であつても、アジア人にはそこが昔から自分達の住んでゐた場所である南方の歴史がわからぬ筈がない。實はヨーロッパがまだ開けないで、其住民が混沌たる野蠻生活を營んでゐた間に、南方では既に相當進んだ文化がもたれてゐたのであつた。

私は今こゝに南方の文化史を秩序立てゝ話すだけの用意はないが、極めて古い時代から近世早期に至るまで、長い間の歴史を思ひ出すまゝに點描して見たい。

私の考へでは南方は世界文化の搖籃地で、今日の文明の基礎は實に南方に据ゑ初められたと思ふのである。ローマやギリシヤの文化は新らしいもの、エジプトやパピロンの文化も南方に比ぶれば物の數ではない。



## 二、ピテカントロプスとシナントロプス

一體、初めての人間はどこで生れたか、といふ大問題になると、人類學者でさへ容易に之に答へることは出来ないが、化石の示す限りでは、『人間』の中に計へてもよい動物が初めて現はれたのは、ジャワのトリニルといふ小村で、その古い地層からピテカントロプス・エレクツスの骨が出た。素より完全な骨格が出たわけではないから、はつきりした事はいへないけれども、頭の骨は脣パンのやうに圓平たく、足の骨はゴリラのやうに『く』の字なりに曲つてゐたらしい。

これらの遺骨から推測すると、此動物はゴリラや狒々や猩々などと同じ仲間の類人猿ではなかつたらしい。少くとも立つて歩くことが出来たから、人の特徴を立つて歩く事とすれば、人の中に入れなくてはならない。けれども之を今日の『人』と同一視することは出来ないので、猿に似た人といふ意味で、之に『立つて歩く猿人』といふ名をつけた。ピテカントロプスは『猿

人』、エレクツスは『直立する』の意である。

それから近年支那北京の近くの周口店といふところで、ピテカントロプスよりは進んでゐるが、他のどんな古い人骨よりも一層古い人骨が発見されたので、これにはシナントロプス・ペキネンシスといふ名が命ぜられた。シナントロプスは『支那人』、ペキネンシスは『北京の』といふ意味である。

在來は中央アジアこそ人間の祖先の出た場所だと、一般に考へられてゐたが、ジャワや支那でこんな古い人骨が出て來ると、中央アジアよりジャワ・北京間を其搖籃地と見る方が正しいといふことになり、在來の考へ方は一時全く轉覆してしまつた。然るに又別の化石が発見せられて、今日では印度の北方が人間の祖先の出現した場所ではないかといふ考へが盛り返した。

しかし嚴密に云へば、苟くも『人』といひ得る最古の骨はピテカントロプスであるから、それに伴つて世界最古の文化、即ち人間の生活様式——例へば石を擲つて木の實を落したとか、木の枝で動物をなぐり殺したとか——が定まつたわけであるから、南方を世界文化の搖籃地といつても差支へないのである。然らばそれは凡そいつ頃かといふと、まづ今から百三十五萬年



前、大まかには百五十万年ぐらゐの前だといつても差支へない。

### 三、濠洲からシベリヤまで地続き

ピテカントロプスやシナントロプスのやうな原人が、どうして島から大陸へ、大陸から島へ渡る事が出来たらう、其頃から船があつたらうか、などいふ質問の出ることがあるが、何しろ地質時代には地球の表面は今日とはずつと異つて居り、濠洲から印度までは、ボルネオの邊りにちよつと切れたところがあつただけで、他は皆な地続きであつた。又日本海などはなく、シベリヤから日本へ、日本から支那の方へも地続きであつた。北の方ではアメリカへも地橋を渡つてゆくことが出来たらしい。

それだから海を超える事の出来ないテウセンマツが、蘇聯領沿海州のシホク・アリン山脈から、滿洲、朝鮮、日本の乗鞍、燕、日光の諸山に分布し、ハヒマツもバイカル以東、カムチャツカ、千島、樺太、朝鮮、日本に分布してゐるのだ。マコモの如きも、シベリヤ、日本、北ア

メリカといふ風の分布を見てゐる。印度あたりから巨象がどすん／＼と大地を踏んで日本へ來たり、シベリヤから多毛象がのそり／＼と南方に向ひ、支那へ行つた序に日本へ廻つたものがあつたから、一時日本は熱帯的であつたこともあり、又寒帯的であつたこともあるのだ。

こんな風だから、類人猿はどし／＼と何處へでも移動することが出来た。従つてそれより進化してゐる猿人は今のアジア大陸と東印度諸島とオーストラリヤとを股にかけて歩いてゐる筈だ。人類の中で一番原始的だといはれる矮黑人ネグリト人は、今日ベンガル灣のアンダマン島、マレイ半島の山中、東印度諸島のジャブとニューギニヤ、フィリッピン諸島のルゾン島に住んでゐるが、彼等のさうした分布は、地続き時代に見られたものと解すれば別に不思議はない。

### 四、印度文化と支那文化

印度のデッカ半島南半で發掘せられた石器を見ると、いづれも打製であつて、いはゆる『舊石器』に屬してゐる。ネルソンの計算に従ふと、これらの舊石器は紀元前一萬年ぐらゐのもの



で、それを遺したものは今のネグリトの祖先でなくてはならぬ。

濠洲の石器時代遺跡は東部と南部とに發見せられるが、ミルンヨング貝塚は長さ三〇〇呎、廣さ五〇呎、高さ一六呎もあるから、餘程長い間かゝつて堆積せられたものに相違ない。南西海岸のハノーヴァ灣の貝塚は、ミルンヨングのそれよりは小さいが、石器も土器も發見せられず、すつと表面に近い處で半磨半打の石器が出土する。此石器には磨製的手法があるけれど、それは時代が新しい爲めでなく、地方化に過ぎないものであつて、舊石器時代のものに相違なく、其年代は少くとも一萬年以前、遠く見積れば十萬年ぐらゐる前まで溯らせることが出来る。と、キーン教授はいつてゐる。

舊石器時代の間、世界はどこへ行つても同じ文化程度で、いはゞ人類全體は共同型の生活を送つてゐたと見ることが出来る。然るに新石器時代が來て、西アジアからエジプトに亘る地域——つまりアジアの一角に於いて文化が突發し、それが人間生活に急激な進歩を齎らした。此新文化が即ちウィッスラ博士のいはゆる『古代中央文化』で、西方ではエジプトとバビロンが其中心であり、北に入つてはクレタ、ギリシャの文化となつて、ヨーロッパ文化に發展し、

尋いでアメリカに入つて『歐米文化』を完成した。それは主としてツンドラ地帯に發展したから、『ツンドラ文化』といふことが出来る。

文化中心から東に向つたものは三分し、一はシベリヤを通してアメリカに向ひ、他はタクラマカン沙漠を通して支那に向ひ、今一つは海路に依つて印度に向ひ、かうして中米文化、支那文化、印度文化といふものが育まれたと見る。

中央地帯から南に展開してゐる地域は藪林地帯で、そこには新石器時代以前の舊文化が殆ど何らの進歩を見ずに傳承された。それが即ち『藪林文化』である。然るに中央文化が北に移動すると同時に、南にも移動して若干の變化を與へることになつた。太平洋文化はつまりそれであつて、進歩した中央文化が、進歩しない藪林文化の中に割り込み、そこに二重機構を有つた文化を出現することになつたのである。

## 五、日子文化と其構素



普通の西洋史や東洋史は、一行も書いてゐないことだが、エジプトからアメリカまで、非常な廣域に亘つて一種の『太陽巨石文化複合』といふ文化現象が見られ、それは紀元前四、〇〇〇年乃至九、〇〇〇年の間にさうした分布を見たやうである。

此古代文化に對してペアライ博士は『日子文化』といふ名稱を興へてゐる。日子文化を構成するところの要素は數々あるが、其基礎的なものは十五ある。

- 一、灌漑耕作。
- 二、石材使用。
- 三、石像彫刻。
- 四、土器製造。
- 五、金屬細工及び眞珠採集。
- 六、磨石器使用。
- 七、二類を有する支配階級。

(a) 神婚によつて生れ、同族婚を實行する、天界と關係ある日子の階級。

(c) 地下と關係あり、戰爭の首長とせられる階級。

- 八、太陽崇拜。
- 九、木乃伊の製作。
- 一〇、大母神の信仰。
- 一一、農業及び母神崇拜に結びついてゐる人身御供。
- 一二、母權。
- 一三、トーテム組織。
- 一四、二重機構。
- 一五、異族結婚。

かう並べて見たところ興味はないが、一々説明して見ると、なるほど首肯されることが多からう。エジプト、メソポタミヤ、イラン、印度、ビルマ、印度支那、マレイ半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス、ニューギニヤの諸島を初め、メラネシヤ、ポリネシヤの諸島を経て、アメリカのメキシコ、コロムビア、ペルウには籬段耕作といつて、山腹の傾斜面に



土手を築いて水を湛へ、それに稻を栽ゑる方法を講じた遺跡がずらりと列んでゐる。日本では田毎の月で有名な信州更科、フィリッピン諸島のルゾン、蘭印諸島のジャバの籾段耕作は代表的のものである。

籾段耕作には石を使はないところもあるが、大體に於いては石材を用ひ、石材を用ひるところでは石像を彫刻し、土器を製作し、金屬細工をなし、磨石器を使用し、眞珠を採集して裝飾にしたり、呪術に用ひたりする。かうした地域では、太陽を崇拜し、大母神を信仰し、農業と母神崇拜とにからまつた人身御供が認められ、社會組織から見ると母權が強くと、トーテム組織があり、結婚は異族間に行はれ、死んだら木乃伊にするといふ技術が知られてゐた。此地域では『日子』、即ち太陽の子と稱する支配階級があつて、其血統は天に屬してゐたが、やがて地に屬する戦争の首長が現はれ、文化的二重機構が見られるに至つた。かうした諸文化を一つのブロックとして見ると、これまで東半球とは全く別に發達したと思はれてゐた西半球の古代文化も、やはり此文化の移動したものであることを認めずには居られない。

## 六、佛教文化の東漸南漸

傳説に従ふと、紀元一世紀に西北印度のアジ・サカといふ王子が、ジャバに渡つて其住民を開化に導いたといふが、此時はまだ佛教が輸入せられてゐなかつたらしい。しかし第五世紀にジャバに行つた支那僧は、婆羅門教が盛んで、佛教はいふに足りないといつてゐるから、もはや佛教は入つてゐたらしい。

一體、佛教の宣傳は紀元前三世紀に、阿育王がマツジャンチカを諸地方に遣はしたのに始まるが、それは重に印度内地のことであり、國境外に弘まつたのは後の事である。支那へ入つたのは紀元一世紀で、カシヤパ・マタンガが洛陽の白馬寺で、楚王英らに感化したのが初めてあるが、四世紀には朝鮮に、六世紀前半には日本にも傳つた。

タイの傳説では、佛教の入つたのは紀元七世紀で、婆羅門族がビルマ、ペグー、ラオス、タイ、カムボヂヤといふ順に移住を開始した時一所に齋らしたのだといふけれども、それは最初



の輸入でなくて、幾回目かの大量輸入であつたと思はれる。ジャバへは七世紀の初めに、グジャラット王が農民、技術家、軍人、醫師、文學者らを率ゐて植民し、それが基になつて、かの巨大なボロブゾール大寺院が造られたらしい。

ボロブゾール大寺院と、カムボヂヤのアンコール・ワット大寺院とは、建築設計からいつても裝飾技術からいつても、正に同一の手法であつて、其年代も大差ないものと思はなければならぬ。

ジャバに残つてゐるバチックといふ蠟染法は、支那人が『華布』と呼び、我邦で『ジャワ更紗』と呼ぶもので、多分グジャラット王がジャバに移住して來た時齎した技術であらうが、それは同時に印度から西域を経て、或は海路によつて支那に傳へられ、支那から日本へも傳へられて、奈良時代の藤纈法となつたのである。

然るにこれらの古代文化が衰廢して、南方は全く自然の叢林と化し終り、僅かにジャワとかスマトラとか、二三の場所に昔を偲ぶ遺跡が見られるだけで、太平洋中の諸島はどこもこゝも原始人の棲家となつてしまつた。そこへヨーロッパ人が現はれて、其住民をどれもこれもネグ

リトリーなみに取扱はうとし初めた。

## 七、世界新文化創造の時代

十五世紀末にコロンブスが西印度諸島を發見し、ヴァスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を廻つて印度に至る航路を發見し、十六世紀にマゼランが南米の南端を廻つて太平洋に出ることを知つてから、地球は球形で、ぐるりと一周することが出来ることとわかつた。

かうした發見は主としてポルトガル人とイスパニヤ人との力に由つたが、それを機縁としてポルトガル人は印度に進出し、ゴアを根據地として南支那に伸び、阿媽港を占領して日支貿易に全力を羽搏つた。又イスパニヤ人は南アメリカから太平洋に出で、フィリッピン諸島を占領して、マニラを東洋貿易の根據地とした。後れ馳せに東洋貿易に着手したオランダは、やがて葡西兩國人を凌駕し、ジャバのバタヴィヤを根據地として日本及び支那との通商に従事した。

其頃からぼつ／＼東洋に着目し始めたイギリス人は、印度に主眼を置き、マドラス、ボンベ



イ、カルカッタに居留地を構へて、次第に西葡人を壓迫し、遂に印度を奪取してヴィクトリア女王が其皇帝となり、更にビルマを併せ、マレイ半島を保護領とし、漸次支那を威嚇して香港を取るに至つた。フランスもまた安南を支那から奪ひ、ラオスをタイから奪つて其保護國とした。

かうしてアジアは全くヨーロッパ人のアジアとなり、僅かにタイ國、支那、日本のみが其獨立を保つのみとなつた。しかし、支那は殆ど獨立を失はうとし、タイも亦た絶えざる脅威を受けてゐた。なるほどツンドラ文化は過去數世紀に亘つてアジアに輸入せられ、一時人目を眩ましたけれども、もはやそれは行き詰つた過去文明の殘滓である。それは英米の爲めの搾取機構に過ぎないものである。そこで東洋に於いては日本が先づ起つてアジアの復興を策したが、それは大東亞戰に展開して、米英蘭の勢力を次第に太平洋から驅逐し、アジアのアジア、大東亞共榮圈の完成が將に近からうとしてゐる。他方歐洲に於いては獨伊樞軸が英國勢力の驅逐に努め、英國を援助する米蘇兩國に向つて戰爭を繼續してゐる。

思ふに、かうしてアジアには新アジア文化が結實し、ヨーロッパには新ヨーロッパ文化が結實し、相互の協同によつて世界的新文化といふものが、遠からぬ將來に創造されるに至るであらう。眞に現代は世界史上の偉大な時代である。



## 第十章 大南洋の民俗

### 一、緒言——大南洋

邦人は口癖のやうに『南洋々々』といふが、一體、南洋といふ場合には、どれだけの地域を含んでゐるか、其限界は人々によつて異つてゐるやうである。しかし、此節では南洋に關する認識が大分深まり、そこを『内南洋』と『外南洋』との二つに分けて呼び、またそれらを合せて『大南洋』と呼ぶことも行はれてゐる。

内南洋といふのは大體、我邦の統治してゐる地域のこと、マリアナ諸島、其南に當るカロリン群島、其東に基布するマーシャル諸島を含めるが、マリアナ諸島のサイパン島の南に、グアム島といふ稍々大きい島があつて、それは米國領になつてゐるから、それだけは我邦の統治

地から除外して置くことを忘れてはならぬ。

外南洋といふのは臺灣以南のオセアニアの諸島をさすもので、米領のフィリッピン諸島、蘭領のボルネオ、セレベス、ジャヴァ、スマトラ、ニュー・ギニアの五大島及び附近の小島嶼を初め、オーストラリア委任統治領たるビスマルク諸島、ソロモン諸島を含めるが、オーストラリアをも之に加へて考へる人もある。

ルーミス・ハヴェメーヤ博士の近著『人種誌』では、南洋を四つに分けて、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、マライシアとなし、ミクロネシアには日本領内南洋とハワイ、グアムの二島とを所屬せしめ、ポリネシアにはフレンドリイ、ソサイエチイ、ニュー・ジラランド諸島の外、遠いマルクエーサス、イースタア島をも其中に所屬せしめてゐる。メラネシアはニュー・ギニア以東の蘭領印度スマトラに至るまで、マライ半島とを之に含めてゐる。そしてオーストラリアはタスマニアと共に別區域としてゐるが、これらの地域全體をオーストラリア及びオセアニアに分けてゐる。これは略々我邦で謂ふところの『大南洋』の總念に合致してゐるものである。



しかし我邦で昔から『南洋』といつてゐる概念を史學的に綜合して見ると、廣東以南、印度支那、泰、マライ半島をも含んでゐるのはいふまでもないことで、若干の地理學者がビルマ、印度までも南洋の中に加へてゐたことは争はれない事實である。

大南洋はかうした廣い地域の總稱であるが、其位置は大體に於いて赤道に近く、其自然的環境が殆ど全く一致してゐるので、其社會的環境もまた四地區に於いてさほどの差異がなく、大體之を『南洋的』と呼ぶことが出来るのである。私は今其『南洋的』な民俗を叙述しようといふのだが、こゝに『民俗』といふのは『民道』(Folk-ways)、或は『風俗慣習』(Customs and Manners)などの意味で、狹義のフォークロアの意味ではないことを豫め斷つて置きたい。

民俗は又『文化』といふ語に置き換へても差支ない。文化は大體『生活様態』といふほどの意味を有つてゐるものだが、然らばそれを何々の綱目に分けて記述するかといふことが問題である。これに對して嚴密な意味で答へることは容易でないが、普通には衣裝及び身體裝飾、飲食及び厨具、住居及び家具、航海及び漁撈、器具及び武器、呪術及び信仰、婚姻及び産兒、死亡及び葬儀といふ風に別けて叙述せられるやうである。

## 二、ミクロネシヤの習俗

いくら一般の民俗を述べるにしたところで、之を引括めていふことは無理であるから、大體、前に述べた四大區劃について一々記述することにしよう。

### (一) 人種的考案

私は先づ我邦の委任統治地たるミクロネシヤの習俗を述べ、それを中心として他の地區のそれに觸れることにする。ミクロネシヤのそれに就いては、獨逸人の記述も可也多いやうであるが、邦人のものした報告中では故松村瞭博士の『ミクロネシヤのエスノグラフィ』が一番纏まつてゐる。彼れの分類に従へば、ミクロネシヤの住民は

- 一、パプア人 (Papuan)
- 二、サモア人 (Samoa)
- 三、チャモロ人 (Chamorro)



## 四、カロリン及びマーシャル島人 (Caroline and Marshall Islanders)

の四通りに分けるのが便宜である。第一のバプア人は獨逸が領有してゐた間に、ニュー・ギニア、ソロモン、ニュー・アイルランド、アドミラルチイ、其他の島々から連れて來たもので、ヤルート島とボナペ島とに二十人ばかり住んでゐたが、日本占領後漸次其郷里へ送り還した。第二にサモア人がサイパン島に住んでゐるが、それは流刑者で、それ／＼妻子を伴つてゐるから、總人口は六十人以上に達してゐた。彼等はガラパン村の北東二マイルほどにあるタナパッグ村に住み、約十家族を構成して、郷里サモア島に於ける生活と同一の生活様式を有つてゐる。

第三にチャモロ人はサイパン島に住んでゐるが、本來はマリアナ群島の産で、ヤップ島を其住居の中心としてゐる。彼等の血管には大分濃厚にヨーロッパ人の血液が流れてゐるのみならず、其言語はフィリッピン群島のタガル人のそれと似て居り、其語彙中には大分イスパニヤ語が含まれてゐる。其體質がカロリン群島の土人と異つてゐることも注目すべきである。

第四にカロリン島人及びマーシャル島人は、日本領の住民中重要な種族で、單にこれらの二

島のみならずマリアナ島にも住んでゐる。此種族はトラック島、サイパン島、ヤルート島及び他の島々ではカナカ族と呼ばれてゐる。「カナカ」とはポリネシヤ語の「人」を意味する言葉で、初めはポリネシヤ人へのみ適用されてゐたが、今日ではメラネシヤ人にも適用されてゐる。それで初めはカナカをポリネシヤ人の異名のやうに考へたが、次第に利用の範圍が廣くなり、ミクロネシヤの土人にまで應用されるに至つた。

ミクロネシヤ土人がポリネシヤ種に屬するか否かといふことは、多くの學者が疑問としてゐるところだが、ポリネシヤ種は大體に於いて長身、短頭である。然るにカロリン島人及びマーシャル島人は、反對に、中身であり、頭形は狭頭又は中頭で、顔形もまた長い方である。他の點から觀てもミクロネシヤ人はポリネシヤ人と異つてゐるが、二族を同一場所で同時に比較すると、それが一層はつきりする。カロリン島から來たカナカ族と、ポリネシヤ種であるサモア人とをサイパン島で比較して見た松村博士は、兩者の差異の甚だ大きいことを認めた。

カロリン島、マーシャル島は小島だが、數は甚だ多く、太平洋中に基布してゐるので、其住民の間で若干の差異が起るのは當然である。大體に於いてこれらの諸島人は、トラック、ボナ



べ、クサイーを含む東カロリン群と、バラウ、ヤップを含む西カロリン群との二つに分けることが出来る。第一群は狭頭、中身であり、第二群は中頭、長身である。二群は體質上のみならず民俗上でも異つてゐる。勿論マーシャル島人はカロリン島人と多少異つてゐるが、それを東カロリン群中に包容して置くのは便宜上のことである。

次ぎには民俗について語らう。

(二) 直接身體裝飾

第一に衣裝及び身體裝飾は、人によつて之を色々に分けるが、大方身體裝飾は直接と間接との二つに分け、前者を彩色、文身、疵痕、後者を裝身具、衣服とするのが普通である。

東カロリン群のトラック島では、顔料を以て其顔面を彩色する。顔面彩色は十三歳乃至十五歳の兩性に亘つて試みられる。其顔料はタイクといつて鬱金草の根から造られ、橙黄色を呈したもので、それだけを用ひることもあれば、ココナット油を混ぜて用ひることもある。其彩色文様の種類は

一、眼上横線

- 二、眼下横線
- 三、双頬縦線
- 四、鼻上十字
- 五、鼻上十字及び双頬縦線
- 六、鼻上十字、眼上横線及び双頬縦線
- 七、眉下全面

の七種ある。これらは其初めは何らかのマジック的目的で企てられたが、後次第に其本來目的を忘れ、たゞの裝飾に墮してしまつたものである。西カロリン群のヤップ島では、顔料をレングといふが、それは『黄色』を意味してゐる。此處ではレングを塗ると、氣候の激變した際寒さを感じる事が少いと考へてゐるが、其顔料は強い香を有つてゐるから、それによつて蟲の害を避けようとする事もあつたらしい。

第二の疵痕はトラック島でも、ボナペ島でも、其他の島々でも行はれる慣習である。これは男女兩性に亘つて用ひられるが、女のそれは男のよりも小さい。女の疵痕は上肢の先端外側に



赤豆大の疵をつけるが、男は上臂のみならず、胸部にも疵をつける。パラウ島の疵痕はやはり上臂の上端につけられるが、其文様は並行線或は十字形で、ボナベから輸入せられたものらしい。

第三は入墨で、この島へ往つてもそれを見ることが出来る。子供には入墨をしないけれども、大人は男も女も施し、文様には何らの區域もない。トラック島やボナベ島では、男は上下肢に入墨するが、下肢は殊に広い面積に亘つてそれを施す。ヤルト島で見た老人は、殆ど上半身を入墨で埋めてゐた。文様には制がないやうであるが、大體直線を用ひ、並行線、斜線、縦線、十字等々を交錯し、また三角文、波状文などを用ひるものがあり、最も甚だしきに至つては、下肢の内側に三本の縦線を残し、他を全部入墨したものがあつた。ヤップ、バラウの二島でも入墨は盛んに施されてゐるが、ヤップの一老人は顔を除いて身體全面にそれを施したものがあつた。西カロリン群の入墨は概して鮫の文様を悦ぶが、其理由についてダブリユウ・エッチ・フアーネスは『或人の説によると、鮫の文様はそれを施してゐる者が、游泳の際大魚の攻撃を免れるといふことだ』と云つてゐるが、果して然らば昔倭人が大魚を厭する爲めに、蛟龍

の入墨をしたといふ『魏志』の記述を其儘で、われわれに取つて特に興味を深いのを覚える。

以上の外、涅齒——即ち齒を染めて黒くすることが西カロリン群で行はれてゐる。これは印度支那でも、泰でも見られることで、曾て日本の既婚婦人が皆齒を染めたのは勿論、昔、公家の間には男も涅齒した慣習があつたのと同じく、非常に古い習俗だと考へることが出来る。

### (三) 間接身體裝飾

以上は直接身體裝飾であるが、次ぎには間接身體裝飾を窺つて見よう。

第一に耳飾は多く耳朵に施される。両性に亘つて幼い時耳朵に孔を穿ち、それにマングローヴの葉を挿して段々孔を大きくするが、此方法はミンダナオ島のバゴボ族の間に行はれるものと同一である。トラック島では、孔の大きさに一定の寸法がないけれども、或人の耳孔は一二乃至一三〇ミリメートルの直径を有つてゐた。さて耳飾りの材料は貝殻又は椰子の實で、形は大方環状を呈してゐる。此耳輪作りは島人の仕事の重要な部分で、それが爲めに非常な勞力を費す。耳輪の大きさは區々だが、幅は四乃至九ミリ、厚さは其半分、直径は二乃至三六ミリあり、時としては其表面に彫刻が施される。



又ヤップ島やパラウ島でも耳輪を用ひるが、其孔はトラック島ほど大きくない。ヤップ島の婦人は耳孔に花や葉を挿すことを悦ぶが、パラウ島にも其習はある。キルスの記述に従ふとパラウ婦人の耳飾りの最上品は龜甲製で、長さ一三センチあり、それに海産貝殻が縋めてあつたといふ。

第二に鼻飾りはどうかと見ると、クサイー島の老婦人が鼻隔壁に孔を穿つてゐるので、それは何の爲めかと尋ねたら、曾てそれに鼻飾りを裝備する習俗があつたと答へたといふ。パプア人は今でも尙ほ鼻飾りを用ひてゐるから、昔は今よりすつと廣くそれが行はれてゐたに相違ない。キャブテン・キルスはパラウ島の婦人が鼻隔壁に穿孔して木片を挿してゐたことを報告し、ミクルコー・マクレイも亦た類似の報告をしてゐる。ヤップ島では橙黄樹の針で鼻隔壁に穿孔し、椰子の葉柄をさし込むが、それは松村博士に従へば、さうしなければ靈魂が昇天することが出来ないと思つてゐるからで、同様の信仰はニュー・ギニヤのモツ族の間にも有たれてゐる。

次ぎには装身具について窺はう。先づ第一には頭飾りを調べて見ると、トラック島の男子はもと結髪してゐたが、今日では短く刈つてゐる者が多い。櫛の形や大きさはそれ／＼異ふが、其構造からいふと大體二種類に分れる。一つは木の細い棒を幾本も並べて、柄のところを緊縛したもの、他は扁平な木板に鋸を入れて齒を作つたもので、共に堅長であるから、日本の横櫛とは類を異にしてゐる。ヤップ島の竹櫛も第二種と同じだが、パラウ島のは先端が廣がつてゐる。其長さは一九〇乃至三三〇ミリあり、幅は五四乃至一三八ミリ、皆成人が用ひる。

第二に頸飾りは、トラック島では今は餘り流行らぬが、昔は大抵のものが之を施してゐたやうである。頸飾りは硝子玉即ち南京玉で造り、又貝環を椰子繩にぶら下げて用ひるものもあつた。玉の色は黄或は赤が悦ばれ、其大きさは直徑が一〇乃至一五ミリある。キングスミル島では龜甲製の頸飾りを用ひたことを、アール・パアチントンが報告してゐる。稀には犬、豚、動物の齒牙を頸飾りに用ひるが、それは英領ニュー・ギニヤでは普通のことである。最も單純な頸飾りは植物の花や葉を紐に貫ぬいたもので、クサイー島の採集品が東京帝大の人類學教室に保存されてゐる。ヤップ島では椰子の實の殻を環狀に切り、同形の白色貝殻と共に緒に貫いて用ひる。石竹色の貝殻は最も高價である。又同島の婦人は木槿の内皮を黒く染めて作つた紐を



頸から胸へかけてぶら下げてゐる。

第三の胸飾りと頸飾りとの境界は不明で、後者が胸まで垂下されると前者になる。トラック島の土人は龜甲製の環、其直径の一〇〇ミリもあるものを胸に垂れてゐた。

第四の衣装は近頃大分ヨーロッパ化せられたが、婦人は男子よりも其影響が著るしい。婦人は、白、紅、青などの布で造つた洋服を纏ふが、男子は尙ほ半裸體の状態を續けてゐるものが多い。トラック島の被服材料は芭蕉又は木槿の纖維で、それで方形に織つた布を中央で切り、それに頭を貫ぬいて着る。腰袋は舞踊などの際、立派に飾り立てたものが用ひられる。

第五には腕輪、第六には指輪、第七には踝飾りが用ひられる。いづれも貝製のものが多い。大きな貝製の腕輪はそれをわれわれが嵌めてゐると、重くて仕方がないほどのものがある。

#### (四) 食料と住居

ミクロネシアの食料として、われわれはココナツト、麵包の木、パイナップル、パパヤ、バナナ、パンダヌス、タロー芋、ヤム、甘藷、及び蜜柑を擧げることが出来るけれども、此中最も基本的なものは麵包の木、ココナツト、タロー、ヤムで、それに魚肉と貝肉とが副食物としては常に用ひられる。

どの島にも麵包の木とココナツト椰子とは生へ繁つてゐて、多量の食料を供給してゐるが、二三の島ではタローやヤムを耕作することが出来ないで、それらを一般の常食と見做すことは不適當である。

麵包の木の實は焼いたり蒸したりして食べる。焼く場合には地上に穴を掘つて火を焚き、其中へ石を投げ入れて、それが紅く焼けた頃、其實を木の葉に包んで焼石の上に置くと、ちやうど蒸甘藷のやうな味が出る。蒸す場合には土甕を造るが、其穴は直径一・五〇メートル、深さ三〇乃至五〇センチで、底に石を敷き、其上にマングローヴ其他の木の枝を置いて燃やし、火が熾んになると更に石を穴に投げ入れて赤熱し、其上に緑葉を深さ二〇センチほど並べ、更に其上へ八片に切つた麵包の木の實を圓錐形に積み重ね、こんどは又緑葉を蔽うて、さて中央に孔を掘り、水を注ぐと、湯氣が立つので、其上に又々新しい葉を敷いて湯氣の脱出を防ぎ、三十分ほど経つてから葉を除き、果實を取り出すと、ちやうど良い加減に蒸されてゐる。西カロリン人は土器を造るから、焼いたり蒸したりする以外に煮もする。



發火術は現在では文明國からマッチを輸入するが、それ以前の固有方法は木片を摩擦して發火させた。それをミクロネシア土人はウムカンと呼んでゐた。此方法はポリネシアのものと同じにしてゐる。

飲料、煙草、酒のことは略する。

住居の造り方は東カロリン群島とマーシャル群島とで、必ずしも一致してゐない。トラック島人の家は極めて原始的であるから、それについて詳述しよう。

トラック島の家の敷地は長方形で、廣さ四メートル、長さ七メートルある。四隅に近く四つの穴が掘られ、それに麵包の木の幹を立てる。其樹幹はY字形のものを選び、梁や棟木も同様の材を用ひる。椰子の纖維で作つた繩が釘の代りに用ひられる。軒材は棟木と同一の長さを有ち、屋根はアイヴォリイ・ナットの葉で葺かれ、軒を地上九〇センチまで垂下せしめる。側壁も同じ木の葉で蔽はれ、入口は隅に近く設けられるが、方角のことは考慮に入れられない。入口は廣さ六〇、高さ九〇センチを計へるものもあるが、大抵の場合はそれよりも小さい。それだから匍匐しなければ出入が出来ない。窓はなく、屋根は低く、身を屈めて、漸く家の中央部か

ら出ることが出来る。室内は暗く、鬱陶しい。或家屋では特に入口を設けてないが、それはどこからでも入ることが出来るからである。どんな場合にも床は張られず、地べたにパンダヌスや椰子の葉を敷き、其上に蓆を敷くだけで、家族は皆其上で寝る。室内は恐ろしく汚いから、犬や豚と一所に暮らすことを氣にも留めないやうである。

船小屋は規模が大きく、二三隻の大刳舟を收容することが出来る。それは又一種の面會所として用ひられるが、面會所を土人はウツと呼んでゐる。廣大なものは八〇方メートルもあり、其中に多數の若者が住み得る。船小屋はヤップ、パラウにもある。ヤップ島には土人が『フェ・バイ』と呼ぶクラブが各村に建つてゐる。其建て方は住家も大差ないが、大きさが著るしい爲め、圓柱も亦た大きく、高さ七メートル、直径七〇センチに及ぶものがある。クラブの建物は村の共有で、大體は未婚の若者を之に住ませるわけだが、村の集會には常に之を利用する。パラウのクラブ大建物は只だ一部屋だが、ヤップのは數室に劃られてゐる。メスピル又はモゴルと呼ばれる娘らが各クラブの建物に附いてゐるが、彼等はいはゞ青年の爲めの共有の妻で、大抵は隣村から掠奪して來た女隸である。此メスピル以外の女は誰れでもクラブに入ることを



禁ぜられてゐる。

### (五) 道具と武器

今日では鐵器が外から輸入せられて、どんなものでも必要に應じて獲得せられるが、本來は石器、貝器を用ひてゐた。石器よりは貝器の方が造り易いから、玄武岩のあるトラック島でもボナペ島でも、又珊瑚岩のあるカロリン群島でも、貝を材料として利器を作る事が行はれた。しかし貝製のものは只だ厨具として用ひられるだけで、斧や鑿はもはや使つてゐない。貝斧や貝鑿を手に入れようとする者は、クサイー島又はナンマル島の遺趾を訪ねなくてはならぬ。貝斧は大抵片刃であるが、双刃のものは中央断面が半圓形を呈してゐる。即ち一側が扁平で、他側が凸圓であるが、パラウ島の造船用鑿の如きは此型のものであつた。

武器としては鎗 (Spear)、棍棒 (Cubs)、投石器 (Slings) が用ひられる。トラック島土人は木鎗を用ひるが、勿論、鐵や骨の鎗先をつけない。鎗はマングロヴの木で造り、其全長が二・九〇メートルある。戦争の時には各手に二槍を把り、敵に向つて勇敢に進軍した。ボナペ島の棍棒は堅い木材で造られ、長さは一・二〇メートル乃至一・五メートルあり、其尖端は長さ六

七センチ、廣さが七・五センチあり、或物は尖端に六個の結節がある。トラック土人は之をチャモユと呼ぶが、それは「額を割る」といふ義である。投石器はトラックやボナペで愛用せられ、それによつて兩端の尖つた橢圓形の擲石を擲つ。熟練者は相當遠距離までそれを飛ばすことが出来る。カロリン群島では主として投石器を用ひるが故に、弓矢を使はない。

弓はポリネシヤ群島やマライ群島の土人には知られてゐないが、メラネシヤに於いては射術に巧みな土人が二三には止まらない。フィリッピン群島でも、ネグリトー族は弓矢に堪能である。クリスチャンの記述では、ボナペ島のチョコカライといふ矮軀の原住民は弓矢を引いたとあるが、チョコカライこそはネグリトーのことで、それがカロリン群島まで入り込んでゐた事は驚くべき史實である。

### 三、大南洋の共同文化

以上のやうに一々詳しく述べて來ると、到底果てしがたいから、一先づこゝでミクロネシヤ



の習俗の記述を止め、それによつて讀者に南洋の文化の大體を髣髴せしめようと思ふのであるが、ミクロネシヤは地理的・社會的環境の同似してゐるポリネシヤを代表する事があつても、メラネシヤ、マライシヤのやうな大嶋嶼群を代表することは不可能である。

### (一) 人種の移動

今はこまかい事を云つてゐる暇がない故、極めて大まかに人種上の考察を述べよう。思ふにジャヴァで世界最古の人骨といはれるピテカントロプス・エレクツスが出土して、人類學者は皆東印度諸島に其視線を注ぎ、支那周口店で、これ亦た古いシナントロプス・ペキネンシスの遺骨が発見されて、世界の注意は再び大陸に向けられたが、最近またスラバヤの西方モジョケルトで、ケーニングワルトが五歳児の頭蓋を發掘し、それをホモ・モジョケルテンシス(Homo modjokertensis)と命名してから、又々視線が南方に注ぎ返されることになつたが、さうした古い時代——氷河以前のやうな遠古は姑く置くことにして、ジャヴァから印度、支那に亘る線、中アジヤを假りに人類の發源地とし、そこから南に西に北に東に人類が移動して 地方化し、特殊化して、黒種エチオピクスとなり、白種カウカシクスとなり、黃種モンゴリクスとなり、

褐種アメリカナスとなつたことを承認しなければ、人種のことは一言もいひ得る権利がないわけだ。

ハンチントン博士の單純ではあるが、しかし興味深い頭形指數による文化の地理的分布圖を見れば、單石(Monoliths)及び蛇體・太陽祭儀(Snake and Sun Cults)の存在する地域は、頭形指數が七六乃至七八で、日本附近ではカムチャッカから南西進して日本、滿洲、支那海岸、印度支那、泰、緬甸、馬來半島、オセアニヤの大部分を含む場所がそれに當つてゐる。白鳥處女説話(Swan Maiden Tales)の分布地域は、頭形指數七六乃至八〇であり、レヴィラ婚(Levirate)の分布地域は頭形指數七七乃至八一であり、ゲール帯(Gaelic Belt)の分布地域は、頭形指數七六乃至七八であり、クヴァード(Couvade)の分布地域は頭形指數七六乃至七八であつて、大體前述の場合に同似してゐる。

して見ると、謂ふところの『南洋』は文化的にも人種的にも一つの地域で、小異はあれ、大に就けば、之を大きな一文化圏と見做すことが出来るのである。

かうした場所は非常に古い時代に先づ小人のネグリトト族に占められ、次ぎにインドネシ



ヤ族に占められ、次にモンゴロイド族に占められたと、極めて粗略ではあるが総合的にいふことが出来るのである。これらは黒、白、黄の基本人種で、其後には色々の混淆種族が現はれ、混淆と變化と發展とを累ねて、現在の如き状態に達したといふことを信じなければならぬ。

### (二) 文化の傳播及び發展

如上の人種移動は同時に文化の傳播を伴つて、その地方化、特殊化及び發展化を見たことは争はれない事實であるが、然らば大南洋にはさうした文化傳播の存在を證明し得るが如き徴憑があるか。

ミクロネシアやポリネシアは姑らく除外することにして、メラネシアとマライシアとに共通する文化といふものはあり得る。マライシアといふ地區名は最近の科學的名稱としては不適當だといふので、此頃はインドネシアと呼ぶものが多い。これらの二つを一つにまとめればメラノ・インドネシア文化圏とでもいふことが出来よう。

メラノ・インドネシアに大印度支那半島（印度支那、泰、緬甸は勿論、マライ半島をも含む）を加へた大南洋に於いては、何をさし措いても稻の灌漑耕作をなし、それを主食物としてゐる

ことを主要なる社會・經濟・工藝的事實として擧げなければならぬ。此事實はいはゆるアジア型生活様態の先要條件で、それを非ヨーロッパ的、非アフリカ的、非アメリカ的ならしめる主因であると考へても差支へのないものである。

メラノ・インドネシア圏に於ける共同文化として第二に指摘し得べきものは、いはゆる腕木附剝舟（Out-rigger Canoes）で、それは處に於いてはオセアニア全體に擴がつてゐるのみならず、時に於いては紀元前後から現代にまで及んでゐる。それを表はした古い藝術品は、ジャバのポロブール石壁に見られた彫刻で、それが本來は大型のものであり、どんな大海をも越え得べき耐波性を有つたところの航洋船であつたことをわれわれに明示してゐる。果して然らば現代の腕木附剝舟はその殘存形又は墮落形として見なければならぬのであつて、古代に於けるオセアニア住民の航海能力が大きく、優に太平洋を横斷し得たことを推論せしめるのである。

第三にメラノ・インドネシア圏に於ける共同文化として、われわれは平和的・協力的政治組織を擧げることが出来る。遠古のいはゆる平和國時代は之を夢想として見逃して差支へない。



少くとも種族的、或は民族的意識が發達した後に於いても、種族主義、民族主義の範疇内に於いて協力し、平和的・經濟的に共同動作を執ることが出來た。勿論、中には『ロツバア』又は『セフト』の諺名を歐人に負はされた種族も圈内の住民中にあることはあるが、それは本來形でなく、墮落形若しくは疾病形であつたといひ得る。

如上の三つは本當に大南洋の文化的三徴表であり、其全住民に共同的に有たれてゐるものである。素よりこれらの外に尙ほ幾多の共通的小文化はあり得ようが、最も決定的威力を帶著してゐるものは、叙上の三大生活様態である。それらは一面物的であると同時に、他面心的でもあつて、物心双關的に南洋的生活様態を規定して來たのである。しかも大南洋が獨立と繁榮とを保持し得ずして今日の状態を呈したのは、全く利己的・獨善的なヨーロッパ人の搾取の結果である。

#### 四、結言——共榮圏の設置

單石、蛇體、太陽祭儀、レヴィラ婚、ゲール帶、クヴァードの分布が示唆するところの大南洋は、自然的環境から觀れば海流と季節風とによつて結合せられ、離れようとしても離れることの出來ない地域、いはゞ不可分離的關係のある共同的一地區である。

歴史的事實から觀ても、日本と大陸及び南洋との關係は超時代的で、先史時代神話時代から既に無間籠、埴土舟、岩楠船によつて、安南や印度の竹籠舟、チガリ、チャツチイ、及び楠製ナブと結合せられたが、古代の遣隋船、遣唐船から宋元明清貿易を経て、近代早期の南洋貿易に至るまで、絶えず大南洋との交通によつて物資の過不足を調節し、文化の優劣を匡救して來た。かうして大南洋はともかくも自然的・文化的に大きな一環をなす事が出來たのであつた。

然るに十五、六世紀以來、ヨーロッパ人は其住地の關係から物資の索求に忙がしく、遂に遠方憧憬に陥つて東方に進出し來り、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリス、フランスは相尋いで大南洋を侵掠し、其住民の勞力と土地の生産とを奪掠して、これをヨーロッパに運び去つた。これが大南洋を疲弊せしめ、十分發展し得べき其住民を弱化、劣化せしめた最大原因である。此原因をさへ除却すれば、印度には、支那には、印度支那には、東印度諸島には、



オセアニヤには、光榮と歡喜との日光が再びさし初めること必定である。

我日本は率先して東亞共榮圈の建設を提唱し、滿洲國、支那共和國、印度支那政府、泰國と握手し、之に賛意を表さないものを漸次齟齬せしめ、日本と協同してヨーロッパの搾取から解放せられた大南洋を地球上に出現せしめようとしてゐる。

思ふに文化は先づ中央地帯に成り、次に凍原地帯に入つて發展し、更に藪林地帯に移つて、曠古の一大創生を見ようとしてゐる今日、それらの三地帯を兼ねてゐる日本こそは、指導的立場に在つて、東亞共榮圈を完成すべき實力を有つものである。東亞共榮圈とは之を他の言葉に置き換へれば『大南洋共榮圈』ともいふことが出来る。われわれはどこまでも必成必勝を期して、此新運動を完成せしめ、それを妨ぐるものを打破しなければならぬのである。(昭和一六、八、一〇)

## 第十一章 南方諸民族の社會慣習

### 一、緒言

東半球の東端に位置して、久しい間、物質、精神、兩文化の蓄積と昂揚とを企圖、實行し來つた日本民族は、過去一世紀間の努力によつて略々其理想を實現し得たので、世界に瀰漫してゐるところの不合理的、不均衡的、不調和的な舊體制を打破して、反對に合理的、均衡的、調和的な新體制を建設することを企畫し、先づ試驗的に東亞から其運動に取りかゝらうといふので、沈黙と雌伏とを破つて一方呼號し、他方活躍し初めたのは昭和六年のことである。

それ以來、我邦の新體制樹立運動は繼續し、昭和十二年の日支事變發生を契機として、遂に大東亞戰爭を捲き起し、それによつて大東亞共榮圈の樹立を容易ならしめようとした。何しろ



世界の富力を搾取して我身に著け、其領土に日の没することがないのを自慢してゐるイギリスと、其分身に過ぎないところのアメリカ合衆國とを對手にすることだから、他民族は勿論、日本民族それ自身の中にすら、戦争の成行を心配してゐるものもあつたけれど、其民族的優秀性が軍事、經濟、教育、宗教などの上に現はれて、自國から云へばこそ當然であれ、世界から觀れば全然『神業』的成效をなし、瞬く間に太平洋上の敵性勢力を驅逐し、一時『不安洋』であつたところの一大水域を、字義通りの『太平洋』に復原し、更にそれを印度洋、南太平洋に及ぼさうとしてゐることは現前の事實である。

かうして日本の提唱してゐる大東亞共榮圈の成立は、もはや些の疑ひ、憂ひ、惧れをもたぬものとなつた。それを世間では往々にして、日本の武力が強い爲め、經濟力が足つてゐる爲めだと解してゐるが、勿論、これらの二つは大切な動因に違ひない。しかし、もつと大切な因子は、共榮圈内の諸民衆が日本の提唱する大東亞共榮圈の本質を理解し、それに共鳴し、その成立を希望し、その完了を援助することであると思ふ。

縷述するまでもなく、大東亞共榮圈は或一國家の『領土擴大』を糊塗する代名詞ではなく、

生物學が指示するところの『生命網』擴大を實現する實名詞である。世界の諸民族が一團となつて『四海同胞』を具現する準備工作として、先づ大東亞を一個の精神的・物質的協同體に纏めようとするものである。即ち大東亞共榮圈は日本だけの爲めのものではなく、大東亞民族全體の爲めのものであり、日本は僅かに其一成素としての地位を保つに過ぎないのである。

かうした性質の共榮圈を完成する爲めには、在來の植民地や保護領や屬領を統治したところの理論や方法は何の役にも立たないのである。それは全く新しい理論に基づいたところの、全く新しい方法でなくてはならない。それを具體的にいひ表はすことは困難であるが、建國當初の聖勅に現はれる『養正』、『積慶』、『重暉』といふ含蓄の多い三要素を具へた理想的統治でなくてはならぬといふことは言明し得るのである。かうした新統治法を制約する『理想的』といふ接頭語は、これを『科學的』、或は『人類學的』といふ接頭語に置き換へても差支へない。其理由を次ぎに簡単に述べて見よう。

人類學は世界の人類全體を取扱ふところの『八紘一字』的科學であるが、それを主として肉體を取扱ふ體質人類學、主として文化を取扱ふ文化人類學、主として人類の實際生活を取扱ふ



ところの應用人類學の三つに別ける。此中、應用人類學は最も新しい組織で、まだ十分立派な體系を具へてゐないが、それに依らなければ眞の『共榮園』統治が出来ないことは略々明らかである。

或土地に人間が住み、そこに文化を造り上げるのであるから、土地と人種と文化との交聯は不可分離であるが、それを主として研究するのが應用人類學である。應用人類學に在つては、宗として言語、行政、及び法律を取扱はなければならぬやうに、たとへばテムブル卿の如き學者は説いたが、それは舊體制下の概念であつて、新體制下に於いては前述の地・人・文的三一致を歐的とすべきことはいふまでもない。これら三要素中の一つである文化は、これを『生活様態』だと定義してゐるものもあるほど、あらゆる文化綱目を含んでゐるが、中でも一番大切なのは社會規制でなくてはならぬ。

私は今試みに、大東亞共榮園から、北方と西方とを除いて南方だけを選び、其中から更に我邦と密接の關係あるインドネシヤ、メラネシヤ、ポリネシヤの三地域に於ける社會規制を記述し、それらを知悉することなしには、どんな行政をも行ふことが出来ないことを示唆して見よ

うとする。ほんの一夜漬に過ぎないものではあるが、記述は重にハートランドに據つたから、讀者諸君は幾多の暗示をそれから抽出し得ることゝ信ずる。

## 二、インドネシヤの社會慣習

### (一) メナンカバウ族

印度洋上の諸島には、今尙ほ母系家族或は其殘存形が見られる。其最も完全な習俗はスマトラ島のパダン高地に住んでゐるメナンカバウといふマレイ族の間に残つてゐる。

メナンカバウ族は農耕民衆で、若干の家屋が群つて村落をなし、また其村落が若干集つて郡をなしてゐる。彼等の村落はいくつかの氏族に分けられるが、いづれも系統は婦人の血を引くことに定まつてゐる。これらの諸氏族はネガリ即ち郡の中に散らばつてゐるけれども、亂婚的なところは少しもなく、スク即ち氏族の成員は一所に棲んで、コタ即ち村落を構成してゐる。スク同士の結婚は嚴禁せられてゐる。女は結婚しても自分のスクに屬し、自分のコタに留り、



決して自分の生れ、且つ成長した家を捨て去ることはない。同様に夫もまた自分のスクに残り、其スクの屬するコタに棲んでゐる。

かうした婚姻には、結婚した新夫婦を同棲せしめる掟が伴はない。然らば結婚生活はどうして實現されるかといふと、單に夫が妻を訪問するといふ形を取るばかりである。夫は日々妻の家に来て、稲田で働らく妻を助け、また午餐を共にするが、それは珍らしい間のことで、後は訪問の回数も減り、晝間はめつたに來なくなり、たゞ日の暮れに妻の家に来て、餘程信用のあるものでも、翌朝まで返まるぐらゐが關の山である。

家族はかうした次第で、夫と妻と子供とを含まないのである。つまり夫婦は共棲しないといふのが原則であるから、家族は單に母親と其子ら及び遠い血筋のものから成立し、家族長は大抵の場合、母親の長兄が勤めるが、子供らに對する權利義務は世の常の父親と殆ど同一程度のものである。そして實際の父親は、それに對して何らの容喙をもすることが出來ない。彼れは自分のスク、自分の母親の家族、自分の母親の後裔に屬してゐるので、たとへ長兄であらうとも、其義務と相關權とは全く姉妹の子供らの爲めに存するわけである。子供らは彼れを、叔父、

母親の兄弟として眺め、自分らの父親としてではなく、給與者及び支配者として眺めるのである。

財産は二種に區別せられる。第一種は家族財産で、共有に屬し、家族長がそれを管理する。第二種は個人財産で、其個人の方で儲けられたものである。夫婦が共稼ぎで得た財産は之を共有とする。男が死ぬると、其屬してゐる家族の族有財産に對する利權は、其家族に遺され、寡婦や子供には傳へられない。又私有財産は其兄弟、姉妹、及び姉妹の子供らに繼承せられる。夫婦の共有財産は、一方に於いては遺族に分けられ、他方に於いては相續者に分けられる。女が死ぬると、其子供らが相續するが、子供らがないと兄弟や姉妹が彼等に代る。夫は何らの分け前をも貰はない。男が死ぬると、其相續者は母親と母親の子孫とである。若し男女双方の生前に於ける婚姻状態が堅固であつたら、其共有財産は折半せられるが、子供らは妻と一所に棲む。尊稱や榮位やも財産と同様の方法で繼承せられる。

### (二) スマトラのアッチェー族とバタク族

以上はメナンカバウ族の間に見られた母系的社會規制であつたが、大陸文明の影響を受けて



次第に變化し、今日ではもはや父系的機構が成り立たうとしてゐる。さうした變化は獨りメナ  
ンカバウ族のみならず、スマトラ全體の上に起つてゐる。其一例として長年オランダの統治に  
反抗したアッチェー族の慣習について語らう。

アッチェー族は久しい以前から回教を信奉してゐるが、彼等の古代以來の社會慣習は、信教  
とは無關係に支持せられて來た。若し夫の家が妻の家に近ければ、彼れは彼女の家に棲むこと  
になり、決して女に其兩親の家を捨てしめるやうな事をしないのがアッチェー族の掟である。  
若しも夫の家が相當に遠い場合には、其狀況に應じて、夫から妻の方へ訪ねてゆくか、或は自  
分の家を妻の家と交換するか、二者の中一者を選ぶことにする。婚姻が成立すると、夫は妻に  
對して十分の贈物をする以外に、毎月一定の贈物をなし、また回教の大宴會二回分の食料をも  
贈給しなければならぬ。結納金一ブンカイ（二十五弗相當）に對して、まる一年間花嫁は兩親  
から扶養せられることになるが、結納金が盡きると、妻の扶養は夫一人の義務となり、たとへ  
其期限が來なくとも妻に對しては全責任を負ふ。とはいふものの、妻は夫の家に移らうとする  
様子を見せない。初兒の出産費は兩親で引受ける掟だから、夫の支出はどんな種類のものでも

總て好意上のものと解せられる。

パタク族はアッチェー族の南に住んでゐる種族で、東印度諸島の他の住民と同じく、マレイ  
起原ではあるが、其文化は一段の進歩を見せ、父系繼承と奴隸使用とを實行してゐる。然るに  
駭くべきことには、或自由民の男が奴隸の女と結婚すると、たとへ合法的婚姻であつても、其  
子は奴隸階級に屬せしめられるのに、奴隸の男と結婚して産んだ自由民の女の子は自由民であ  
る。又二人の異つた主人に仕へる奴隸が結婚したら、其子供らは男の側でない主人、即ち女の  
側の主人の奴隸になる。此慣習法は先行してゐた母系段階の殘物に過ぎないので、其證據は  
外にも少からずある。

セレベス島のマカッサル族やブギ族の間で、貴種の男が賤種の女と結婚すると、其子供らの  
半分だけを自分の階級に入れる。然るに貴女が賤男と結婚すると、其子供らは全部母親の階級  
に入れられる。

### (三) モルッカ諸島の婚姻と財産

モルッカ諸島に於いても、父系繼承の進行過程を痕づけ得る材料がいくらかもある。ルアン・



セルマタ群では、結納金を支拂はずに、夫は妻の家庭に入り、其子供らを其家族の成員に加へる。遺産は女系で相續せられる。夫は自分の武器と被服との外、どんな個人的財産をも有たない。彼れが死ぬと、それらは何でも彼れの男兒らにゆき、殘餘は寡婦と其子供らに遺される。

隣接してゐるババル群島では、結納金を出すけれども、それは母系家族から花嫁を移す爲めのものではなく、只だ同棲する権利を得る爲めのものらしい。何故なれば、良人は妻に従つて妻の家に棲み、其子供らは妻の家族に編屬せしめられるからである。若し男が七人もの妻を有つことにすれば、其妻はそれ／＼其母の家に住み續けるから、餘程の富を有たなければならぬ。それにも増して花やかなのは、他部落の女を捕へて連れ戻ることだが、其場合、報酬を拂ふにしても、拂はぬにしても、子供らは父親に従ふことになる。各部落には小さな寡頭的共和政が布かれ、家族長らの首長と次長とで統治してゐるが、さうした人々の位地は皆な母系を傳はつて繼承せられる。家長の死後に遺つた財産は、其寡婦が管理するけれど、若し寡婦がなければ長女または未婚の長男が管理する。長男が未婚の間は、首長に管理せられる家族の財産は殖える一方だが、一たび結婚すれば、所得は妻の家に行くことになり、彼れは兩親の財産について

どんな要求をもすることが出来ない。

モルツカ諸島では、未婚の兩性の間に自由な交際が許され、原則として忸れ合の後に婚姻が起るらしい。結納を拂はない場合には、新郎は新婦の家に入り、其子供らは妻の家族に編屬せられる。新郎は姑らくしてから離れた家屋を造ることがあるけれども、結納を拂はなければ獨立は認められない。

セラントラオ群島やゴロン群島の住民は、回教を奉じた爲めに、いつしか婚姻慣習に其影響を受けたが、それでもまだ興味深い昔日の風習が残つてゐる。婚約が成立すると、青年は花嫁の父親の家に行き、兩親を助けて、花嫁と同食する。結納はいつも一度には支拂はれない。其支拂が完了しない中は、どんな子供らも皆な妻の家族に編入するが、支拂が済むと直ぐ子供らを良人の籍に移す。

ワッペラ島には二様の婚姻様式が併存してゐる。一つは公開婚であり、他は秘密婚である。公開婚に於いては結納が支拂はれ、贈物が交換せられ、新婦は男の家で男の手に引渡されるが、秘密婚に於いては花婿はそつと來て、愛人と同食し、兩親に見つけられるまで逗留する。そし